

ぼっちアートオンライン ン(凍結)

風沙双海

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ひとりぼっちの少年は、やはり失敗した。

けれど、誰にでも変化はある。変わることはある。だからこそ、踏み出そうとしていた。踏み出すはずだった。

……なのに。

突如として訪れた命懸けのゲーム。クリアする以外に生き延びる方法はなく、ゲームでの死はリアルでの死を意味する。

「……帰ってやる」

絶望的な状況下で、ひとりぼっちの少年は一人決意する。

SAOことソードアートオンラインと俺ガイルことやはり俺の青春ラブコメはまちがっている。のクロス小説。

原作とは一部設定が異なりますが、ご容赦ください。

キリアスはございません。そちらの派閥の方もご容赦ください。

俺ガイルは八巻終了後になっております。

(☆)とついたものは現実での話となっております。

再筆に伴い凍結しました。詳しくは活動報告にてよろしく願います。

目次

E p i s o d e 2, p a r t t 4 	E p i s o d e 2, p a r t t 3 	E p i s o d e 2, p a r t t 2 	99	E p i s o d e 2, p a r t t 1 (☆)	E p i s o d e 1, p a r t t 5 	E p i s o d e 1, p a r t t 4 	E p i s o d e 1, p a r t t 3 	E p i s o d e 1, p a r t t 2 	E p i s o d e 1, p a r t t 1 	プロ ロ ー グ ” 現 実 ”	プロ ロ ー グ ” 八 幡 ”			20	1	131	118	107
---	---	---	----	--	---	---	---	---	---	---------------------------------------	---------------------------------------	--	--	----	---	-----	-----	-----

E p i s o d e 3, p a r t t 7 	E p i s o d e 3, p a r t t 6 	E p i s o d e 3, p a r t t 5 	E p i s o d e 3, p a r t t 4 	E p i s o d e 3, p a r t t 3 	E p i s o d e 3, p a r t t 2 	E p i s o d e 3, p a r t t 1 	E x t r a l 	E p i s o d e 2, p a r t t 9 	E p i s o d e 2, p a r t t 8 	E p i s o d e 2, p a r t t 7 	E p i s o d e 2, p a r t t 6 	E p i s o d e 2, p a r t t 5 	269	259	249	237	229	220	214	206	189	175	167	157	146
---	---	---	---	---	---	---	------------------------------------	---	---	---	---	---	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

E p i s o d e 5, p a r t 2 	E p i s o d e 5, p a r t 1 	E p i s o d e 4, p a r t 9 	E p i s o d e 4, p a r t 8 	E p i s o d e 4, p a r t 7 	E p i s o d e 4, p a r t 6 	E p i s o d e 4, p a r t 5 	E p i s o d e 4, p a r t 4 	309	E p i s o d e 4, p a r t 3 (☆)	E p i s o d e 4, p a r t 2 	E p i s o d e 4, p a r t 1 	E p i s o d e 3, p a r t 8
395	388	377	369	355	346	329	321			299	291	281

E p i s o d e 6, p a r t 4 	E p i s o d e 6, p a r t 3 	E p i s o d e 6, p a r t 2 	E p i s o d e 6, p a r t 1 	492	E p i s o d e 5, p a r t 1 0	E p i s o d e 5, p a r t 9 	E p i s o d e 5, p a r t 8 	E p i s o d e 5, p a r t 7 	E p i s o d e 5, p a r t 6 	E p i s o d e 5, p a r t 5 	E p i s o d e 5, p a r t 4 	E p i s o d e 5, p a r t 3
530	520	511	502			478	463	454	442	433	422	413

E p i s o d e 7, p a r t 2 	E p i s o d e 7, p a r t 1 	595	E p i s o d e 6, p a r t 1 0	588	E p i s o d e 6, p a r t 9 (☆)	E p i s o d e 6, p a r t 8 	E p i s o d e 6, p a r t 7 	E p i s o d e 6, p a r t 6 	E p i s o d e 6, p a r t 5 	616	605	579	571	563	541
--	--	-----	---	-----	---	--	--	--	--	-----	-----	-----	-----	-----	-----

プロローグ” 八幡”

「……はい、雪ノ下です」

受話器の向こう、呼び出し音が二回くらい鳴ってからあいつの声が聞こえた。この早さで出たってことは由比ヶ浜もちゃんと伝えてくれていたようだ。

「雪ノ下、俺だ。比企谷だ。いつもみたいな返しは今求めてない。だから簡潔に、俺の要件だけ告げる」

「……らしくないわね。あなた、そういう人だったかしら？」

「自分でも驚いてるんだ、あまり言わないでくれ。それくらいには、あの場所に思い入れがあるんだよ、俺も」

「っ……」

雪ノ下が息を飲む音が聞こえた。そうだ、最初からこうしていれば良かった。そうすれば、今俺はこうやって身を切る思いで由比ヶ浜に、雪ノ下に電話なんかしなくて良かったんだ。

わざわざ由比ヶ浜に俺の本音を言っつて、雪ノ下の番号を聞いて、こうして今度は雪ノ下に電話して。

……ぼっちが無茶をするな、なんて自嘲的な笑みが浮かんだが、すぐに消すことにする。今はそういうのはどうでもいい。

「あなた、比企谷くんなの？」

「別人なのかもな。三人の居場所が心地よくて、柄にもなく守ろうとして、その結果がこの様だ」

「……ちがう。それは——」

「いい、雪ノ下。それは今度聞く。来週の土曜日、暇か？」

「え？ ええ……予定はないわ」

「じゃあ、午後二時にサイゼに集合な。由比ヶ浜も来る。俺発案の呼び出しだ、ドタキャンはするなよ？」

「……なんの、つもりなの？」

「薄々わかってるんだろ？ 俺とお前と由比ヶ浜、この三人で話すことなんか一つしかないだろ」

「比企谷くん、私は……」

「そういうのは当日聞く。……本音を話す覚悟はしていくからな。これだけは、逃げねえよ」

「……………わかったわ。比企谷くん、その日に落ち合いましょう。先駆けて行言うのは

ダメかもしれないけど……ありがとう」

「どう転ぶかはまだわかんないから、早いんじゃないか？」

「それでもよ。……電話は良くないわね。余計なことまで話しそう」

「それには同意する。……じゃあな、雪ノ下」

「ええ、またね。比企谷くん」

ブツ。と音声が途切れて、通話の終了を知らせてくれた。俺は思いきり息を吸って、吐きながらその場にへたり込むようにして天井を見上げた。

「……変わるってのは、こういうことなのか」

わからない。わからないが、わからないなりに多少はやってみるしかない。それだけ俺の中で奉仕部が大きくなっていったのも事実だし、この電話で救われたような気にも

なっていた。

「由比ヶ浜も泣かせちゃったしな……はあ、ぼっちに求めるものが多すぎな気がするな、いろいろと」

由比ヶ浜に俺の本音を告げたら、あいつは電話越しに泣いて喜んでいた。一度無理矢理にでも距離を置こうとした時と、今と……あいつにも頭が上がらないかもしれないな。

ふと、自分の思考に苦笑いが浮かぶ、俺もなんだかんだで多感なお年頃、目が腐ってしようと影響は受ける、ということか。

「……はっ」

笑ってやった。とりあえず、これでいいのだろう。

——一色いろはによる生徒会選挙のいざこざで、俺は雪ノ下の思惑を知りながらも、奉仕部を守る為に自分を曲げてまで、一色を生徒会長にしたてあげた。

結果として雪ノ下は奉仕部におり、生徒会長一色いろはも順調、何も変わらないはず

だった。”表面的”には。

しかし、雪ノ下雪乃は俺に失望したのだろう。そもそも、期待などするなと言いたいが俺自身、文化祭の出来事で雪ノ下に失望していたのだからお互い様だ。以来、姉に比べるとひどく出来ない仮面をつけて俺達に接するようになってしまった。

責任は俺にもある。何より、あんな雪ノ下と泣きそうな由比ヶ浜を見ていたくない。俺は、俺のためにまた奮起することにした。何を言うかわからない、どうなるかもわからない。が、間違いなく踏み出せた一步に俺は素直に喜ぶことにした。今の俺の目、元に戻ってないかな? ……ないか。

「やっ、と」

本件を終わらせて、俺は机の上にある”それ”を見つめた。

ナーヴギア。今日から始まる、SAO（ソードアートオンライン）というネットゲームを遊ぶ為の媒体だ。フルダイブ型の大型MMORPGで、中学時代からこの手のゲームを遊んでいる身としてはかなり興味のそそられるものである。……ゲームの中ならばいつでも話せるんだよ。リアルより充実してんだよ言わせんな恥ずかしい。

と、とにかく。これは妹の小町がクジか何かで当てていたようで、そのまま俺のもと

へ来たものである。持つべきものは可愛い妹だ。あいつもやりたいたっていたので、先に俺が進んでいつか引っ張ってやる予定だ。

「サービスは昼から……あと五分だな。よし」

予想よりも重いそれを頭につけて、俺はベッドへと横になった。
来週は一大イベントが迫ってるからな、今のうちに楽しんでおくとしよう。

「……時間か。よし、行くか。」

”リンクスタート”」

瞬間的に、俺の意識は闇へと飲まれていった。

「つと、ここが”はじまりの街”か。すげえな、ファンタジーの世界に入り込んだみたいだ」

こりや、ハマる人はハマるな。受験生にもなるわけだし、あまりやり過ぎないようにはしないと……

まあ、ちよつとくらいはいいか。

視界の左上にはキャラクターイト時に付けた名前“H a c h i m a n”と俺の体力バー。おそらく、俺の外見も黒髪の背の高い青年になっているはずだ。

さて、ネットゲで最初にやることは一つ。

「モンスター、狩ってみるか」

どこか足取り軽く、俺はフィールドへと繰り出していった。

「いまいちよくわかんねえな……ソードスキルが安定して出ない」

適当にモンスターを狩って一時間。ソードスキルについて、俺は一人項垂れていた。別段、このゲームは他のネットゲよりも通常の攻撃に重きを置くのか倒せなくもないんだが、やっぱり必殺技的なのは欲しい。それに先ほど出せたソードスキルの威力は高く、

やはりあると便利だろう。

「……あれ、沸かないな」

「他にも誰か……あ、いたな。おーい！」

ふと、後ろから声が聞こえたので、振り返る。ネットゲ内なら顔も違うからぼっちスキルは発動しづらい。

会話もしやすいしな。

「……俺か？」

「他に誰がいるんだよ。お前さん、ここで狩ってたのか？」

「あー、まあな。そっちはパーティか？」

バンダナを巻いた男に、黒髪の男。黒髪の男はじつところちを見ていて、バンダナの

男は笑顔を浮かべた。

「いや、今このキリトにゲームを教わってんだ。こいつ、ベータテスターだから上手いんだよ」

「おー、ならちようどいい。俺も教えてもらえないか？ ソードスキルが安定して出ないんだよ」

「ああ、構わない。えっと……ハッチマン？」

「なんだそれ、ワイリーにでも作られたロボットかよ。リーフシールドとか落とさないからな？」

「ハッチマンだ。そつちは……」

「俺はキリト。こつちがクラインだ」

ベータテスターの黒いのはキリト、赤いバンダナはクラインだな。よし、覚えた。雪ノ下や由比ヶ浜も、ネットゲでの俺のコミュ力には驚くだろうな。……オフ会とかはとてもしゃないけど行く気になれないが。

「お前さんもかー。ソードスキルって安定しないよな？ 今レベルいくつだ？ 俺はさつき2になったんだ」

軽い調子で話しかけてくるクライン。リアルじゃとてもしゃないが上手く話せる気がしない。ネットゲってすげー。

「今3だ。黙々と狩ってたんだよ」

「……………え？」

「どうした？」

「ソードスキルも安定しないのに、か？」

「別になくても狩れるからな」

どうしたんだキリトのやつ。別に何も凄いことをしてるわけでもないだろうに……

「……ちようどいい。あれと戦ってみてくれないか？」

「ん？ ああ、わかった」

腰に差した剣を抜いて右手に構える。俺のこの武器はキリトと同じ片手剣だが、差す位置が違う。キリトは背負うように携帯してるが、俺は刀のように腰に差している。これはまあ好みの問題で、特に性能に差はない。

目の前には先ほど何回も倒したイノシシのモンスター。

「……ふっ」

一息ついて、まずは一足飛びに一撃。返す刀でもう一撃。

「おお」

「早い……」

クラインとキリトの声が聞こえる。ほんととネットゲすげー。リアルでこんな称賛もらうことなんか絶対ないぞ俺。……言ってて悲しいけど。

「よつと……これで終わりだ」

繰り返すこと数回。滅多斬りにあったモンスターは綺麗な色を出して消滅した。

ソードスキル、結局出せなかったな……

「お、レベル上がった」

「おめでとう。ハチマンはあれだな、ゲームが上手いんだな」

「そ、そうか？」

やめろ、ネトゲとはいえぼっちは手放しで誉められるのには弱いんだよ。

「敏捷極振りだろ？ それ。手数でDPS稼ぐタイプなんだな。というか、それでソードスキル使えないとか勿体ないぞ」

ふむ、キリトはよく見てたようで、俺のスキル振りに気づいていたらしい。

まあ、結局ぼっちな俺としては逃げる足もないとだからってことで敏捷に極振りすることが多い。今回も、ゲームスタート時に振ったポイントとレベルアップでのポイントは敏捷に七割、腕力に三割といった配分で振っている。

「レベル、俺も抜かれちゃったな。よし、抜き返す為にも三人でしばらくやろうぜ」

キリトの声に、俺とクラインは一も二もなく頷いたのだった。

何時間経っていただろう。あれから俺はキリトやクラインと狩り続け、ソードスキルはもちろんレベルも全員5になっていた。キリト曰く、次の街の敵でも安全なマージナルでやれるレベルであるらしい。

「さて、俺は一旦落ちるかな。ピザ頼んであるんだよ」

「俺もそろそろ夕飯だな。食ったら次の街に行ってみるか」

「ならハチマン、俺も行くよ。パーティで行った方が道中も楽だろ？」

「……だな。よし、ならすぐ食ってくるか……あれ？」

そんなわけでログアウトしようかとコマンド探すと、どうにもログアウトがない。いや、ないってなんだよ。おかしいだろ。

「ログアウト……できない？」

「なーに言っただよハチマン……って、あれ？　おい、マジでねーぞ！」

「……おかしい。サーバー側からの何か、か？」

キリトがぶつぶつと何かを呟いている。

……いや、言いたいことはわからなくもない。が――

「うおっ！　なんだこれ！」

「これは……転移？」

突如として俺とキリト、クラインは青い光に包まれていた。
移動先にて目に入ったのは広場。ここは、はじまりの街の広場か。

「あいつらは……」

いた、けど遠い。くそ、またぼっちか……
つてそうじゃない。なんなんだ、これは……

「……」

このゲームの製作者の名前を名乗る人間から伝えられたことを反芻する。

曰く、俺はこのゲームに閉じ込められた。

曰く、ナーヴギアは外そうとすると脳を焼き切る。

曰く、もう二百人ほど死んでいる。

曰く、HPが0になったらリアルでも死ぬ。

リアルと寸分変わらぬ姿になった俺は、腐った目すら忘れて立ち尽くした。

「……そんな、ばかな……」

気づけば、キリトもクラインもない。パニック状態の街の中で、俺は一人空を見上

げた。……あいつらも平常心ではいられないだろう。俺もだ。

「ふぎ……けるなよ……」

俺はあいつらに、雪ノ下と由比ヶ浜に言うことがあるんだ。

謝ることが……あるんだ……

「ふぎけるなあつー！」

何年ぶりにか、大声をあげた気がする。自分にこんな声が出せたことに驚きが隠せなかった。

「死ねるか。こんなところで。俺は戻る。あいつらに謝らないといけないんだ。こんなところでビビってられるか。」

……誰が小町を家で待つんだ。誰が由比ヶ浜に、雪ノ下に謝るんだ。誰が、奉仕部を元に戻したいんだ」

どれくらいかかるかわからない。間違いなく、約束の日には間に合わないだろう。初めてだ、こんなに感情が落ち着かないのは初めてだ。

「……謝らなきゃいけないことが、増えたな。くそ、雪ノ下辺りに思いきり罵倒されそう
だ」

……やってやる。クリアできないと帰れないならクリアする。負けるのには慣れて
ようと、死ぬことを許容した覚えはない。

絶対に、俺はあいつらの所へ帰る。帰って、やる。

プロローグ” 現実”

「由比ヶ浜さんっ！」

「ゆきのんー！」

SAOの製作者、茅場による宣告から数時間後の病室にて、雪ノ下雪乃は自らの部活の顧問、平塚静に連れられて病室の一室に来ていた。

既に病室には比企谷八幡の妹、比企谷小町、彼の両親、彼女の友人にして彼のクラスメイトであり部活仲間の由比ヶ浜結衣、そして何故か彼女の姉である雪ノ下陽乃の姿があった。

病室の中央には、横たわる一人の人間。頭には先ほどの茅場の宣告にあつたナーヴギアが取り付けられており、本人は安らかに眠っている。目さえ腐っていなければイケメンとは本人談だったか、幼さが残る表情には、普段の陰湿さが存在していなかった。

「……彼は」

「大丈夫、生きている」

へたり、とその場に座り込む雪乃。その姿に限界を迎えてしまったのか、結衣は声をあげて泣き出してしまった。

「……陽乃、二人を連れて外へ。落ち着くまで見ていてやれ」

「そうだね。……私も、あまり落ち着けてないんどけどね？」

「わかっている。……頼んだぞ」

三人の女子が部屋を出ていき、八幡の両親は改めて静へと礼をした。

「……この子、あんなに可愛い子と知り合いだっただけですね」

「本人は頑なに同じ部活の女子だ、と言うと思いますが……他にも、交友関係は広いです

よ。本人は否定すると思いますが」

「……私、八幡のこと、何も知らない……お兄ちゃんだから、大人びてるからって、全部任せて……っ」

「お前……」

「お母さん……」

「そう思っているのなら、彼が帰ってきた時に、しっかりと迎えてあげてください。
比企谷も、まだただの高校生なんです」

泣き崩れる八幡の母は、静の言葉に何度も頷いた。
そつと、教師は自分の拳を握りしめて眠る彼を見つめたのだった。

「……小町ちゃん、さつきはごめんね」

「いえ、小町は多分、これからもつと泣きますから」

兄に似ず、明るく快活なはずの彼女はその明るさを潜め、どこか儂さを感じさせる笑みで結衣に笑いかけた。

彼の両親は帰り、小町は明日の学校を休み泊まるらしい。兄から離れたくないと、八幡が聞いたら喜びそうなことを言つて兄から文字通り離れようとしなかった。

「結衣さんと雪乃さんに、電話をしてたんですよね？」

会う約束したつて、さつき結衣さんから聞きました」

「ええ……」

「うん。ヒツキーね、奉仕部が、居心地良かったつて。無くしたくなかったつて、言つたよ。人の目なんか気にしないでいられたはずなのに、私達の目を気にして、前の時は自分らしからぬ方法をしてしまったつて」

「比企谷くん……」

「だから、謝りたいって。それで、ちゃんと話したいって、ヒツキーが……っ、うう、ヒツキー……」

絶望的なまでの状況に、少女達は涙する。どうすることもできないままに、妹はそつと眠る兄へとすがり付いたのだった。

「……姉さん、茅場の居場所はわからないのかしら」

「雪乃ちゃん？」

「いやよ。絶対いや。こんな、まだ……私だって言いたいことも謝りたいこともたくさんあるよ。こんなの、絶対いや」

「だから、茅場を見つけると？」

「雪ノ下の力を使って？」

「ええ」

「……実はね、お父さんの会社の人も何人かはS A Oの中にいるみたい。それに、公言できなけれど、結城財閥の一人娘も、ゲームに囚われてしまってるようなの。だから、うちと、向こうとでもう動き出しはいるよ」

「それは本当なのかしら、姉さん」

「もちろん。向こうの一人娘は小町ちゃんと同じ年ね。……案外、比企谷くんと上手くやっていたりして」

「それはちよつと……」

「あはは、辛辣だねえ二人とも。でも、比企谷くんは優秀な子よ？ 理性の化け物だなん

て言ったけど、それは年不相応に大人びてることでもあるし、あの子なんだかんだやれば結果がついてくるじゃない。それが、どんな結果でさえ」

「……だからこそ、不安なんです」

胸の前で、結衣はそつと手を組んだ。その表情には心配以上の感情が存在せず、彼への想いの深さも伺える。

「ヒツキーは、私にああ言ってくれたし、これからはあんなやり方は控えてくれると思います。でも、それは私達の前だからで、きつと、ヒツキーは誰かが困ったら躊躇わずにいつものやり方を実行するはず……絶対に」

「……それが、彼の命を脅かさないと限らない。まったく、どうしてあなたはそう、寝てても私達に心配をかけるのかしら、比企谷くん」

ようやく笑ったその顔は、まだ酷く歪なものだった。

Episodel, part 1

「……はあ」

あの絶望的な宣告から早一ヶ月。SAOは予想通り最悪の方向へ向かっていた。

死者は増える一方。そしてそのうちの半数にベータテスターがいるそうさ。やつら、自分の力を過信してるのだろう。キリトは……生きててくれるといいが。

「さすがに世話にはなっているし、死んでたら寝覚めが悪い」

現在、まだ一階層すらクリアできていないが俺は迷宮付近の小さな村で腰を下ろしてパンを食べていた。

うん、美味い。

あの約束の日を迎えた時、雪ノ下や由比ヶ浜との約束を守れなかったせいで少しやけくそにモンスターを狩ったら死にかけた。本気で焦ったし、自己嫌悪にもなった。そして、逃げた先のセーフティテリトリーで、俺はこの“世界”を見た。

「今日も晴れてるな。快晴だ」

綺麗な湖で、夜だったが、蛍のような生き物がたくさん飛んでいた。それを見て、俺は涙が止まらなかった。おい、そこ笑うなよ。これでもプ○キュア見て泣く男だからな、俺は。

約束を守れなかった開き直りもあるのかもしれない、クリアするのは大前提だが、けれど、この世界をゲームだなんて割りきってしまうには勿体ない。そう思わせるくらいには、魅力的なものだった。

こんなのでも、精神を保つのはとても良かった。少しくらい楽しんでも、誰も文句は言わないだろ。

「さて、行くか」

今日も今日とて迷宮探索。ボス部屋がまだ見つからないから探さないとな。

見つけた情報は情報屋が買い取ってくれる。……あの鼠女、あまり得意ではないが。雪ノ下さんほくてなあ……

ああ、そういうばせつかくフレンドにまでなつたキリトやクラインとはまだ会えてない。それどころかネットゲでは大丈夫なはずの俺は今まで通りのぼっちだ。

当たり前だろ、顔がいつも通りなら目が腐ってるし、そんな俺に人が寄り付くはずもなく、寄り付けれるはずもなく、だ。こうなつた俺はパーティなんてとても組めたもんじゃない。

「……あいつらも、上手くできてるといいけど」

フレンド欄から消えてないってことは生きてはいる。

とりあえず、それがわかるだけでもいいか。というかメールくらい寄越せつての。それは俺もか。

「……変わつては、いるのか」

そりや、こんな状況になれば変わらなくてもいられないか。ましてや、俺は最前線に出てるわけだしな。

まったく、こういうのは葉山みたいなやつ役目だろうに。

「…………行くか」

今度こそ、俺は迷宮へと向かったのだった。

「そらよ…………つと」

俺によって滅多斬りにされたモンスターがポリゴンとなって砕け散る。あれから着実にレベル上げをしているからか、迷宮のモンスターくらいにはやられることはなさそうだ。

基本敏捷極振り。腕力にも少々。スキルは片手剣と策的、隠匿の二つがメイン。前にドロップしたコートが隠匿性を高めるみたいで、俺は文字通りステルスヒッキーらしい。俺まじステルス。リーダーにすら移らないだろうな。

なんでも、迷宮でモンスターへ向かってく青い影とは俺のこのようで、中二時代を思い出そうとしてやめることにした。

……自分でも思ってる以上に楽しめてるのは、余裕ができたからか。まあ、帰る以外はついでなのは今も変わらないけどな。

「……あれ、お前……ハチマンか？」

「あ？ つて、キリトか？」

まあ、あれだけの腕があるならここにいるのも不思議じゃない。後ろの声に先に反応したが、俺の名前を知ってるのはキリトかクラインだけだからな。

そして振り返るとキリトが――

「……誰？」

俺とキリト（？）は同時に呟いて、お互いを見つめたのであった。

「……なんていうか、その、ハチマン、だよな？」

「だからそうだって言ってるだろ。というかお前だって、ずいぶん幼くなったじゃねえか」

これが素のキリトなんだろう。なんとというか、幼い。俺より年下だろうな。そしてイケメンだ。……なのになのぼっち勢とは……

「……いや、けど無事で良かった。最前線に来てたんだな」

こいつ、露骨に話題を変えやがった！ いやまあ、俺も続けられたら困ってたからまあいいとする。

「どうしても戻らなきゃいけない理由がある。それなりにゲームは楽しんでるが、長居するつもりはない」

「……だな。ハチマン、ビギナーのはずなのに上手かったからこっちにいてくれて良

かった。心強いな」

「お、おう……」

だから誉めるのやめてくれ。対応が追い付かないから！

「レベルも同じだな……スキルは、ずいぶん隠匿に振ってあるな」

「念のため、な。警戒心高いんだよ、俺は」

「なるほどな。じゃあ、しばらく一緒に行動しないか？ おそらく、もう少ししたらボス部屋も見つかるだろうし、経験値効率も二人のがいい。悪い話じゃないだろ？」

「構わねえよ。俺も、キリトには聞きたいこととかあるしな。まだゲームの理解度もそこまでじゃないし、その案、乗った」

「助かる。とりあえず、今日はこのまま戻るか。ハチマン、宿はあるのか？」

「いや、その日その日で適当に、だ。キリトは？」

「一ヶ所しばらくまとめて借りてあるんだ。牛乳飲んで、風呂つき。来るか？」

……すげえどや顔。あー、ぼっちあるあるだな。思わずこう、自慢したくなることつてあるしな。うん。

「……世話になる」

「任せろ」

……雪ノ下とかが俺を見る時ってこんな感じなのか？
いや、こいつはイケメンだから違うか……くそ。

「いいところに住んでるんだな」

「普通に探したら見つからないんだよ、ここ」

「だろうな」

お互い武装を解いて気楽な格好で向かい合う。ゲームへの理解度の差か、こういうのを見つけてるのはキリトの方が凄そうだ。

「ボス討伐するまでハチマンも使えよ」

「……いや、そこまでしてもらおう義務はないぞ」

「義務とかじゃない。俺、フレンド欄にお前かクラインしかないし……あとアルゴ」

「同じようなもんだ。俺の場合は鼠女のフレンドも拒否してるけどな。あいつ怖いし」

確信した、こいつイケメンなのにぼっちだ。わかりやすいやつだな、まだまだぼっち修行が足りてない。

「クラインとははじまりの街で別れちまったから、その、あいつにもだけど、せめてフレンドにはできる限り協力したいんだよ。やっと、余裕も出てきたから」

「……あー、わかったわかった。ありがたく借りる。俺は結構な他力本願だからな、せいぜいコキ使われてくれ、キリト」

「……ハチマン、お前、結構素直じゃないとか言われぬか?」

「生憎俺にそんなこと言い合う友達はいない」

さすがのキリトも引き攣った笑いだけだったな。まあ、俺のようなエリートぼっちはそういないだろう。

それからキリトとはいろいろ話した。ゲームについて、深くはないもののお互いのリアルについて。

キリトは小町の一つ下で、ゲームはかなり好きらしい。実は同じネットゲをプレイしたこともあってか、リアルではあり得ないほど話が弾んだ。

「……なんだろうな、ハチマンて確かにお兄ちゃんて気がするよ」

「藪から棒にどうしたんだいきなり」

「いや、俺も妹がいるんだけど、きつと、兄貴がいたらこんな感じだったのかなって」

「……………やめとけ、俺の兄弟は妹一人でキャパ限界だ」

「冗談だって」

こいつは、なんでこうも裏表無きそうに言ってくるかな。思わず勘違いしそうになるだろうが……

E p i s o d e 1 , p a r t 2

「ボス部屋が……」

「……発見された？」

「そうだヨ」

俺がキリトの宿に根城を変えて三日ほど経ったのち、鼠女——情報屋のアルゴがやってきて事の次第を伝えにきた。

ボス部屋の発見。つまり、一層をクリアできる、ということだ。

「キー坊もハッチも、モチロン行くんだロ？ ボス」

「まあ、な」

「当たり前だ。その為にハチマンとレベル上げてたわけだしな」

「ずいぶん懐かれてるナ、ハッチ」

「俺の人徳の為せる技だな」

「ぼつちが聞いてあきれれるヨ。で、本題ダ。明日、会議を開くそうダ。ボス討伐に行くなら出とくとイイ」

鼠女はこれを言いたかったのだろう。まあ、問題はない。会議なんて適当にステルスヒッキーをしてればどうにかなるだろ。

「ハチマン、やるぞ」

「言われなくても。つかお前、結構熱血系なのな」

「え、そうか？」

主人公気質つてののか。まあ、それにしちやコミユ力が足りない気もするが。

「えっと、はじめまして。俺はディアベル。気分的に職業はナイトをやってます」

ボス会議とやらにて、酒場で挨拶をする爽やかイケメンの言葉に笑いが起こる。え、なんで今の笑うの？

イケメンパワー？　つかなんだあの葉山もどき。

そもそもナイトつてなんだよ。光と闇が合わさって最強に見えちゃうのか？　ソルを使い手なのか？　ハイスラでボコつちやうのかよ。

「ハチマン、どうしたんだ？」

「……いや、なんでもない」

多分、某ネットゲネタはキリトの世代ではなさそうだ。

ネットゲ珍事と言えはこの人と某お兄ちゃんどいてそいつ殺せないのイメージが強いが……やめよう、脱線しそうだ。

「と言うわけで、まずはパーティを組んでくれ」

「うえ？」

はいきましたー。いや、忘れてた……とりあえず、キリトと組んで……と。

あとは……

「キリト、あそこのフードのやつ。あいつ、どうだ？」

見るからに和に入らなそうなのが一人、ぽつんと座っていた。これはいい、あいつ入ればとりあえず三人だ。でも、俺は話しかけない。なんでかって？ できるかよそんなの。

「俺はキリト、こつちの目が腐ってるのがハチマンだ」

「……よろしく」

「目が腐ってるは余計だ。……まあなんだ、短い間だが、よろしく」

キリトが上手く引き入れてくれた。名前はアスナ……女か？

なら、このむさ苦しい和に入れないのも、フード姿なものも領けるが……

「……どうでもいいか。キリト、軽く連携組むぞ。俺らに協調性なんてありえん」

「自信満々に言わないでくれよ……まあ、そうだけど……」

ぼっち同士、上手くいくとは限らない。むしろぼっちだからこそ連携なんてないものだからな。

なんて思いながら会議部屋の酒場を出ようとしていると、大きな声が俺たちの動きを止めた。

「ワイはキバオウつてもんや。この中に、謝らなあかんやつがおるの、わからんか？」

いきなり出てきたトゲトゲ頭の言い分は、つまりこうだった。

今まで死んだプレイヤーは、ベータテスターが情報や狩り場を独占したから。

なので、ここにいるベータテスターはこの全員に土下座した後、身ぐるみ全部置いてけ、と。

「………恐喝じゃねえか」

バカも休み休み言えよ。と、隣のキリトが顔を青ざめていた。あーそうか、こいつベータテスターなんだっけ？

他にもぼつちスキルである人間観察で見れば、ベータテスターっぽそうなやつは所在無さげにキョロキョロしている。……仕方ない。

「おい」

「なんや！」

「言い分がそれだけならもういいか？　パーティも組んだことだし解散しようぜ」

「なっ、何を言ってるんやアンタは！　ワイは——」

「死んだプレイヤーのうち、自殺とモンスターやPKが多い。そのうちのモンスターによる死亡者の多く……まあ初心者や無茶する人間なんだが、この無茶する人間は誰だかわかるか？」

「……」

「答えはベータテスターだ。大方、お前の言う通り情報や狩り場を独占しようとして返り討ちに遭ったんだろう。体験版と製品版でゲーム内容が違うなんて当たり前なのに、ばか野郎共だ。」

「少なくともここに居るベータテスターは、そういったことはしてない、足並みを揃えてる連中だろ。」

俺もお前と同じ、製品版からのプレイヤーだがおそらくベータテスターは俺らよりはまともに働くだらうよ。そいつらから身ぐるみ剥いでどうするんだ？ 俺はお前の自殺に付き合うつもりはないぞ」

これだけ言えば問題はないだろう。こんなばか野郎のせいでボス討伐に支障を出されても困るからな。

と、不意に黒人のスキンヘッド男が手を挙げた。

「俺はエギルというものだ。ついでと言ってはなんだが、ガイドブック、あんたらも知ってるだろう？」

あれ、ベータテスター達の協力で得たものなんだ。それに対して、仇で返すようなことをしていいのか？」

「ぐ、ぐぬぬぬ……」

「……はい、やめよう。明日みんなでボスを倒すんだ。仲間割れしたって意味はない」

みんなで、か。なんだよますます葉山っぽいな……
が、リーダーの一声だ終了。俺達が酒場を出るまで、あのキバオウとやらの一行はこ
ちらを睨んでいた。

「……ハチマン、ありがとな」

「無駄な時間を過ごされるのが嫌いなんだ。別に他意はない」

「捻^レテレめ」

「お前までそれを言うか……」

「他にもいるのかよ!」

「……妹が、な」

らしくない。それは俺が一番わかっている。が、やはりこういう環境は人を変えるのだらう。キリトのああいう表情を見て、あのキバオウってやつにイラついたくらいには、人を信頼して貰うらしい。

「そんなことはいいんだよ。キリト、連携、やっとくぞ」

迷宮にて、俺達は会話をしながら歩いて行く。アスナってのはどうやら細剣……いわゆるレイピアを使うようだ。

「スイッチとか、組み合わせ変えないとだな」

「そういうことだ」

「……あの、スイッチって、なに？」

「……え」

アスナの質問に、俺とキリトは目を見合せて、それからアスナを見たのだった。

「つてなわけで、アスナの実力と、システムの説明をしたいと思う」

「わー、がんばれキリトー」

「お前も手伝うんだからな!？」

くそ、逃げられなかったか。

「……なんで私の名前を？」

「モニターの左上見てみる。パーティの名前が載ってるだろ」

「……これね。わかったわ」

「ならよし」

「の前に、あなた達の実力も見せてよ」

「……だ、そうだ。ハチマン」

「頑張れキリト」

「だからお前もやるんだって！」

そんなわけで、アスナに俺達の実力お披露目。

まあ、ここらならどんなことがあっても早々死なないからな。

「次、絶対ちゃんとやれよ、ハチマン」

「わかったわかった」

キリトは背中から剣を抜いた。片手剣で、こちらで手に入る中でもかなり大きく、そして重い。更に言えばキリトはあれを重量上げて装備している。

……バカ力つてのはああいうことを言うんだな。

「……よしっ」

それでいて、身のこなしもかなり早い。相手は盾持ちの小さなソルジャーモンスターだが、あつという間に懐に入り込んだキリトはその盾ごと、モンスターを真つ二つに切り裂いてしまった。

「っ……っ」

アスナも驚嘆したようで、視線こそわからないもののキリトを見つめている。

「まあ、こんなもんだ。充分だろ、これで」

「……あなたの実力はまだ見てないけど」

「自分だけやらないってのはさせないからな、ハチマン」

「……へーへー、わかりましたよ。つたく」

忘れられてるかもしれないが、俺は専業主夫希望なんだよなあ。

……あ、こいつらには言ってないか。

「ハチマン、本気でな」

「……はあ」

キリトの声に深くため息。こういうの、柄ではないんだが……仕方ないか。

出てきたのはソルジャー型の同じモンスター。敵としては既に役不足。ドロップすら魅力がないほどだ。

「……さて、と」

面倒だからとつとと終わらせるか。おそらく、先ほどのキリトよりも更に速く、俺は懐へ飛び込んだ。

モンスターが盾で防ぐ構えを取るが、そんなのは関係ない。遅すぎる。

「そら、おしまいだ」

一太刀、二太刀、三太刀。数えるのも面倒なくらいの攻撃を全部ぶつける。俺は武器もキリトのに比べると圧倒的に軽く、そして脆い。代わりに切れ味が鋭く一方的な攻撃なら相性がいいそうだ。敏捷に振りすぎたせいか、スキルも攻撃速度の速いものが多い、隠匿性と相まって忍者みたいだな。

なんて思う間に、滅多斬りにされたモンスターがポリゴンとなって消えていった。

「驚いた……キミも強いよね」

「悪かったな弱そうな外見で。ほら、次はお前の番だぞ」

レイピア使いの女、アスナ。俺達の動きを見ても軽く驚くくらいだし、おそらく、弱
いってことはないだろう。

とりあえず、使えるかどうかはこれを拝見して、だな。

Episode 1, part 3

「……」

雑魚モンスターは早い。一通りすぐに沸くし、狩りの効率もいい。

アスナの目の前には俺やキリトが倒したモンスターが立っていた。

「……そいつー！」

一閃。俺のように速さにモノ言わせて滅多斬りにするわけでもなく、キリトのように一刀両断するわけでもなく。アスナの突きは一筋の光となつてモンスターを刺し貫いた。……これだけ動けるやつがネットゲ初心者なのかよ……

「どっつー？」

「文句なしだ、な、ハチマン」

「……………ああ」

このパーティ、実力的にも問題はないだろう。

本来なら俺が空気になるか足引つ張るかなんだが……

まあ、ゲームの世界ではあるからな。俺が多少目立つこともあるんだろ。……出来る限り拒否したいところではあるが。

「じゃあ、パーティの連携とか組んで行くか」

「わかった」

「よろしく頼むぞキリトせんせー」

「ハチマン、茶化すなよ」

とはいえ、あぶれもののパーティだからボス戦でも雑魚の処理が主な仕事であり、ボ

スとやり合うことはない。ラストアタックボーナスとやらを取れないだろうことにキリトは少し落ち込み気味だが仕方ない。ぼっちはこうあるものだ。

……思ったほどぼっちでないことにちよつと自分でもびつくりしてる。戸塚辺りに「全然ぼっちじゃないじゃないか八幡！」とか言われそう。言われたい、ああ、言われたい……

「ハチマン……どうしたんだ……？ その、変な顔になつてるぞ？」

「……いや、なんでもない」

天使を思い出していた、と言つてもわからないだろうからな。

「……？ まあいいか。じゃ、やるぞ」

戸塚を思い出して少し元気になった俺は、自分の剣を構えたのだった。

「……どうしてこうなった」

「お前のせいだろ、ハチマン」

「ばっかお前、運動したらシャワー浴びたいって思うの当たり前だろ」

「ネットゲ初心者で、おそらく宿もろくに取れてないアスナが食いつかないわけないだろ！」

数時間後、俺達は借りている宿の居間でぐでーっとなっていた。

「疲れたー、シャワー浴びてえ」なんて言ったのが最後、アスナに詰め寄られ襟首を掴まれて半恐喝のように部屋へ連れてシャワーを浴びさせろ。とのご命令を受けてしまった。いやまあ、ここはリアルでないし男女同衾してどうのこうのなんてできるわけがないし、そもそも俺もキリトもそんな男らしいことができるような性格ではない。ヘタレ？ リスク管理ができていると言っただけだ。

キリトに関しては途中鼠女の襲来でシャワー室を開けられ、鼠女とアスナが鉢合わせ

してキリトにとぼつちりが行くという出来事のせいか、俺より死にそうだ。

「……ありがとう」

「どういたしまして、か。キリト、次お前が入っていいぞ。んでそのまま寝とけ。アスナも、俺の部屋使っているから寝とけ。鍵しておけば不安ないだら」

「キミはどうするの？」

「リアルでも椅子に座って寝落ちはよくやる。問題ねえよ」

フード越しからあからさまなため息が聞こえる。仕方ないだら本とか読んでもとそうなつちまうんだよ。つてかシャワー浴びたのにフードで顔とか隠すのかよ。いやまあ、別にいいんだけど。

「とにかく、休んでおけよ。死にたくないだら、お互い」

「……わかった」

どこか納得いかないようだが、無理矢理納得させる。

まったく、こういう引率者みたいなのは俺の役目ではないだろうが……本来ならばじまりの街で寝て起きてを繰り返してればゲームクリアされてるようなポジションの存在だろう、俺は。

「明日に備えて、つてことだ」

終わりにする。ボス戦には準備を整えて行く方なんだぜ、俺は。

「……寝付いたか？」

夜も更けて、深夜に差し掛かったころ、俺は隠匿スキルも使って宿を出た。村にも人はいない。フィールドにも人はいない。

「……やつぱりすげえな、こいつ」

あのとき見た、感動的な場所。ここに来ると、どうにも気が緩みそうだ。

「……くっ」

手が、震える。思わず、座る。わかってる、動揺している。

こんなに重いのが初めてだ。俺は本来空気扱いのぼっち。それが、ボス討伐に加わる。もし、ボスがあり得ないほど強かったら？ そんなことばかり脳を過る。

「……帰らねえと。絶対にクリアして、あいつらに会わねえと……」

気合いかかそうというのじゃない。奮い立たせてるだけだ。

まだ相模を罵倒したときや、海老名さんに告白もどきをしたときの方がよっぽど気が楽だ。俺は、死ねない。今までみたいなりスクリターンの管理ができない。俺一人がどうにかなくても周りに意味はないし、俺が死んだら、悲しんでくれる人がいる。そして

それは俺だけじゃない。だから死ぬわけにはいかないし、死なせてしまうわけにもいかない。解消ができない。

「……くつそ、難しすぎるだろ、このゲーム」

ずいぶんなゲームに挑んじまったらしい。まじでどうすればいいんだよ、俺は。

「っ！ 誰だ。誰かいるのかよ」

「っ!？」

ガサ。と物音が聴こえてそっちに意識を向ける。直ぐ様索敵スキルを発動させて見ると、凄いい勢いでスキル圏外へ走って行くのが一つ。追っかければ捕まえられないこともないが、逃げているってことは俺をどうこうするつもりもないのだろう。ならいい。もし俺の姿に恐怖して逃げた。なんて言われたら明日のボス戦のコンディションも最悪になりそうだし。

「……戻るか」

落ち着いてはいないが、それでも明日は来る。行かないなんて選択肢はあり得ないし、やれることはやるしかない。

なら、せいぜい死なず死なさずやるしかない。

「……茅場さんよ、世界観いいけどクソゲーすぎねえか？ 死んだら終わりなネットゲとかユーザー減る一方じゃねえか」

どこかでこれを見てほくそ笑んでであろうゲームマスターに悪態をつけて、宿へ戻ることにする。

……アカBANして退場。とかされないよな？

「なんだ、わりと余裕あるな、もしかして大物かもしれないな、俺」

ぼっちあるあるな独り言を呟きながら、宿への道を歩いて帰るのだった。

「さすがにみんな顔付きが違うな」

「当たり前だ。ボス戦なんてどう転ぶかわかんねえ。絶望になるのか、希望になるのか」

翌日。ボス討伐に向けて昨日の酒場に俺達は集合していた。最前線を戦う奴らはさすがに装備も整ってるらしい。ディアベルを始めとしてあのキバオウとやらも装備だけならそれなりだ。

キヨロキヨロ落ち着かないキリトに、俺は答えて息を吸った。……手は、まだ震えている。

「……でも、倒さなきゃ帰れない」

「そういうこつた。やるしかないんだから、やるぞ」

「ああ！」

アスナが珍しく話に乗ってきた。ごもつともだ。やるしかねえ。

……つてなんだアスナのやつ。こつちを見て……

「なんだよアスナ。フード被ってても顔ごとこつち向いてたらさすがに気づくぞ」

「……別に、本当に目が腐ってるなって」

「……悪かったな。戦意喪失するぞ」

言うに事欠いてそれか。なんなんだこの女は……目が腐ってようが實力はそれなりだぞ。足手まといにはならないはずだ。……なりませんよね？

「おうおうおう、昨日の目が腐つとるやつやないか。

せいぜい足引つ張るんやないで」

こちらに気づいたらしいキバオウが俺のところまでやってくる。まだ根に持つてる

のかよ。戸部みたいな取り巻きのくせに夕子の悪いやつだな、こいつ。

「いっつ——」

言い返そうとするキリトを手で止める。気に入らないのはもつともだが、ここで全員の士気に関わるようなことをしたくない。

こんなやつでも、ボス攻略には使わないといけないんだ。

「……あなたよりは、役に立つと思うけど？」

「なんやて!？」

「おいやめろバカ」

何でお前が言い返すんだよアスナ。くっそ、收拾つかなくなったらお前のせいだぞ

……

「ストップだ。これからボス攻略に行くんだからやめろ。お前も、そっちのフードの、な」

一触即発、となりそうところで昨日の黒人、エギルが間に入つて無理矢理終わらせてしまった。

助かった、こういう第三者がいないと終わらなそうだったからな……

おいディアベル。何ホツとした顔してんだ。こつちに苦笑いするんじやねえ止めろよバカ野郎。お前の取り巻きみたいなもんだらうが。

「昨日といい、悪かったな」

「いや、こちらこそだ。昨日はお前のおかげで俺もすんなり言うことができた。エギルだ。お前は？」

「……ハ、ハチマンだ」

……仕方ないだろ、人に自己紹介とかほとんどしたことないんだよ。どもるに決まっ

てるだろ。

「そちらの二人も、よろしくな」

「ああ、キリトだ。よろしく」

「……」

「ふいっと、アスナはフードごと顔をそらせてしまった。……ほんとになんなんだこいつ。」

「はは、機嫌を損ねてしまったらしいな。まあいい、お互い、死なないようにしよう」

「……だな」

「悪いやつではないんだろうか。まあ、ボス討伐という大きな敵がいる以上、今は他に目を向けている余裕はないか。人の本性が出始めるのはもつと攻略が進んでから、か。」

「……よし！ みんな、行くぞ！ 死ぬなよ、生きて次の階層への扉を開くんだ！」

「ディアベルの掛け声におおー！ つと周りが合わせて、俺達は迷宮へと向かっていく。
……ここまで来たらやるしかねえ。開き直りもさほど苦手じゃないからな、クリアしてやるぞ。」

Episodel, part 4

「さあ、みんな。準備はいいな？」

迷宮の最奥。ボス部屋にてディアベルがゆつくりと扉を開いた。

ボスの名前はイルファング・ザ・コボルド・ロード。中で待ち構えるその姿はなるほど、ボスっぽい。

武器は……斧と盾か。

「まあ、俺らの受け持ちはこいつらだけだな」

ルイン・コボルド・センチネル。このボスの取り巻きで、まあ、雑魚モンスター扱いだ。それでも普通の雑魚よりかは動けそうではあるが。

「全軍！ とつげきいいっ！」

「ディアベルの声に全員が向かっていく。なんかあいつ、叫ぶと声が材木座みたいだな。」

と、そんな場合じゃない。

「キリト、先行して斬るぞ」

「任せた！」

一瞬。地を蹴って俺たちの標的に向けて接敵した後、取り巻き全員に一太刀ずつ浴びせる。

これで取り巻きのヘイトは俺へと集められた。

「速い……」

全軍から一気に突出して横へ逸れたからか、誰かの声が聞こえた。よそ見してんな。と言いたい。

「キリト、アスナ」

「……うん」

「ああ、やるぞハチマン！」

ボス戦……笑うもなくもここからだ。やるぞ、やるしかねえ。死ぬわけには、いかな
い。

「終いだ、ほら」

もう何体斬ったかわからない。幾ばくかの取り巻きを全滅させて俺達は一旦小休止
に入る。

ポーシヨンを使って体力を回復させておく。俺は何よりも身軽にしている分だけ、ア
スナやキリトよりも脆い。

同じだけ攻撃を受けても、俺は二人よりも体力の減りが多くなってしまふ。

「……気が遠くなるくらい速いわね、ほんと」

「お前もな。突破する速さなら俺より速いかもな」

「どうだか……」

「案外余裕だな、二人とも」

「雑魚処理だけならな、アレがあいつら全員倒しでもしたら焦るぞ」

「なら大丈夫だな。もうそろそろ武器チェンジしてくるけど、それはつまりあと少しの証拠だ」

さすがベータテスター。まあ、こここのボス自体はガイドブックにも載っていたし、一応知識としては俺も知っている。

あのボスはHPが残り少なくなるとタルワール……曲刀と呼ばれる武器に切り替え
てくる。注意が必要だが、あの人数でやってれば負けなйдらう。

思った以上の出来に、俺は少し心で安堵した。

——多分、それがいけなかつたんだろうな。

「来るぞ、武器チェンジ」

ボスの咆哮が聞こえて、斧と盾を投げ捨てる。同時に取り巻きが復活して、俺は剣を
構えた。

さあ、ラストスパートだ——

「みんな、下がれ！」

「……あ？」

ディアベルの、状況には不釣り合いな声。

今、あいつはなんだった？

「このまま俺が仕留める！」

「なっ……」

あの野郎！ 何をいきなり……周りの連中もどうして下がってやがるんだ。

「あいつ、まさかラストアタックボーナスを……つく」

「ハチマン！」

よそ見しすぎた……真正面から一発受けて半分ほどHPを削られる。くそ、こいつら……

「邪魔くせえっ……」

二撃目を与える隙間なく切り刻んで、俺のところの取り巻きを倒す。

キリトも倒したらしい。二人してディアベルを見れば、そこには驚愕の表情を浮かべたディアベルと――

――大きな太刀を持ったボスが立っていた。

「……違う！ 避けるディアベルッ！」

芯から迫るようなキリトの叫びは虚しく響き、ディアベルは真正面から太刀の一撃を受けて、そのまま返す刀、二撃目も受けて吹き飛んだ。

「ディアベルッ！」

慌ててそちらへかけて行くキリト。一旦ボスの攻撃が止まった。

……それは、つまり……

「――！」

「……」

キリトといくつかの言葉を交わして、デИАベルはポリゴンとなって消えた。
つまりそれは……

「デИАベルはんが……死んだ……」

キバオウの言葉はこの場をパニックにさせるには充分だった。

当たり前だ。指導者が死ねば取り巻きはパニックになる。何もそれはあいつらモンスターだけではない。俺達人間も変わらない。エギルや数名のプレイヤーは立て直そうと必死だが……違う、そうじゃない。

プレイヤーじゃだめなんだ、こういうときは、自分達の敵を決めて、そして、その敵を……そいつへ、立ち向かわないといけない。

「……」

「行くの？」

「……つて言ったらどうする?」

「カバーする。あそこの彼も、そのつもりみたい」

キリトもボスを睨んで剣を握っていた。それはそうだろう。

何度だつて言つてやる。やるしかねえ。スタートからこけるわけにも、いかない。

「死ぬかもしれないぞ」

「……それでも、負けたくない。この世界にまで、負けたくない」

「……はつ、それもそうだな。じゃあ、まずはあれくらい倒さないと」

こくりと。フードが頷いた。なら、もう後には引けない。

俺も剣を握つて、隠蔽スキルを使って一足で駆け出した。

「……つらあつ!」

「影が……あいつは……」

「ハチマン！」

ステルスヒツキーよろしく。ボスに反応すらさせずに一太刀入れて、キリトの前に着地する。アスナも来たな……よし。

「キリト、動ける連中に指示出しとけ。それ終わったらすぐに来てくれ」

「ハチマン……わかった！」

「俺、本来こういう役目じゃないからさ、死ぬまでには戻って来てくれよ」

「バカ、そういうときは倒しておくからって言うっておけよ」

「ばっかお前、それこそ死亡フラグじゃねえか」

軽口を言い合って、少しの余裕が生まれる。

相手の体力はあと三割ほど。俺も、体力に関わりなく受けたら即おしまいだろう。

……だからなんだ。

「……アスナ、いいか？」

「任せて」

やる。俺らしく、真正面からなんて言わない。正々堂々と不意打ちで、集団で。俺は
ディアベルほど愚かじやない。

こつちから、一方的に。

「——お前を殺すぞ、化け物野郎」

……後で振り返って黒歴史にならないといいな、これ。

「はあっ！」

初撃。アスナが突進からの突きでヘイトを引き受ける。AIは並みなのか、アスナの方へ振り向くそいつの首へ、俺はソードスキルを振った。

手応えはある。ある、が、ここにきて武器の耐久が限界近くに来てたらしい。斬ったと同時に二つに折れてポリゴンへと消えた。

「チツ……」

レアドロではなかったけど、それなりに愛着あったんだけどな……

と、感傷に浸るのは後だ。予備の武器をストレージから構える。ランクがさっきのより低いが仕方ない。

俺の戦い方ではこれが限界だ。

「リニアー！」

細剣の基本ソードスキル。アスナの敏捷ならそれは剣速が見えるのすら危うい。

あれ、俺も使えないかな……無理？

「ソニッククープ」

上への突進技のソードスキルを発動して真正面から一撃、そのままいつも通り、通常攻撃をひたすらに叩き込む。

……くそ、ここにきて自分の露骨な弱点に気づいちゃった。

「二人とも、下がれ！」

「遅いぞキリト」

「レイジスパイク！」

ガン。とボスのHPが削れた。やっぱり、か。

俺の弱点、剣速や身体の速さならアスナより上だろう。けれど、武器が合わない。片手剣はこういった戦い方には合わない。雑魚処理ならレベルさえあればどうにでもな

る。というだけだった。

……熟練度、結構上げたんだけどな。

「キリト、アスナ、そのまま聞け」

「どうしたんだハチマン」

「俺じゃ、あれに致命打は入れられない。決定的に武器と俺の相性、ボスの耐久が噛み合わない。」

だから、なるべくヘイトは俺が稼ぐ。あとはわかるな？」

「……無理はするなよ？」

「無理させる前に倒してくれ。そうすれば俺が楽できる」

「ハチマン……お前ってやつは……わかったよ、アスナ、行けるか？」

「もちろん！」

アスナの言葉を皮切りに、俺は一気にボスへ迫った。耐久なんて知らん。このボス戦が終わったなら武器ごとチェンジだ。なら、壊れるまで使われてくれ。

「スイッチ！」

後ろで見ていたキリトが敵の攻撃に合わせて掛け声をあげる。範囲攻撃か。俺は一目散にキリトよりも後ろへ引いて、攻めていく二人を見つめた。

「はああっ！」

間一髪で横風ぎを躲すアスナ。フードが切れて素顔が露になる……って、あいつ……あんな顔してたのか。

雪ノ下や由比ヶ浜クラスの美形なんじゃなからうか。って、そうじゃねえ。

「！」

ボスの咆哮から、タメ無しの範囲攻撃。
くそ、最後のあがきつてやつか。

「くっ……」

「きやあつ……」

尻餅をつく二人。まずい……

「うおおおっ！」

「エギル!？」

「お前達にだけやらせるか！ 早く退勢を立て直せ！」

どこからいったのか、エギルが斧で一撃を与える。

「ここが正念場ってやつか……行くか。これで終わらせてやる。」

「後ろ、取ったぞ」

「ハチマン！」

「バーチカル・アーク」

片手剣のソードスキル。縦に二回連続の斬撃を入れるこれは、やはりボスにトドメを刺すには至らなかつた。

なら……

「つらあつ！」

通常攻撃の乱打。リキャスト切れを待ってからの……

「シングルシュート！」

投剣の初期ソードスキル。投擲可能な武器を投げれるそれは、この武器にも適応する。

元々これはそのためのものだし、このスキルは敏捷性が関わるものだから、おそらく俺の技で最大威力になるだろう。

「やれ、キリト！」

「うおおおっ！」

残り少しまで削れたボスがこちらへ振り向く。最後の最後に、一番強い攻撃を持つ相手に背を向けて、所詮はAIか。

俺は、おそらく笑ってただろう。どんな笑みかはわからないが。

「バーチカル・アークツ！」

先程俺が行った縦二連撃。その比にならない威力を以て、ボスはポリゴンへと姿を変

えて消滅した。

「……やった、のか」

おいやめろ、それフラグだぞ。

なんて言おうと思ったら浮かぶコングラチレーションの文字。どうやら、勝ったらしい。

「や、やった……やったぞ！」

誰かの声を皮切りに四方から喜びの声が聞こえる。

ディアベルは死んでしまったが……あれは自業自得の部分も大きい。
ラストアタックボーナス欲しさに、目が眩んだか。

「やったな、ハチマン」

「ああ。あと、ラストアタックボーナス、おめでとう」

「あ、ああ……」

「……ディアベルのことなら仕方ないだろ。自業自得だ。お前は悪くない。立役者なんだから堂々としてろよ」

キリトは頷くと、ラストアタックボーナスより得た黒いコートを羽織った。黒を基調とするこいつに良く似合っている。

「……なんだか、上手く行けそうだな」

「……ああ」

ゲームクリアという目標。明確な敵の存在。これは、最初から団結して、上手くいけるかもしれない。

ぼつちらしからぬ淡い期待もしてしまいそうな、そんな気持ちすら抱いて周りを見る。

……変わって、いけるのかもな。この中でなら。

この異常な場所だが、変わらざるを得ないなら、変わっていくしかない。選挙の時に自分を変えれたんだから、きつと——

「……なんでや！」

「……あ？」

「なんでや！　なんでディアベルはんは死んだんや！」

そんな想いは、すぐに裏切られる。自分で言ったんじやないか。人の本性はもう少し進まないとわからない。明確な大きな敵がいたからみんな集まっていたに過ぎない。

……やはり、俺が期待を抱くことはまちがっていた。そう、結局はそこに行き着くことになるのを、まだ、少しだけ俺は知らない。

E p i s o d e 1 , p a r t 5

— s i d e キリト —

「キバオウ……」

「なんでディアベルはんを見殺しにしたんや!」

キバオウの言葉が俺を貫くようだった。

……いや違う、手遅れだった。そんな言い訳も浮かぶけど、多分違う。その答えは間違いだ。

「もしかして、あんたベータテスターやな? だからあんな武器も知ってたんや。なのに、ディアベルはんを見殺しにしたんやな! そのコートだって、ラストアタックボーンナス言うたか? それ欲しかったんやろ!」

ざわざわと声が聞こえる。やっぱりベータテスターって……とか、ラストアタックボーンスに関する事か……この場にいる他のベータテスターも、おそらく居心地が悪いだろう。

まずい、このままだと俺以外のベータテスターにまで……

「謝れや！ 今すぐそのコート脱いで、この場の全員に、ディアベルはんに謝れ！ やつぱりあの場で身ぐるみ剥ぐべきだったんや。なあ！」

キバオウのパーティーメンバーらしきやつらがそうだと騒ぎ立てる。自然と、周りもそう言う目で俺を見る。

……くそ、こんな、なんでこんなことで……上手くやれてたつてのに……

「……くはっ」

悔しくて、悔しくて拳を思いきり握りしめていたら、後ろから不気味な笑い声が聞こえた。

今の声は、ハチマンだ……普段から低めで小さな声で話すけど、今の声は……おそろ

しく聞きやすくして、どこか冷めた笑い声だった。

「ハチ……マン……？」

——side ハチマン——

……なんだこれは。

立役者であるはずのキリトへ向けられる欺瞞の眼差し、敵意、悪意。おい、違うだろ。キリトへ労いをかけて、それから全員で、みんなで二階層を開くんじやないのかよ。

なんだよ、それは。どういうことだよ。

「……おかしいだろ。……いや、おかしくない、のか」

自問自答は、いやに早かった。何を勘違いしてたんだ俺は。この世は欺瞞で満ちている。

それが奉仕部に入れられた理由だろ。あの二人が異質なだけで、世界がこんなにすぐ変わるはずがない。

見ろ、この場の”正常”を。一部の声の大きさが、それを正しいと掻き立てる。したら、ボス討伐の立役者が一瞬にして悪役だ。

……ああそうさ、そんなものだ。知っていたら、期待したら裏切られる。勘違いするなどと、何年言い聞かせた？

それがこのザマだ。

「……くはっ」

「ハチ……マン……？」

泣きそうなキリトの顔が見える。あー、別にもういい。お前は望んでぼっちになつて
るわけじゃないみたいだしな。しかるべき場所に置いてやる。

なんだよ、結局はやることは変わらない。また雪ノ下や由比ヶ浜に怒られるかもしれないが、まあ、あいつらに早く会うためだ。許してくれるだろ。

それに、こいつらと、クリアしてからまで会うわけでもないしな。死なせる気はないが、仲間だなんだつてことをやる気もない。やはり、そういうのは葉山の役目だ。

「お前、バカか？　ディアベルが死んだのはあいつの自業自得であって、見殺しにしたのはお前らだろうが」

「なんやとー！」

「なんであいつが一人でボスに挑む必要があるんだよ。ナイト気取りか？　余計にバカバカしい。あいつこそラストアタックボーナスが欲しかったんじゃないか。つてことは、ディアベルこそボーナスターだな。まあ、別にそこはどうでもいい。体験版と製品版じゃ中身が違うって昨日も言ったはずなんだがな、聞いてなかったディアベルの自業自得だ。で、だ。お前ら、なんで一人でボスに行かせたんだよ」

それは、誰にも喋らせない。糾弾、罵倒、卑屈なものなら得意だ。雪ノ下のおかげで問答や詰問にも慣れてきてるまでである。

「普通に考えてボスにソロで突撃なんざよっぽどの理由がないとしねえだろ。ましてや何があるかわからない、最初のボスだぞ？　そんなのにディアベル一人向かわせて、見殺しはお前らじゃねえか」

今度は俺の言葉に同調する声。——ああ、鬱陶しい。違うだろそうじゃないだろ。俺はいつも通りにやる。

「キリトがラストアタックボーナス取ったのだったって当たり前だろ。お前ら、ディアベルが死んでからまるで役に立たねえ。最前線で戦ってるって聞いて呆れるぞ、まじで」

反感買われる？ 結構なことだ。こういう感情論を抜きにしても、これから攻略してく人間には高水準でいてもらわないと困る。

そしてキリトは要だろう。アスナだつてそうだ。こいつらはネットゲ内でのトップカーストにあるべき奴らだ。だから、切り離すわけにはいかない。

「悔しかったら言い返せるくらい役に立ってくれ。まだあと何層あると思ってるんだよ。俺はこれからも攻略はするつもりだが、役に立たないなら躊躇わず見捨てるぞ」

「なっ……」

「ギブアンドテイクってやつだ。俺はお前らをクリアの為に利用する。お前らも俺をクリアの為に利用する。安心しろよ、ちゃんとボス討伐には出てやるし、指示も的確なら従ってやる。が、役に立ってやるんだから役に立ってくれよ？　茶番は懲り懲りだ」

……おおう、なかなかのヘイト稼ぎができたな。そろそろいいか。

「キリト、そういうわけだ。お前ともさよならだな。」

もう少し役に立つかと思ったが、どうにも噛み合わねえ」

「ハチマン、何を言ってる……」

「じゃあな。お前からもらった情報、それなりには役に立ってたぜ？　次会うときはボス討伐かな。お互い生きてたら、だけどな」

一切適切無視をして、ボス部屋を出ていく。そのまま隠匿スキルを発動して、索敵に引つ掛からないようにして消える。

……まあ、こんなもんだろ。結局リアルじゃ二度と会うかもわかんないしな。奴らに

PKされないようにだけ気を付けてリスクリターンを管理しないと。なんだよ、結局俺はこういう立ち回りの方が合ってるんじゃないかねえか。

「……はあ、武器どうするか」

まずは自分に合った武器探しだな。身軽になった分、ゆつくりできるか。……と、そうだ忘れてた。

「キリト、フレンド登録削除……と」

これで俺のフレンド欄はクラインと鼠女のみ。クラインにはそもそも会えてないし、鼠女もあれは情報屋だからまた別だ。金さえ払えば口も固いしな。

「……どうしたもんかな、まったく」

襟足を搔いて一人ごちる。意図せず多分な意味を持たせてしまったその言葉には、大きなため息も乗っかっていた。

E
p
i
s
o
d
e
l,
F
i
n

Episode 2, part 1 (☆)

— side 雪乃 —

「比企谷くん、誕生日おめでとう」

病室に眠る彼に、私はそつと声をかけた。あの事件から半年と少し経って、彼は誕生日を迎えていた。

既にもう何人が参ったようで、置いてあるものの数を見ればだいたいいつもの人達が来ていたことが予想できる。

「あなたは今、何をしているのかしらね。案外、戦っていたりするのかしら」

最後にまともに言葉を投げかけたのが、あの選挙の時。心から悔やまれる。わかってくれるものだとばかり思っていた？ 違う。彼なら私を理解して、察してくれるものだとばかり思っていた。それほどまでに彼に甘え、頼りきっていた。

「……たくさんは望まない。いつも通りでいい。だから、帰ってきて、比企谷くん。その時にこそ、お話をしましょう。あなたに伝えたいことも、言いたいことも、謝りたいこともあるの」

失ってから気づく。どれほどまでに彼が私にとってなくてはならないものだったのか。

「……ふふ、由比ヶ浜さんもライバル、と言うことになるのかしら」

川崎さんや戸塚くんも怪しいわね。……戸塚くんはちよつとそうあつてほしくはないけれど。

あなたが囚われてから、あの二人も悲しんでくれたわ。まったく、どこがぼっちなのかしら。

ざい……財津くんも、うるさいくらい泣いていたわよ？

と、そうそう、もう知ってるかもしれないけれど、小町さんは見事私達の後輩よ。奉仕部に入ってくれてるわ。

「……比企谷くん。私は負けず嫌いな。あなたも知っているでしょう？
だから、早く帰ってきて。勝負を勝ち逃げすることは許さないわ。そして、私を勝負
の土俵に立たせて」

酷く不安ではある。あるけれど、それでも……それでも比企谷くんならクリアしてし
まいそんな気がする。

いいえ、そんなことしなくてもいい。死なないで、生きて帰ってきて。

「……どうか無事で、比企谷くん」

——side 八幡——

「……ハッピーバースデー、俺」

21層の迷宮内で、ふと思いついたように呟いた。

1層のクリアから半年とちよつとで俺達は20層までクリアしていた。

やはりクリアできる。ということが大きなモチベーションとなったのか、前線へと上がるプレイヤーが増えた。

ディアベルのことがそれなりに堪えたのか、ボス討伐においては今のところ死者もゼロだ。

俺はと言えば相変わらずのぼっち生活。ボス討伐の度にキリトにはパーティに誘われフレンド再申請を出され続け（もちろん断っている）、素顔を出してすっかり人気者、攻略をまとめるアスナからは最重要アタッカーのポジションに任命させられ（断っているつもりではある）なかなか面倒な立ち位置に取らされそうにはなっているもの、それなりにやっている。

「……つと、あぶねえな」

ザン。と小気味いい音を立ててモンスターを両断する。

あれ以来、片手剣を捨てた俺はラインと同じ曲刀……タルワールを持った。その説明に一撃離脱のスキルもあると書いてあったからだ。しばらく熟練度を上げること幾月か、この曲刀から派生するらしいエクストラスキルの“刀”が俺の主武装になった。

連撃が多く、かつその連撃の数が多いほど上位のスキルとなることが多いこのSAOにおいて、刀のソードスキルは一太刀によるダメージが高いものが多い。

これは俺との相性がよく、好んで使っている次第である。

5層のボスのラストアタックボーナスで取得した大きいマフラーで口と鼻を覆うとまるで幕末辺りの人斬りっぽくなる。今の防具も軽装の和服だしな。

刀の情報を鼠女やクラインには流しておいたら、クラインもすぐに刀を取れたらしい。あいつ野武士みみたいな格好だからなかなか似合ってる。

「…………この辺りにしておくか」

マッピングはあまり進まなかった。が、まあこんなものか。

それなりに焦らずやれているだろう。今はギルドもそれなりに作られて、攻略への力の注ぎ具合もよくなっているし。

代表的なのはアインクラッド解放軍か。アイテムの分配を計り、安定した供給の元に攻略を進めていく。現在規模的にはかなりのものではあるはずだ。

キバオウもそこに所属しているため、俺はあまり良く思われていなさそうだ。更に付け加えれば少し増長している奴もいるらしく、最近あまりいい噂を聞かないな。

次点では意外なことにクラインが率いる風林火山。リアルフレンドを率いているらしいが、少人数ながら軍より役に立つまでである。接しやすい、というのもあるのだろう。最後は聖龍連合。それなりにレベルの高い攻略ギルドだが、レアアイテムハンターでもあるらしく手段を選ばないとの噂もある。

遭遇したことがあまりないから深くは言えないが。

それ以外はソロか、俺ら最前線——通称「攻略組」にいるのはそいつだけで、それ以外は中位のギルド。つてのが多いな。俺？ ソロに決まってるだろ。

「あれ、ハチマンくん？」

「あ？？」

白を基調とした装備に茶髪の美少女。おそらくマップピングに来ているであろうアスナがいきなり目の前に現れた。

……びつくりした。

「こんにちは。キミもマップピング？」

「終わったとこだがな。これから帰る」

こいつ、コミュ障なのかと思つたらむしろ超リア充。

ギルドが仕切りやすいボス討伐の時のソロ組をまとめて、かつ本人はあの見た目であの実力だ。今や大人気アイドル扱い。

……一部で攻略の鬼、とかとも言われているとか。まあ、アスナの案が中心になったら結構強引な策とかあるからわからなくもないが。

「え、もう?」

「今日は気分がそこまで乗らないから帰る。あとは適当に頑張ってくれ、じゃあな」

今日が誕生日となると、いくら俺でも心に来るものがある。だから帰って、適当に散歩して寝るのがいい。

そう思つて歩き出す俺の肩に手を置かれ、ぐいと引つ張られる。

……これ、つい何日か前にもやったよな確か……

「……なんだよ、俺は寝るんだ」

「却下します。ハチマンくん、私とパーティー組みましょ?」

強引に帰る手段などあるわけもなく、俺はもうしばらくマッピングすることが確定したようだった。

Episode 2, part 2

「スイッチチ！」

アスナの声に合わせて躍り出ていく。刀の強みの一つ、範囲攻撃。

アスナによって程よく削られていた三体を、俺は一太刀でまとめて沈めたのだった。

「お見事。さすが」

「お互い様だろ。なんだあのリニア、ビームじゃねえか」

「……私、ハチマンくんが走ってる姿、いまだにちゃんと見えてないんだけど？」

肩を疎めて流しておくことにする。下手なこというところいつはほんとに手が出てくるから怖い。

「少し休憩にしましょ。サンドイッチ持ってきたけど食べる？」

「いや、いらん」

「……そう」

このSAOは、感情表現がしつかり伝わるように一部感情は過剰に演出されるようになってる。例えば頬が赤くなるとかは顔が丸々赤くなったり、落ち込む時は心から落ち込んでいるように見えたり。由比ヶ浜辺りにやらせたら凄まじい百面相が見れそうである。

「……あー、やっぱもらうわ」

で、目の前のこいつは目に見えて落ち込んでやがる。

感情の絡む演技ができないこのゲームでのそれは、わりとマジだからかさすがの俺もスルーしきることができず、一転して笑顔になるアスナからサンドイッチを受け取った。……もしかして演技なのか？

「私、ハチマンくん、キリトくんが要かしら」

「なんだよ藪から棒に」

「アタッカーよ。前にも言ったけど、攻略組における完全なアタッカーはかなり少ないの。ましてやそこに私くらいの剣速や、キリトくんくらいのスキルの速さ、ハチマンくんみたいな速さを持つ人は今のところいないわ。だから、これからのボスは私達がしっかり攻めていかないと、と思って」

「……俺もなのか？」

できれば楽しんでいたい、と思うのは性分だ。

……アスナの顔を見る限り、無理そうだが。くそ、膨れっ面とか可愛いからやめろ。

「今までのボス戦、ほぼ全てファーストアタック取ってるのハチマンくんじゃない。正直に言えばあんなこと言ったハチマンくんにも誰も何も言わないのは、やっぱりその強さ

があるからよ？」

「光栄なことって」

「茶化さないで。キリトくん、心配してるのよ？」

「いらん心配だ。よく考えてもみろ。俺達は今こうして協力し合ってるが、状況的に仕方がないから、だ。

そもそも合ったことすらないし、クリアしたら二度と会うこともないだろう。利害の一致は最初から裏切る意思を見せない限り一番合理的に協定を結べるんだよ。お前だってそうだ」

これくらい言っておけばいいだろう。あまり変な期待を抱かれても困る。

……俺だって、お前らに期待を抱かないんだから。

「……だからあの時あんなことを言ったの？」

「ディアベルがバカだと思ったのは本当だし、苛ついたってところは否定しないでおく。茅場が言ってただろう。これはゲームであっても、遊びじゃねえ。ゲームとして楽しんでも、遊んでる余裕はないんだよ」

「……参ったな。じゃあ、今のところハチマンくんの思惑通りなわけだ」

「お前やキリトのしつこさ以外はな。なんなんだお前ら。いい加減諦めてくれよ」

「それは無理よ」

「なんでだよ。そこはこいつ痛いしキモい。って離れるとこだろ」

「どこにそんな要素があつたのよ……それに」

「それに？」

「……まだこれは秘密。対ハチマンくんへの最終兵器だからね？」

「笑顔で怖いこと言ってるなよ。……雑談は終わりだ。続きやるならやるぞ。やらないなら帰る」

立ち上がって少し準備運動。いや、やる意味はあまりないんだが人のサガと言うやつか。

準備運動はしないとダメだよ！って戸塚にもよく言われたしな。

……ああ、戸塚に会いたい……

「……ん？」

戸塚に焦がれているとピコン。と着信。見ればフレンド登録の依頼が来ている。送り主はアスナ。……なんかんだ、こいつは。

「拒否——」

「拒否したらパーティ解散しないからね？ 脱退しようものなら宿までついてくわよ

「？」

「……お前なに？ 俺のこと好きなの？」

「茶化さないの。いいから観念してフレンドになりなさい」

……俺、こいつのこと苦手だわ。ここまで強引な奴会ったこともねえ。陽乃さんを除いて。つかあの人とは例外だ。カテゴリに分類しちやいけない。

「ありがと。じゃ、再開しましょうっか」

やる気的には三割減くらいのモチベーションで、俺は思いきりわかるようにため息を吐いてやった。

「……ハチマンくん、ハッハ」

「ボス部屋、みたいだな」

あれから数時間またマッピングをしてようやく、俺達はボス部屋にたどり着いた。結局ボス部屋見つけるまで探すと俺ほんと仕事人間。ボス討伐はやらなくてもいい？
ダメか。

「入ってみる？」

「構わんが、すぐに出るからな。何かあるかわからねえから、逃げる準備は忘れるなよ。俺は助けたりしないぞ」

「わかってる。万が一の時は私に構わないで」

……だから、そういう反応はおかしいだろうって。

「……まあいい。軽く見るぞ」

コクリと頷くアスナに先行して、俺はボス部屋に入った。

……いた。中央に刀を腰に差した鎧武者が立っている。あいつがボスだろう。

「……動かないわね」

「近づきすぎるなよ。動かないってことはトラップの可能性もある」

あの刀、俺やクラインのとは違うな。俺達の使う刀はいわゆる世間一般でいう刀で、刀身が程よい長さかつ反りもあって、これは実は幕末の頃に作られた携帯性の良いものであり、あのボスが差している刀は戦国時代くらいに作られた武者用の刀だ。反りがあまりなく、刀身が長い。おそらく、刀のソードスキルを使うんだろうが、どの程度の威力となるのか……

「帰るぞ、アスナ。攻略会議を開く準備をしておけ。鼠女には俺から情報を流しておくから。三日あれば出回るから、三日後くらいに開くのがいいだろう」

「うん、わかったわ。……ねえ、ハチマンくん」

「なんだよ」

「今回も、みんな生きてクリアしようね」

「当たり前だろ。どうでもいい連中ではあるが、死なれたら攻略が遅れるからな」

「……素直じゃないんだから」

「本音だつっの」

「気づかぬのは本人ばかり。ってね」

なんなんだよほんとにこいつは。……まあいい、次はあれを倒す。攻略組へ参加したがる人間も増えているし、ペースは更に上がるだろう。

……見てろよ茅場。クリアしたらお前にこのゲームの感想を酷評して送ってやるか

らな。

Episode 2, part 3

「うす」

「ハッチじゃないか。誰かと思ったヨ」

「ボス部屋見つけたから報告にな」

鼠女……情報屋のアルゴはこつちを見てにこりと笑った。

アスナと別れた後、俺はこいつの根城へと真っ先に来ていた。……ほんと、過労死と
かしないよな、俺。

「まだ解放されたばかりダツテのに、ずいぶん早いナ」

「攻略の鬼に強制連行されたんだよ。ボスの中身も見ておいた」

「ふむ」

ボス部屋までのマッピング情報や、ボスの外観を伝える。こいつは攻略組には参加しないがネットワークはマジで凄いから、三日待たずに情報が渡るだろう。

「……にしても、ハッチとアーちゃんとは、攻略組のトップクラスの揃い踏みは見てみたかったものだナ」

「アスナはわかるが俺は違うぞ」

アスナやキリトはこのゲームにおけるトップカーストだ。キリトはコミュ障っぽいところがあるだけで、話せばちゃんと通じるし、アスナはあれだ。人気者だしな。俺とは違う。

「知らぬは本人ばかりカ。ハッチは自己過小評価させすぎダ。攻略組でキー坊、アーちゃん、ハッチの三人と並べる人間は少ないんダヨ」

「そう言われてもな……」

「影纏い」

「……あ？　なんだそれ」

「ハッチの二つ名だそうダ。攻略組の一部で呼ばれてル。キー坊は黒の剣士で、アーちゃんは閃光、だとカ」

なんだよそれ、黒歴史が出てきちゃうじゃないか。

「やめろ恥ずかしい。第一なんだよ影纏いって」

「青い影が一瞬で距離を詰めていくかららしい。ハッチは少し、自分へ向けられる評価や感情を考えた方がいいナ。言われたことないカ？」

……雪ノ下、由比ヶ浜……

「……考えておく」

「その顔はあるようだな。ま、そういうこつた。ボス討伐、頑張れヨ」

「せいぜい生きて帰ってくるさ。じゃあな」

少しの居心地の悪さを感じて、俺はアルゴの根城を後にした。

……なんなんだ、どいつもこいつも。なんかおかしいだろ、所々違う。その違いが、どうにもモヤモヤして気持ち悪い。

きつちり三日後、攻略会議の開催場所に俺はいた。軍の連中とアスナ主導で会議は進められていく。

「……ハチマン、隣いいか？」

「俺の所有物じゃないからな、好きにしてくれ」

いつも無言でパーティ申請やら送ってきてたキリトが今日は同じテーブルに座った。他の空いた椅子には風林火山の面々が。まあ、別に構わない。

「ハチマン、ボス見たんだよな？」

「本当に見ただけだ。やり合ってすらいねえから、どんな攻撃が来るかとかまではわからない」

「そ、そうか」

ぼっち舐めんな。会話を打ち切るのは得意分野だ。

「……では、今回のパーティ編成ですが、更なる攻略組の人数増加の為に、ハチマン、キリト。この兩名を先頭に立てた編成で、短時間での撃破を望みたいと思います」

「はっ？」

……え、何言ってるんのあの攻略バカ。いや、言わんとしてることはわかるけど何してくれちやってるの？

それ俺がキリトとパーティ組まなきやじやん。やだよ気楽にやらせてくれよ。

「なんでや！ いけすかんソロ野郎と同じソロ野郎を先頭つて、軍の統率力でまた攻めた方がええに決まってるやろ」

「ですが、時間がかかりすぎてしまう。全体の五分の一を過ぎて、それでも短時間でのボス討伐。これができれば新規の攻略組への参加者を増やせます。増えればそれだけ、攻略組の生存率が上がる。」

それに、軍に彼らよりも素早く、鋭く動ける方がいますか？」

……あれ、アスナの容姿だからできるチートだよな。

かなり強引なのに、有無を言わせない。本人の実力もあつて余計に。

……はあ……

「ハチマン……その、パーティ申請、送るぞ」

「ああ」

おいこら、なんで少し嬉しそうなんだよキリト。海老名さんが喜びそうだからやめろ。

……こいつもこいつだ。なんで俺が嫌にならないんだろうな。

「二人のフォローは今回は風林火山にやつてもらいます。他はおそらく沸くであろう取り巻きの排除で。いいですね？」

さすが攻略の鬼。すげえスパルタだ。今はなんだかんだ軍が統率をしてるからいいが、もしアスナが本当に先頭に立って指揮をすることになったとき……

——その時、今までのように犠牲者なく、ボス討伐ができるのだろうか。

ボス部屋の中央に佇むボスは、この団体様にも反応しない。
念のため、全員で中央まで歩いて行くと、それでもまだ反応しない。

「……どうする?」

「とりあえず一発やってみる」

キリトに軽く答えて、俺は手元に投げナイフを構えた。あれから刀と平行して鍛えている投剣スキルは、敏捷性依存のものが多いためかなりの威力と速度となっている。

開幕の一撃としては悪くないだろう。

「……じゃあ、はじめるぞお前ら」

不自然に静かなボス部屋のせいかわ、みんな無言で頷き返してくる。

それを合図に、俺はボスへ向けて投げナイフを投擲した。

「――！」

我ながら結構な手応えで投げたそれは、一太刀で斬って落とされた。

攻撃に合わせて開幕カウンターをするタイプだったのか。ナイフを投げておいて正解だな。

「全員、散開！」

アスナの声に全員が走り出す。同時に雑魚が沸いて、ボス戦が始まった。

「ハチマン、行くぞ！」

「わかってる。先行する」

一足で飛び付いて、いつも通りソードスキルを発動する。……手応えはあり。

このままキリトが追い付くまで少し斬り結んで、キリトが来たタイミングで後ろへ下

がる。

「うおおおおおっ！」

「そらよ」

斬る、斬る、斬る。

ある程度被弾したら体力の少ない方が下がって回復。また二人で攻める。俺が一太刀浴びせれば続けてキリトが連撃を加えて、また俺が後ろから何発も叩き込む。

「……………すげえ」

雑魚をひとまず全滅させたらしい周りからそんな声が聞こえた。……………そうだな。キリトと組んで攻撃するのが一番やりやすいのは事実だ。さすが、と言うべきだろう。

「ハチマン！」

キリトを飛び越えるようにしたソードスキルをぶつける。

相手の体力は半分くらい。順調にボス討伐は進んでいるかのように見えていた。
……この時までは。

「――！」

ボスの咆哮。何かの前触れか？

刀を構え、すぐにでも対応できるようにした時に、ボスと目が合った。

「うわっ！」

「キリト？」

途端、すぐ隣にいたキリトが吹き飛んだ。なんだ、攻撃……したのか……？

「HPは減ってない。大丈夫だ！」

「じゃあ、なんだって……っ！」

俺とボスの周囲に光の壁が出来ている。触れてみると見事にあいつらとは遮断されているようだ。

壁の向こうでは、雑魚が今までの非にならない数が沸いている。

「ハチマン！」

「慌てるな。俺が発狂しちゃうだろ」

……つたく、ほんとになんだってんだ。

「決闘。つてのらしいな。ボスから挑まれるとは思わなかった。とりあえずお前らは雑魚を全部片付けておけ。……俺は、とりあえず逃げしておくから」

「ハチマン！ 絶対に無理するなよ！ 死ぬなよ！」

「当たり前だろ。フラグだって立てねえよ。むしろ早く助けに来てくれ。泣きそうだ」

震えそうになる手を振りきるように思いきり刀を握る。

……ああ、珍しくイラついてるな、俺。挙げ句こんな仕打ち。神様とか俺のこと嫌いすぎだろ。ふざけんちくしょうめ。

「……なんだ、わりと落ち着けてるな。怒ると冷静になるタイプなのか、俺って」

まあいい。発狂したり、泣き崩れてしまわないならいい。

……死にたくはないしな。その辺りの鬱憤やらも全部込めて――

「――お前を殺すぞ、化け物野郎」

……これ、死亡フラグにはならないよな？

Episode 2, part 4

「……くっそ、一対一になると強いな、こいつ」

攻撃に合わせて攻撃をぶつける。俺の体力は残り半分ほど。直撃はすなわち――

「らあっ！」

考えるな。とにかくやれ、動け。殺すと決めた。倒すんじゃない。殺すんだ。

一対一になると攻撃の手数が多すぎて、回復してる暇なんかありやしない。どうすればこれは解除されるんだ……

「っ！…くそ……」

言ったそばから考えすぎた。捌きをミスった俺は、大きく体勢を崩して、柄で腹を殴られる。体力バーが残り僅かまで削れて、一瞬気が遠くなる。

尻餅をついた俺に、ボスは刀を大きく振り上げていた。
やけにゆつくりを感じる。ああ、本能的に察した。これは、俺は、死――

「ハチマンツッ！」

怒号とともに、俺の身体が何かに動かされる。

少し放心してしまつたらしい、俺はどうやらキリトに助けられたらしい。

「取り巻きを全部倒せば解除されるみたいだな……ハチマン、良かった……」

「……バカ野郎、今の下手したらお前直撃コースだぞ？」

「でも、俺が行かなかつたらハチマンが死んでた。そうならなくて、本当に良かった」

「……」

言い返せず、ポジションを使う。……確かに、俺はあのまま死ぬかと思った。手が震

える。良かった、死ななくて、生きれて。

「ハチマン。……俺はさ、ハチマンが本心からあんなこと言ったなんて思えない。いや、本心もあるのかもしれないけど。気づいてるか？俺とボス討伐で会うたびに、気まずそうにこつち見てて。SAOは感情の表現が過剰だから、ハチマンの表現、ほとんど隠せてないんだぞ」

「……」

キリトはこの場に不釣り合いなくらい笑顔で、助けたにも関わらず文句を垂れた俺に笑いかけて、少しだけイビツだけど、笑顔とわかる顔で。

「……俺は、話すの下手だし、意思を伝えるのも上手くはないかもしれない。けど、俺はハチマンとは、友達だって、そう、思ってるから」

「……キリト」

「ハチマン、凄い警戒心強いし、信じてもらえるかわからにけれど、単なるフレンドじゃなくて、友達だって、思ってる」

……はは、何を言ってるんだこいつ。

「……話は後だ。来るぞ」

「ハチマン、今気持ち悪いくらい笑顔だけど、気づいてるか？」

「うるせえ、ボスにお前を提供するぞ」

くそ、いきなり何を言い出すんだこいつは。

……ふざけんな、手の震えが止まっちゃっただろうが。友達って、俺もお前も、ゲムクリアしたら会うことはねえはずだろうが。

「俺の目標の一つな。ハチマンに俺のこと友達って言わせる」

「うるせえつつただろ。ぼっちにそういうの禁句な。勘違いしちゃうだろ」

「勘違いじゃないぞ」

……ああくそ、調子狂う。

「……お前も異質な奴だな。行くぞ、キリト」

「ああっ！」

もしキリトの言葉が嘘でも、どちらにせよゲームクリアまでの関係だ。保険だなんて自分でも理解はしている。けど、自分からそこまで踏み込める勇気はない。

嫌になるくらい軽くなった足取りで、俺はボスへと躍り出た。

——side キリト——

「っは」

青い影が俺よりも速く出て、ボスに攻撃を入れる。

……言ってやった。あのとき、八幡は確かに本気で苛立っていたのだと思う。けれど、あそこで敵意を自分に向けてることによって場を治めるってのは俺も考えてたから、もしかしたらって。

そこだけ表情を変えずにやったハチマンは凄いけど。

「そこだあつー」

ソードスキルをハチマンに続いて入れて、俺達は距離を取った。またいつあの”決闘”がくるかわからない。

必然的にボス戦は俺とハチマンの二人が攻撃することになっていく。

——ハチマンは、距離の取り方が上手い。一緒にいても話せば返してくれるけど、自分からは程よくしか話さないし、俺が話せなくても間を持たせる必要なく沈黙して、それが嫌にならない。ゲームをやっているって共通点からも、本人同士の相性も悪くないんだろうな。年上だけど、友達になりたいてって思った。

だから、フレンドを消されたのは結構本気で凹んだ。

「ハチマン、多分、咆哮の後に視界に入った奴が”決闘”の相手になる」

「なるべく俺がお前のどちらかが受けた方がいいな、それは」

「だから、タイミングを上手く合わせて行こう。行けるよな？ ハチマン」

「行かなきゃおしまいなんだから、やるしかないだろ」

相変わらずの少し捻くれた返答に苦笑する。けど、こうしてハチマンと組んで戦えることが、嬉しかった。

「うおおおおおっ！ バーチカル・アーク！」

二連撃が決まって、ボスが怯んだ。スイッチ……はする必要もないか。ハチマンはいつも通り、既に後ろに回っていた。

「キリト、お前のソードスキル、威力高すぎじゃね？」

「ハチマンこそ、いつ後ろに回ってるんだよ」

「普通に回ってるだけだぞ。——浮舟」

1層のボスがディアベルを倒した切り上げ技。後ろから斬りつけて、ボスは咆哮した。

「ハチマン、今度は俺が」

俺とボスの周りに壁が現れて、また取り巻きがたくさん沸き始める。集中しろ。やるぞ、俺。

「キリト」

いつの間にか俺の後ろにいたらしいハチマンから、壁越しに声かけられた。

「とつとと雑魚全滅してくるから、死なないようにな」

「……ああっ！」

いつもの調子でかけられた声は、それでも、俺を元気にしてくれた。

……ハチマン、今俺、ギルドにも入ってるんだ。ハチマンは誘ってもギルドには入ってくれなさそうだけど、それでも紹介はしたい。みんないい奴だから。攻略組を目指してみんな頑張ってるんだ。

「じゃ、ちょっと行ってくる」

後ろの声が急速に離れて行く。……ほんと速すぎだろ、あいつ。

「おいハチマン、こっち俺らの受け持ちだから！」

「あー、悪い」

……つたく。

「よし、来い！」

絶対に、ゲームをクリアしてみせる！

——side 八幡——

エギルの斧に真つ二つにされる雑魚を見届けて、俺はボスに意識を向けた。キリトは……すげえな、体力七割も残して戦ってる。さすが、と言うべきか。現状あいつが最強プレイヤーなんじゃないのか？

「ハチマン、行ってこい！ お前らの背中には任せろ」

「あと少しだしな、とつと削ってくるわ」

「悪いな、お前らに託すようになって」

クラインにヒラヒラ手を振って、申し訳なさそうなエギルを見る。それから、俺は肩を竦めた。

「適材適所ってやつだ。俺は本当は仕事したくないんだが、死ぬのはもつと嫌だからな。まあ、やってくる」

全速力で駆け出して、キリトの身体を飛び越える。走ってる間にスキル発動のためを作って、俺は刀を思いきり振り上げた。

「旋車」

刀の範囲重攻撃スキル。中型くらいまでなら打ち上げ判定のある跳躍からの上段打ち下ろし攻撃を真正面から叩き込んで、背後のキリトに声をかける。

「一応ポーション飲んでけ」

「わかってる。残り、全部削るぞ！」

答えは返さず、目の前のボスと斬り結ぶ。向こうの縦斬りを捌いて、こつちも横風ぎで応戦する。基本、モンスターは攻撃を捌くことはしない。だから攻撃を振り抜いて怯まなかつたらすぐに回避動作を取らないとかえって危ない。

「シャープネイル！」

片手剣の三連撃ソードスキル。俺の回避した真後ろからキリトが一気に勢いよく叩き込んできた。

……だから、なんだあの威力。俺が必死にいろいろ叩き込んだ攻撃を三発で並べやがった。

「っ！ 咆哮したぞ！」

おそらく最後の”決闘”。キリトは三連撃と共に斬り抜けたし、視線の先には俺しか

いない。

「……これでおしまいだな」

俺とボスが壁に遮断される。雑魚が沸いて、先ほどの流れが作られた。

「キリト」

「どうしたんだ、ハチマン」

「俺、そんなに速いのか？」

「速すぎだ。個人的にはもう少し腕力にも振れよ」

「……そうか」

さつきと違って落ち着いてる。まあ、ゆとりが持てたのは確かだろう。……誰のおか

げとかは言うつもりはないけど。

「……面倒なサイクル組みやがって、もう終わりにしようぜ。な」

ボスの攻撃を躲す。そのまま返すように横に一太刀。すぐに後ろに引いてまた前進。今度は首付近に一太刀。首斬ったんだから倒れるよ。って、まあ無理だよな。

「緋扇」

刀の中位ソードスキルを当てる。刀にしては珍しい三連撃のソードスキルで、ここに来て、ようやくボスが大きく怯んだ。

……黒歴史時代に戻っちまったのか、何を思ったのか、俺は刀を納刀していた。

キリトの三連撃といいこれといい、これらのソードスキルは隙が少ないという利点がある。だから、これで――

「終わりだ。蓮華！」

刀の初期ソードスキル。敏捷依存による突進斬撃。わざわざ壁の周りを全力疾走して、適応されるかわからないけど抜刀の鞘走りまで利用して、俺はボスを真一文字に斬り裂いた。

ポリゴンとなって、ボスが消滅していく。壁も消えて、取り巻きの雑魚も消えていく。コングラチレーションの文字が浮かび、つまりそれは、ボスの討伐を意味していた。

Episode 2, part 5

「キリト、お前ギルドに入ったんだな」

ボス討伐後、新しい階層に行くのはひとまず後にしてキリトやクライン達と酒場へ入った俺は、もう逃げることに叶わぬ状況ゆえに仕方なく、ほんとに仕方なくキリトと再びフレンド登録した。

攻略の鬼が後ろで睨み付けてくんの。マジ怖い。

「ああ、月夜の黒猫団っていうギルドにいる。高校生の友達ギルドらしいんだけど、攻略組入りをしたいっていうんで、今鍛えてるよ」

「やり過ぎに注意しろよ。そういうのは定期的に無理したくなるのが多いからな。ソースは俺」

「お前なのかよ……」

「レベル上がりまくってやれること増えて、結構無茶なダンジョンとか挑みたくなるだろ？」

でも、このゲームでそれをやったら、死んでおしまいだ。キリト、そうなったときは多少きついこと言ってもやめさせる。それ、全部お前に乗っかることになるからな」

「……わかった。絶対にあいつらは死なせない。一緒にクリアしようって言われたんだ」

「良かったじゃねえか。ギルドの連中はお前が攻略組なのは知ってるのか？」

「言ってるよ」

まあ、攻略組を目指すギルドならキリトが攻略組のプレイヤーってわかったら大歓迎か。

キリトがどれほどのプレイヤーか知ってるかは怪しいが。

「……と、そーいやこいつどうするか」

「どれ？」

「今見せる」

ストレージから先ほどボスドロップした武器を取り出した。

ラストアタックボーナスで獲得したあのボスが持ってた刀だ。俺の持つ刀よりも刀身は長く、反りは少ない。

「要求が足りてないんだよな。敏捷でいいからそこまでじゃないけど……」

「名前は……雷切丸って。平安時代の刀かよ。茅場は陰陽師でも見てたのか？」

しかもあれ、こんな見た目じゃなかっただろ。

……って、ゲームにそこまで求めるもんでもないだろうけどさ。

「まあ、しばらくはお蔵入りだな」

ストレージに戻して、それから一息つく。

それなりに短い時間でボスを倒せたことは大きく動くのか、新規攻略組、増えると便利にはなるが。

「攻略組、増えるといいよな」

「でも、軍の動きには注意しないと」

クラインの言葉に少し神妙な顔でアスナが答えた。

軍……キバオウのところだな。

「元々ディアベルの取り巻きで、見る感じ自己顕示欲も高い。装備もプレイヤースキルもまあまあなんだろうが、少なくともディアベルの代わりにはならないな。いろいろ足りなすぎる」

軍の古参。という強みだけしかなくせに、余計なことをしないでくれるといいが。

「さて、と。俺は宿に戻る」

「え、もう行くのか？」

「クライン、ぼっちは一人の時間が愛おしいんだよ」

ヒラヒラと手を振って、俺は酒場を後にした。

外に出ると解放感を得て思いきり息を吐いた。まず今の宿を引き払って新しい階層に移動するか。

……わりとぎりぎりまで行ったからな、精神的にも疲れてるし、今日は早めに寝るよ
うにしよう……

「……なんなんだろうな、ほんと」

危機的状況だから、ある種のつり橋効果なのだろうか。遊んでる場合じゃないなんて

俺自身が言ってるしな。自分からこんなに話すのも珍しいし、話しかけられるのも珍しい。

……まあ、俺はそれなりの腕もあるから、実力がものを言うところだと話しかけられるのかもな。

……だめだ全然嬉しくねえ。が、俺と友達になりたいと言ったキリトの言葉は、話し半分くらいには聞いておくことにした。

クリアしたら会うこともないだろう。っていう保険にも似た考えが、俺を予想以上に積極的にしてるのかもしれないが。

あれから一ヶ月ほどで、攻略の様相はかなり変わった。攻略組へ参入したい中位ギルド達も安全性を重視した上で迷宮の攻略。ボス戦には参加しないものの、ネットワークの広がりや強さの水準が軒並み上がりながら順調に進んでいた。敵も強くなり、まだ足並みが揃ってこそいないものの、落ち着けば攻略スピードは増すことだろう。

かくいう俺も、25層のボス部屋探しとレベリングの為に迷宮を徘徊していた。パーテイ？ ばっかお前、ソロに決まってるだろ。キリトはギルドを鍛えつつ攻略、アスナはそもそも知らないし、クライン達もギルドで動いている。そして俺はぼっちなりの動きかたでやらせてもらってるわけだ。

「よっと」

着実にレベルは上がっている。俺はあの雷切丸を装備する為にとにかく敏捷を上げることになっているんだが、ますます速くなってるらしい俺はあの黒歴史時代にでも自分に付けそうな二つ名が定着しそうになっていた。

「キリトとかアスナの方が派手で目立ってるが、な」

あいつらは別格だ。23層のボス攻略でラストアタックを取ったヒースクリフってタンクもか。あれも俺らにはない防御面での強みがあるしな。

ちなみに攻略組で戦ってみたくないプレイヤーで晴れて一位を取ったのは俺らしい（アルゴ談）。相変わらずの嫌われものである。……別にいいし、ぼっち万歳。

「おや、ハチマン君か」

「……うす。お前もマツピングか、ヒースクリフ」

「そんなところだ。お前も、ということは君もか？」

「まあな。レベル上げがてら、適当にな」

「ふむ。では、パーティでも——」

「それは断る。ボス戦ならいざしらず、な。俺はこれが気楽なんだ」

即答した俺に嫌な顔一つせず、ヒースクリフは笑みを浮かべた。人の良さそうな奴に見えるのに、何故か裏がありそうに見えるのは、まあ、俺だからか。基本的に信用とかなしいしな。

「なら、次のボスでは君とのパーティを望もう。キリト君やアスナ君にも興味はあるのだがね」

「……後ろからフレンドリーファイアはするなよ?」

「はは、君は本当に面白いことを言う。やる気もなく、捻くれた物言い、辛辣な言葉を平気で投げ掛ける。なのにいざ戦闘が始まれば誰の目に止まるよりも速く攻撃をしかける」

「何が言いたいんだ?」

「知っているかね? キリト君やアスナ君もだが、君も攻略組、引いては攻略組を目指す者にとって目標の一人なのだよ。」

「誰よりも速く、真っ先に攻撃を与えるその姿は勇敢に映るものだ」

「そりゃつり橋効果って奴だな。確かに俺はボス戦でそれなりに仕事してるつもりではいるが、この速さの大元はソロで敵に囲まれたときに逃げられるようにして振ったもの

だし、勇敢てのもおかしい話だ。適材適所だろ？ 俺は速いから真っ先にヘイトを取って後続に殴ってもらおう。ヒースクリフ、お前が盾を持って守りに徹してくれてるのと同じだ」

「……君という男は、大人びているのか子供なのか、わかりづらいな」

「少なくとも、アンタよりは年下だろうよ」

「それは違うない」

何が面白かったのか、楽しそうに笑うヒースクリフ。

……まあいいか。そろそろ行こう。話すの疲れたし。

「パーティの件は会議の時に勝手に申し出てくれ。決まったらそれに従うから。じゃ、俺は行くぞ」

「うむ、では、またな。ハチマン君」

ヒラヒラと手を振って、迷宮を歩き出す。そもそもあいつ、俺とパーティ組むのは構わんがタンクで俺と足並み揃うのか？ 最近キリトやアスナでもこと移動に関しては俺と足並み揃えるのきつそうなのがあるってのに。

「……ま、そのときに考えるか」

ひとまず湧いたモンスターを倒すために刀を抜く。さて、やるとするか――

「あ、あのっ」

「あ？」

なんか、聞き覚えがありそうな、なさそうな声が聞こえて振り向くと、そこには黒い髪に白い防具、そして槍を両手で持った女が立っていた。

Episode 2, part 6

「つまり、パーティメンバーとはぐれて、俺が一人でモンスターに囲まれてたから声かけた、と」

「うん、そうなの。その、攻略組の人だったんだね」

「それでもなきやこんなどころにいないだろ。お前は攻略組ではないのか？」

「うん、まだね……ギルドメンバーに一人、攻略組の人がいるけど。私達はいわゆる中位ギルドだから」

この雪ノ下に声が似てる女はパーティメンバーとはぐれて、咄嗟の善意で俺を助けようとしてくれたらしい。いや、まあ心意気はいいとは思うが。

「ずいぶん無茶してるもんだな、レベリングかなりきついだろ？俺が弱かったら二人

して死んでたぞ？」

「それは……」

あー、雪ノ下の声でガチ落ち込みはやめてもらいたい。なんか嫌な感じになる。

「まあいい。他のメンバーは大丈夫そうなのか？」

「今日は攻略組の人もついててくれるから、安全なマージナリングでやるつもりだったの。はぐれちゃったけど」

「追跡スキルは？」

「……取ってない……」

「……はあ」

なんともまあ、間の抜けているというか。声が雪ノ下に似てるだけ、か。

いや、あいつがここにいるにも困る。由比ヶ浜がここにいるにも困る。いたら絶対前線に
なんか出させない。

「わかった。見殺しにするわけにもいかねえしな。メンバーと合流できるか、入り口に
戻るまでは同行してやる」

「ありがとう。私、サチっていの。あなたは？」

「ハチマンだ」

サチと名乗った女は俺の名前を聞いて神妙な表情を浮かべた。

なんだよ、まさか名前知れ渡っちゃってるの？ え、なにもしかして大量の良からぬ

噂が——

「もしかして、キリトの友達？」

「あ?」

思いがけない名前に、俺は思わず固まった。キリトの友達……キリト……ってことは、

「もしかして、月夜のなんちゃらの奴か?」

「うん。月夜の黒猫団のサチって言うの。ってことはやっぱりキリトの友達の——」

「あいつとはフレンドだな、確かに。ってことは来てるのか、あいつ」

友達とはまだ認めてない。フレンドと訂正して、俺はキリトへメッセージを送った。このお守り、思ったより早く終わりそうだ。

「ハチマン！」

「よう、キリト」

「助かった。悪い」

「監督するならしつかりしておけよ。こういうとき、責任を負うのはお前になるんだぞ。だから俺はそういう立ち位置は嫌いなんだ」

少ししてキリトが何人かの男を引き連れてやってきた。

少しきつめに言って、ちよつとだけ凹ませておく。

……なんでこんな偉そうなんだ俺。

「まあ、気を付けてやれよ」

「……うん、気を付ける」

反省してるのか、いつもの男らしさはナリを潜めて素直に頷いていた。
……小町もこれくらい素直に話を聞いてくれればいいんだけどなあ。

「これでこの話はおしまいな。じゃ、俺は行くぞ」

「あ、待ってくれよハチマン。その、ギルドメンバーの紹介くらいさせてくれよ」

ええー……

「あ、俺は月夜の黒猫団のリーダーのケイタだ。よろしくな。」

で、そっちのメイスを持つてるのがテツオ。ソードを持つてるのがササマル、槍を持つてるのがダツカード」

「……キリトから聞いてるだろうが、ハチマンだ」

「影纏いのハチマン、だよな？」

「おいやめろキリト。それ恥ずかしい」

「なんでだよかつこいいじゃないか」

……あ、こいつの年齢はそういうのドストライクか……

「さつき見せてもらったけど、ハチマンって本当に早いんだよ？ いつの間にかいなくなつて攻撃してて」

「スピード重視だからな。そこのバカ力とは違う」

「んなつ、酷くないか!？」

「キリト、お前の背負つてる剣の重量って確かソードとほぼ同じだよな？」

ほら、後ろの二人もそれ聞いて引いてるぞ。

「ハチマンだって、いつも瞬間移動して後ろから斬りかかっているだろ。なんだよあれ、反則だろ」

「ばっかお前、俺は影が薄いんだよ。ステルスなの。わかる？」

……あれ、なんか俺も引かれてる？

「ところでサチはどっちがメイン武器なんだ？」

「剣と盾を振り回すのも構わないが、槍の方がまだ使えてるぞ？」

「あー、それなんだけど」

ケイタの説明では、キリト加入によりパーティ内での装備を見る限り、サチは盾を持って動いた方がいいのではないか、ということだった。

本人達が納得済みなら別にいいんだが。

「私……ちゃんと前でキリトの背中を守りたいから、盾、頑張る」

ヒューヒュー。なんて声が入って顔を赤くするキリトとサチ。ふむ、つまりあれか。

「リア充爆発しろ」

「ハ、ハチマン！」

キリトの奴、やつぱりぼっちじゃねえじゃねえか。

……悔しくなんかないからな。

「……ん？」

不意に、ピコン。とメールが届く音がした。

アスナからだ。どうしたんだろうか、あの攻略の鬼が寄越すメールなんて、基本的にレベリングか、よくわからん連携の練習か、と攻略のことばかりだ。

またそれらの依頼かと思ったら、キリトにも来てるのか、あいつもウィンドウを開いていた。

「キリト、お前もアスナからか？」

「ああ」

俺ら二人に……つてことはまた違う用事か？

そう思つてメールを開いて俺は絶句した。

——それは、アイコンクラッド解放軍が見つけたボス部屋に自軍のみで参加して、壊滅したという内容だった。

Episode 2, part 7

「やあ、ハチマン君。先ほどぶりだね」

「軽口叩いてる場合かよ、ヒースクリフ。お前もアスナからメールが来たのか」

「……いや、これは私の失態だ」

一旦月夜の黒猫団と別れた俺とキリトはアスナに呼ばれたレストランに顔を出した。ヒースクリフとアスナ、そして聖龍連合のリーダー、リンド。

リンドはディアベルの取り巻きの一人だったが、キバオウと袂を別ち自分達でギルドを立ち上げた。数では軍には及ばないものの、こちらはプレイヤーの質が高い。トッププレイヤー集団であることを意識したいそうで、ユニフォームは青く、俺も青い服をよく着ているせいか定期的に勧誘される。

……ディアベルが死んでからしばらくは俺のこと親の仇を見るような目で見てた。せにな。もちろん、ギルド勧誘は断っている。

「どういうことだ、ヒースクリフ」

「ボス部屋を見つけたのは私だ。情報屋に届け、会議の開催を願おうと思つたら軍の者に会つて、有用な情報だからと教えたんだ。人数が多く、情報屋にも早く行き渡るだろうと、な」

「したら自軍で特攻したと。アスナさん、壊滅的と聞いたが、具体的な被害は聞いているか？」

リンドの言葉にアスナが俯いた。……かなり、よろしくないようだ。

「数字まではわからないけど……軍の主力プレイヤーはほぼ全員死亡、迷宮攻略に出ている中位層上がりの者も全て駆り出しての討伐だったみたいで、それもだいたい……事実上、今の軍には攻略組はいないものと同義よ」

「……バカ野郎が」

「ハチマン……」

「さつき、軍に吸われたチームの元リーダーで、現軍のリーダーであるシンカーさんがいらっしやっつて、この作戦を立てたキバオウはしばらく自粛、軍は旧MTDのようにプレイヤー間の相互補助やサポート、非攻略プレイヤーのサポートに徹するって」

「まあ、妥当な所だな。これでキバオウが出てこようものなら、あいつを一人ボス部屋に置き去りにする自信がある」

「ハチマン君……すまない」

「お前は関係ないだろ、ヒースクリフ。で、どうするんだ？」

「二日後、会議を開きます。今回から聖龍連合主体で、ソロやその他プレイヤーを合わせて行くかたちになるわ。」

……：これドリンドさん。今回のボスは最大規模を誇る軍を壊滅にやったくらい強力

なボスです。メインアタッカーはここにいる四人が主となります、いいですね」

「……それに異論はない。そこまで自己主張する気はないし、和を乱すつもりもない」

「……話は以上か？」

話が終わったタイミングで、一番最初に立ち上がる。

会議の日取りも決まったならもう話すこともないだろう。

「先に出るぞ……会議にはちゃんと向かうから。じゃあな」

次は、今までにないレベルの強さのボスで、そこでも俺はメインアタッカー。

なら、今の装備じゃ不安がある。あと少し、装備できるようにするしかない。雷切丸を。

「……っは」

旋車の衝撃で三体のモンスターを一気に倒す。……くそ、効率悪いな。

あと二日で雷切丸を装備可能にするにはここでひたすら狩るしかねえ。が、ソロだと沸きが少ないしパーティでの経験値アツプもないから大きな経験値が入らない。

「つと、今回の沸きは早いな。助かる」

……あれ、なんか沸きの数多くね？

「ハチマンくん、こんな夜更けに一人で何をやってるの？」

「アスナ？」

ピコン。とアスナからパーティへの誘いが入る。え、なんで？　なんでここにいんのこいつ。

「レストラン出てからずっとここで狩りしてたでしょ。こんな夜更けまで、ずっと」
「なんで知ってるんだよ」

「フレンドの位置、確認できるじゃない」

まさかこいつ、ずっと俺の位置確認してたつてののか？
え、なにそれ八幡ドン引きなんだけど……

「……お前、将来ストーリーカーになるかもな」

「どうしてそうなるのよ！ いいからほら、パーティ入って」

「いや、帰って寝ろよ」

「私もレベル上げたいの。……次のボス、絶対に油断できないから」

「……ある程度のタイミングで終わりにするからな。人がいたら気が散って疲れる」

「……はあ、ほんつと、捻くれてるよね、ハチマンくんって」

「うっせ。……まあ、助かる」

「え？」

「いいからやるぞ。雷切丸を装備するまでにあと4レベル上げなきゃなんだよ」

……くっせ、らしくないこと言っちゃまった。

とにかくやるぞ。終わらせる。

「……はあ、はあ……終わった……」

「……もう、日が昇ってるわよ……」

あれから狩り場を迷宮に変えて、沸いた瞬間即殺して全速力で移動。その先で沸いたら即殺を繰り返すいわゆるマルグル慣行して、俺達はなんとか半日くらいでレベルを4上げることに成功した。これ、パーティじゃなきゃ絶対無理だわ……

「……助かった、アスナ」

「私もレベル上がったから、お互い様よ。お疲れ様、会議には遅れないでね？」

「……ああ、じゃあな」

現状、俺が装備できる最強の装備である雷切丸。やっと届いた……

あとは、あれか。くっそ、寝る前に行っておかないとか。ほんと俺働きすぎじゃね？
リアルに戻ったらやっぱり専業主夫になろう、うん。

Episode 2, part 8

「……ハハね」

会議も済ませ、万全な状態で来た俺達はボス部屋の前で一泊おいた。

……あの後帰らずにアルゴに攻略組の全プレイヤーにポジションの買い込みをやらせろって伝えたから、即死しない限り、大丈夫のはずだ。

「……ヒースクリフ、まじで任せるぞ。俺、基本的に直撃したら死ぬからな」

「心得た。こちらも影纏いの力、しかと見せてもらおうとしよう」

「だからそれやめろって」

メインアタッカーはいつもと同じく。全プレイヤー中最大火力であろうキリト、カリスマ性、技量ともにトップクラスのアスナ、盾役として全プレイヤー最高峰のヒースク

リフ、そして全プレイヤー最速であろう俺。四人パーティーにしない理由は何かがあったときのフォロワーだ。

すぐに動けないと意味がない。

「……みんな、生きて戻りましょう」

ボス部屋が開く。……いた。

三つ首の犬がいる。ケルベロスだとき。なるほど冥福の番犬か。

由比ヶ浜のこの犬くらい可愛らしければいいんだが。

「作戦、開始！」

アスナの声に合わせて一足飛びで駆け出していく。

これが俺が影纏いと呼ばれる所以らしい。隠匿スキルを使いつつ、敏捷極振りの全力疾走。攻略組レベルすら影が動いてるようにしか見えなから、影纏い。

ほんと、年齢がもう数年若かったら大喜びだったろうな。

「……っ！」

バカな思考は一瞬で止められる。

俺は慌てて方向転換をして、ヒースクリフの隣まで一気に戻った。

「どうかしたかね」

「あの犬、俺の姿を追っかけてるぞ」

あのまま行ったら危なかった。あれ、やばい。

臭いか何かでわかるのか？ とにかく、一人で攻めるのはまずい。

「君の姿を見ることができるといふことか。確かに、厄介ではあるな」

「前衛交代した方がいいかもな」

「なら、私が行こう。どうすればいい？」

「ヘイトをとにかく稼げ。したら三人で総攻撃をかける」

「心得た」

俺の代わりに飛び出していくヒースクリフは、ボスの爪を器用に盾で捌き、剣で一太刀入れる。

なるほど、上手い。立派なタンクだな、ありや。

「キリト、アスナ」

「ああ」

「ええ」

ヒースクリフへと攻撃するためにボスが腕を振り上げた瞬間、俺は一息で接敵した。そのまま三連撃のソードスキル”緋扇”を叩き込み、後続に繋ぐ。

「リニアー！」

アスナが閃光たる所以の、光速の突きが放たれる。

切っ先から先が消えて、刺突が何回も出される。最後にキリトのバーチカル・アークを受けて、ケルベロスはあっさりとHPを0にして倒れ伏した。

「え？」

「終わったらポリゴンになって消えるはずだ。油断するなよ、みんな」

キリトの声が聞こえ終わるよりも早く、獣の雄叫びが聞こえた。途端に地面から手が生えてきて、俺達を雁字搦めにした。

「きやつ……」

「これは……」

ボスは立ち上がり、ギラついた目をこちらへと向ける。

そして、今になってやっと沸く取り巻きの雑魚……ってゾンビかよ。雪ノ下がいたら俺だとか何だとか言われそうだな。

「……って、そんな場合じゃねえ。これどうやって……」

悲鳴ばつか聞こえる。くそ、急がねえと俺達も壊滅しちまう——

「ハチマンくん、身体を動かさせ！」

「ヒースクリフ？」

見れば、ヒースクリフは既に動き出していた。

身体を動かせ……ああ、つまり——

「お前ら！ レバガチャしろ！」

さすがゲーマー達。意味がわかったらしくすぐに拘束を解除していた。

「ちよつと、ハチマンくん、何よそれ！」

「……あー、ちよつと待ってろ」

アスナに近づくと、ほどく。というアイコンが現れる。
やっぱりな。他人でもほどけるのか。

「よつと」

「きゃあつー！」

ずん。と衝撃が走ってアスナが俺に寄りかかってきた。

「あ……い、い、いめん」

「いいから離れろ。頼むから離れてくれ」

「な……つて顔真っ赤！」

「うるせえ耐性ないんだよ早くしろ。勘違いしちゃうだろ」

慌てて離れる。あーくそ、ボス戦なんだから集中させろちくしょう。なんだよキリトその顔は。

「……くっそ、行くぞヒースクリフ」

「いいのかね？」

「お前まで茶化してんじゃねえ。真面目にやるぞ」

ヒースクリフが俺の前に出て盾を構える。その上から斬りかかって、鬱憤を晴らすか

のように斬撃を叩き込んだ。

怒濤の勢いで叩き込んだら、わりとびっくりな早さでボスは倒れた。

「……………あ」

「バカ！ ハチマン！」

「……………わり」

てへぺろ。なんて言ったら殺されるな。とか思ってたらボスが吠えた。

案の定拘束されて、ゾンビが出てくる。って、前の全滅させなくても沸くのかよ。

「……………なるほど、こりや面倒だ」

死んでも甦る、取り巻きの沸きに制限がない。初見殺しの塊じゃねえか。

「あのボス、こっちには近づいて来ないのな」

「接近した時に鎖が見えた。おそらく、前進はできないだろう」

「なるほどな、なら、ひとまず雑魚処理するか」

範囲攻撃で一気にゾンビを斬り払う。面倒なやつらだな、つたく。

落ち着いてやればひとまず死にはしない。ゆつくりじゃないと攻略できないが。

「軍の連中はどうせ一気に突撃して、おそらく中級者があいつに狩られ、残りもこのルー
プでやられてつたんだろうな」

動けなくとも俺の動きを目で追えるようなやつだ。

気を付けるに越したことはない。

「……キリト、お前他のゲームでこういう敵とかやったことない？」

「ない。ハチマンは？」

「ない。一応ヒースクリフ、アンタは？」

「残念ながら、ない。ふむ、手詰まりかね」

「なんとかできるなら突っ込んでいいぜ？」

「やめておこう、私とて死にたくはないよ。ハチマン君」

ボスの吐くブレスを器用に全員躲しながら会話を続ける。
他のメンバーも悩んでいるみたいだ。

「いつか直撃しかねないわ、なんとかしないと……」

「わかってる……なあ」

「どうしたんだ、ハチマン」

「俺の知ってるゲームに一ついたわ、あんな感じの」

「え？」

「厳密に言うとは違うけどな。そいつは序盤のボスでな、試験中の主人公達を追っかけてくるんだ。クモみたいな機械でよ、30分しか時間ねえのにひたすら追っかけてくる」

「どうやって切り抜けるんだ？」

「エンカウントしちまったら、ある程度HPを減らせば勝手にダウンして逃げれる。それを繰り返して集合場所に着けばイベント発生。そのイベントで教官が倒してくれる」

「ずいぶん懐かしいゲームを出してきたな、と自分でも思う。」

「まあ、ここまで面倒なボスじゃなかったけどな、あいつ。あのゲーム主人公超強いし。なんでSAOにはガンブレードないんだらうな。ガンが入ってるからか？」

「あとは、そいつはダウンするとHPを修復させてくんだが、その最中にもダメージを与えて本来のHPまで減らすと全回復する。で、それを繰り返すとやがて修復機能を失って自力でも倒せるんだが……どうだろうな、リスクが高すぎるか」

「……いや、着眼点は悪くない。試す価値はあるぞ」

「このまま何もしなくたって、いつかこちらに大きな被害が出る。なら、やろう、ハチマン」

「ハチマンくん、私は、私達だって覚悟は決まってるんだよ?」

「……おーけーおーけー。ならお前ら、あいつがダウンしたら死ぬ気で叩けよ。いいな、行くぞ」

一瞬、一層の感覚を思い出した。

全員が同じ敵へ向かう。そうすれば、俺が紛れてようと問題ない。

一つ、前と違うとすれば俺も勘違いはしない。こいつらは事が終わればまた嫉妬や敵視もする。だから、利害の一致で、そう心に決めて、俺は雷切丸を構えてボスへと向かって行ったのだった。

Episode 2, part 9

「バーチカル・アーク！」

キリトの二連撃が決まり、ボスは地面に伏した。全員で死体殴りをすると決めてからかれこれ三回、計五回のボスのダウンである。

「みんな！ 今だ！」

倒れた瞬間、俺達全員で攻撃を仕掛ける。

総攻撃ってやつだ。問答無用でラッシュをかける。

「ハチマン君、君のやっていたゲームでは何回倒せば終わったんだ？」

「覚えてねえよ。それに、俺はその方法ではクリアしてない。攻略本を読んだだけだ」

俺は基本的に教官にお願いしていた。だって毎回戦闘とか面倒だし。

「ま、とにかく殴ってれば変化が出るだろ。出なかつたら考えればいいし、最悪部屋から出てやり直せばいい」

しばらく戦っていて、変に浮き足だっていた気持ちさが落ち着いてきた。そうだ、とりあえずやれることやっておけばいい。

「ほら、起きるぞ。レバガチャ準備しておけよ、ヒースクリフ」

「無論だ。君も、油断はしないようにな」

「当たり前だ」

そう言って、俺は雁字搦めにしに来る手を振り払うように身体を左右へ動かしたのだった。

—side アスナ—

「リニアー！」

取り巻きのゾンビ（つてハチマンくんが言つてた）に一突き。それだけで一体を倒す。私の代名詞らしいこの技は、確かにそれだけ使い込んだとも言える技ではあったりする。シンプルで、とても使いやすい、私を支えてくれる技。

「にしても、アスナはゾンビとか大丈夫なのか？」

「まあ、実在してるわけじゃないから」

「お前、なんかああいうの平気そうだな」

体勢を立て直しながらキリトくんに見つめられ、ハチマンくんがニヤリと笑う。

「いや、別に平気ってわけでもないけど……」

「ま、なんでもいい。ほら、ダウン取り行くぞ」

そこで会話を打ち切って、ハチマンくんの姿がブレる。そして消えて、一筋の影がボスに一太刀浴びせていた。

私も敏捷には振っているけど、あんな極端な振り方はしてない。そもそも、彼は直撃したら何を食らっても即死してしまう。

怖くないのかな？

「……そんなわけない、か」

今でも私は忘れられない。一層攻略の時、彼は夜中にあの宿を抜け出した。寝れなかった私は物音に気づいて、何をするのか気になって彼の後を追った。

ハチマンくんは、セーフティエリアの湖の前で、震えて座っていた。彼だって、ボスは怖いんだ。そう思った。

したらその矢先にあのボス戦後のやり取り。きっとハチマンくんは、ああやって自分の感情を隠して殺して、上手く取り繕うんだ。絶対にクリアしたい目的があって、その

ために恐怖を殺して、自分を隠して。

「緋扇」

刀のソードスキルが決まる。

マフラーを鼻まで上げて口元を隠すハチマンくんは、その表情が見えない。

リアルではわからないけど、このSAOでは感情は過剰に表現されるから、彼がどれだけ苦しそうにしているか、心配をしているか、すぐにわかる。

キリトくんのことだってそう、多分、他の人のことかも。

……私も、この世界には負けたくない。最初、親の敷いたレールから外れることへの恐怖も凄くて、いつそ死んでしまってもいいかと思った。死んでしまいかとも思った。けど、今は違う。このゲームに負けない。こんな世界、存在を認めない。私は現実へ戻って、私の道を歩く。レールから外れた方がいい。それでも、進めないのだけは嫌だから。だから、私も利害を一致させる。キリトくんは強いけど、やっぱりどこかゲームを楽しんでる。けど、ハチマンくんは容赦なく、このゲームをクリアするつもりだ。その為ならなんだって、自分すら利用するつもりなんだと思う。

それほどまでにこのゲームを、この世界を嫌悪してるんだって知れて、ちよつと嬉し

かった。

……私にも、理解者がいるんだって、思えた。

「アスナ、スイッチだ」

「任せて、ハチマンくん！」

気だるそうで、少し籠った感じで、陰気な雰囲気のある声、でも、変わらないトーン
のその声は、不思議と私を落ち着かせた。

「やあああああつ！」

少しでもあの”影”を追えるように、私は全力で走ってリニアを突きつけたのだっ
た。

「ダウンしたぞ、行けええつ！」

エギルさんの低い声が響く。

私とハチマンくんを除くほぼ全員が倒れたボスへ、追撃を放っていた。

「ハチマンくんは行かないの？」

「一回休み。毎回行くのしんどいんだよ」

どこまでもマイペースな物言いに笑ってしまった。

そんなことを言いながらも、彼の濁った（通称腐った）目はボスを見続けて、仮想現実だからこそなのかもしれない、冷たい感覚をボスへ放ち続けている。

多分、これが殺氣つてやつなんだと思う。彼は、ボスから目を離さない。

「――！」

やがて、一際大きな音を上げて、ボスは倒れ伏した。ポリゴンの塊になって、徐々に風になって消えて行こうとしている。

「……やったか？」

「やったやった！ クリアしたんだよ俺ら！」

攻略にコンビで良く来ている二人がハイタッチを交わす。

……今回は、さすがに長い戦いだっとな……

「おい、まだ油断はするなよ」

「何いつてるんだよ。どう考えても終わりじゃ——」

パリンと音が鳴って、ハイタッチしていた二人の身体が中に舞った。

「え？」

「なっ」

「……おいおい」

ポリゴンとなって、二人が消える。つまり、彼らは……

「だから、なんで油断なんかしたんだよ

あのバカ共は！」

ハチマンくんにしては珍しい怒声が聞こえる。

私とは言えば、目の前で起きた現実がまだ信じられなかった。

「これがラストってわけか……おい、全員くれぐれも当たらんじゃねえぞ、死人の面倒は見れないんだからな、このゲームは」

砕けたポリゴンから現れたのは三ツ又の槍を持った、頭が犬の人間。あれが、ボスの本来の姿、かな？

「アスナ。おいアスナ」

「な、なによ、ハチマンくん」

「……怖いなら下がってろ」

「……バカを言わないでよ。そんなわけないでしょ」

「ならいい」

二人のプレイヤーをあっさり倒してしまったボスへ、ハチマンくんは迷わず駆け出した。

「キリト、ヒースクリフ、連続でスイッチ回すぞ。」

「アスナ、やるなら早く来いよ」

ボスへ青い影がまとわりつく。追撃するようにキリトくんが、ヒースクリフさんが迫って行く。

「我々も続くぞ！ 気を引き締めろ！」

リンドさんの声に続く他のプレイヤー達。

対するボスの動きは、暴力の塊だった。一撃で攻略組プレイヤーの体力を全て減らす攻撃力。人より遥かに大きい身体で槍を振り回すと、それは私達よりもリーチが遥かに長い。二人やられたこともあつて全員が慎重になつてゐるせいかな、私達は攻めあぐねていた。

「…………ふむ、私が前へ出よう。ハチマンくん、お付き合い願えるか？」

「ヒースクリフ？」

「私が攻撃を凌ぐ。そして君が削る。残りは他のプレイヤーに任せよう」

「…………仕方ないな。今回限りだ」

肩に雷切丸を担いで、ハチマンくんはため息を吐いた。

……なんであの二人、妙に息合ってるのかしら。

「二人とも、できるのか？」

「無理は言わないつもりだ。後続、よろしく頼んだよ、キリト君、アスナ君」

「つつーわけだ。ヒースクリフ、後から追い抜くから先頼む」

「心得た」

ヒースクリフさんが駆け出して、ハチマンくんがそれに続く。

ヘイトを真っ先にヒースクリフさんが受けて、その隙をハチマンくんが縦横無尽に斬りつける。定期的にヘイトはハチマンくんに向かうのか、ヒースクリフさんからターゲットが外れて、したらヒースクリフさんの攻撃が入る。

全員で慎重に攻撃していたさつきと違って、頑として動かず全て受けるヒースクリフさんに、一度足りとも止まらずに全力で攻撃するハチマンくん。二人とも、怖いくらい

ボスに接敵してるのに、攻撃の手を緩めない。

「スイッチ！」

どれくらい攻撃しただろう。ヒースクリフさんが横へ移動して、ハチマンくんがそこから消えた。

ボスの残り体力は……二割！

「はああああっ！」

だから、私は駆け出した。

彼に追い付ける為に。私も、彼に並ぶ為に。誰よりも速いのが彼なら、それに続くのは私でいようと思う。

同じ、このゲームを許せない者としても。

「アスナッ！」

無我夢中で、何回も斬りつけた。今も、空いた隙間を縫うように、全身全霊を込めて走り抜ける。

そうして放つたりニアは、ようやく、ボスの身体を貫通した。

「……勝った、の？」

「……らしい」

大きく脱力しながらため息を吐くキリトくん。

そして宙にはボス討伐を意味する文字が浮かび上がっていた。

歓声が凄いい勢いで沸いて、みんな大喜びで騒ぎ合う。

丸一日経っていたみたい。ここまで長いボス攻略は初めてだった。

「……ふむ、犠牲者は二人か」

「軍を壊滅させたボス相手にそれだけで済んで御の字だろうよ。つーかなんだよこれ、難易度が上がりすぎだろ。こっからこれ基準とかだったらクソゲーだぞこれ」

「……はは、そうでないことを祈ろうか」

ハチマンくんはヒースクリフさんの隣で座って天井を見ていた。珍しくヒースクリフさんも笑っていて、少し和から外れて話してる。

二人は何を話してるんだろう。

「……なんだかんだ、あいつもすげーよな」

「ああ、絶対最初に行くもんな。ハチマンのやつ、言うこときついわムカつくわだけど、本当に強いもんな。ヒースクリフもだけど、どうすりゃあんなの相手に二人で張り付こうだなんて思うんだよ、あいつら」

「今までの三強にヒースクリフを入れて四強か。くー、一度でいいからそういう呼ばれかたしてみてー」

「とりあえず早いとこ次の階層でレベル上げだな」

……凄く不穏な言葉も聞こえたけど、ハチマンくんも攻略組のみんなには認められてる。誰よりも速く攻撃して、辛辣な物言いだけどクリアの為に的確に発言もして。彼がどう思ってるかはわからないけど、いい意味で攻略組の刺激になってる。

知らないのは本人ばかり。もう少し私にも余裕があつたら彼をこの和に引き込もうとしたかもしれない。けど、今はそんなのいらない。私も彼も同じ、ゲームクリアに向けて進むだけ。

「ハチマンくん、お疲れ様。ヒースクリフさんも」

「アスナ君か、お疲れ様。ラストアタックおめでとう」

「……本当に疲れた。早く帰って寝てえ……」

二人の前に出て労いの言葉をかける。ハチマンくんはそれ返しもせず大きくため息。もし彼に女の子として接していたらそんな態度に腹の一つも立てていたけど、私も攻略組の一人。苦笑を浮かべて心から脱力しているらしいハチマンくんを見たのだった。

E
p
i
s
o
d
e
2
,
F
i
n
.

E x t r a

「はい、では現在攻略組の四強の皆さんにインタビューです」

35層のとある宿屋の一室で、二人の女性と向かい合うハチマン、キリト、アスナ、ヒースクリフ。女性二人はアインクラッド新聞なる物を発行するギルドの人間で、アインクラッド全プレイヤーの注目の話題である攻略組の、その中でも四強と呼ばれるトップクラスのプレイヤーにインタビューを行ったのだった。

愛想のいい笑みを浮かべるアスナと、普段と変わらない佇まいのヒースクリフ。そして緊張した面持ちのキリトと、とんでもなく引きつった顔のハチマン。四者四様の表情に、記者は妙な気分になった。

これが、攻略組のトッププレイヤーなのかと。

「では、最近の話題からですね……えと、この中では誰が一番強いのか。という話題ですがどうでしょう。」

巷では25層の強ボスを二人で長い間相手にしたハチマンさんとヒースクリフさん

との話もありますが……」

「そりゃ勘違いだ。あのときはたまたま、あの中で被弾しづらいのが俺とヒースクリフだったってだけだ」

謙遜など感じさせぬくらいはつきりと否定するハチマンに、記者は内心で驚いた。このハチマンは辛辣な物言いも多く、反感を覚えるようなことも平気で言うとのことだ。てつきり実力に物を言わせているのかと思っていたのだ。

「ま、全員同じくらいだろ。キリトは25層くらいの中から自分のギルドに合わせて動いてたから少し遅れ気味だったが、今ギルドそのものが攻略組に入ったから元のペースでレベル上げてるしな」

「……でも、あれよね」

帰りたい意思をひしひしと見せながら、簡潔に話を纏めるハチマン。嫌そうな表情が印象的で、彼が人との関わりをあまり好まないという話は本当だとメモに付け足した。そして、そんな彼にアスナはどこかイタズラっぽく笑う。

「もし決闘するなら、ハチマンくんだけではやりたくない」

「私も同意しよう」

「それは俺も」

「…………お前らな…………」

示し合わせたようににやりと笑うキリトに、楽しそうに笑うヒースクリフ。

四強の仲は、思ったよりも良いようだ。と更にメモに追加する。

「そもそも俺は、晴耕雨読してたい孔明タイプなの。何が悲しくてこんな特攻隊長みたいなことしてるのか自分でもわかんねえけど。決闘なんか挑まれた時点で敗北になつてやるよ」

「ふむ、それでは困るな。君への最終手段が上手く使えなくなりそうだ」

「……あ？ どういうことだよヒースクリフ」

「いや、来るべき時が来たら、私はギルドを作ろうと思っ
ていてね。ハイレベルの攻略組を集めたギルドだ。今の攻略組のソロプレイヤー達を誘おうと思っ
ているのだよ。君や、アスナ君もね」

おお！ と記者が身を乗り出すが、ヒースクリフはやんわりと笑ってこれはオフレ
コで。と付け足した。

記事にできないのかと肩を落とすも、自分達が貴重な場面にいることは間違いない、
と二人は彼らの話に耳を傾けた。

「私もですか？」

「……そりや、無理な相談だな。俺が完全なチームプレイだなんてできるかよ」

「だからこそ、決闘で勝ったら。と思ったのだが……それすらも願えなさそうだな」

「そんなもん、絶対にバツクレるからな」

うわあ。と記者二人はハチマンの言葉に露骨に引いていた。

ギルドに誘われ、決闘してまでしても欲しいといわれるほどに評価されているにも関わらず、完全拒否体勢のハチマンは仏頂面で天井を見ていた。

「本当はキリト君も思っていたのだが、既にギルドにいる以上は諦めよう。

ハチマン君とアスナ君には、その時が来たらまた声をかけさせてもらうよ」

「返事は変わらないだろうがな」

「私は……その、何とも言えません」

それでいい。とヒースクリフは小さく笑うのみだった。

「では、最後に、攻略組になっている以上クリアを目指すのは当然として、リアルへ戻っ

「たらどうしたいですか？」

「……私は、まだそこまで考えてません。けど、このゲームからクリアして、解放されたいって思う人がいる。その人と、その人達と一緒にこのゲームをクリアしたい。悪夢のようなこんなゲームから、解放されたい」

「私も、クリアすることが目的だからそれしか考えてはいないな。アスナ君ほどではないが」

アスナはチラとハチマンを盗み見て、ヒースクリフは瞳を閉じた。

二人の心の内はわからぬままである。

「俺は……家族に会いたいな。妹とも疎遠だったから、また、ちゃんと話したい」

「そうだな、妹とは仲良くしておけ、キリト」

珍しく同意してうんうん頷くハチマン。リアルでのシスコンぶりを知らない他の三

人はハチマンの思わぬ言葉に目を丸くした。

「俺も妹に謝らないとな、心配かけてるだろうし。あとはあれだ、あらゆるものを使ってこのゲームがいかにクソゲーだったか書く。で、茅場に届かせる。」

自慢げにインタビュールなんか受けて、それでこんなクソゲー作りやがって。ゲームのなんたるかをわかってなさすぎだからな。もうぼろつくそにこき下ろしてやる」

今度はアスナとキリトも記者と一緒にうわあ。と引いていた。

復讐の度合いがリアルで、かつ小さい。ある意味それはとても”八幡”らしいものでもあるが。

「……はは、なるほど、それはいいかもしれないな。君なら開発者に言葉を届かせそう
だ」

「全国にばら蒔いてやるからな。こんなガキに自慢のゲームをバカにされて、精々イライラしとけてことだ」

ドヤ顔で語るハチマンに引き気味の一行。何故かヒースクリフだけがとても楽しそうに笑っていた。

「あとは……いや、これはいいか。終わりだ」

一瞬、何かに想いを馳せるように何も無い所を見つめてぽそりと言って、強引に話を切り上げる。

聞かれても答えないだろう。彼は誰とも視線を合わせなかった。

「あ……えー、では、時間が時間ですのでありがとうございます」

私達は戦えない非攻略プレイヤーですが、少しでも攻略組が快適に進めるよう、サポートしていきたいと思います。頑張ってくださいね！」

その言葉を最後にして、とある一日のインタビューは幕を閉じたのだった。

Episode 3, part 1

「ハッピーニューイヤー、か」

SAOに囚われてから約一年。今頃リアルでは新年を迎えた楽しい楽しい一日の始まりだろう。

結局、一年でまだ攻略階層は54層。けど、これならもう一年でクリアも夢じゃない……か？

「この日に関しては、あまりリアルもゲームも関係ないか」

25層のボス撃破以降、49層までのボスは急に弱くなった。いや、本来の強さになっただけ言うのか。

でも時おり意味のわからない勝負を追加で仕掛けてくるボスもいて、たまにとても面倒な戦闘を強いられて苛立つこともあった。

あの決闘を仕掛けてきた武者も含めて、そういうボスはユニークボスとまとめられる

ことになってる。

だいたいなんだよ、クイズ仕掛けてくるボスとかおかしいだろ。無駄に遊び心いれんなよ。

と、そんなこんなでもこうして俺は変わらず生きてる。そういや30層からは月夜の黒猫団も攻略ギルドの仲間入りで、キリトは自分のペースでのレベル上げを始めて、すぐに元の状態に戻った。

さすがと言うか、相変わらずの超火力に驚かされる。

ついでに驚かされるで思い出したが、月夜の黒猫団のサチとかいう雪ノ下みたいな声の女、あいつがヒースクリフほどではないにせよ、攻略組で前に出れるレベルの盾役になってて驚いた。俺のイメージだと、全然ダメそうだったんだが、今じゃわりと重要なポジションだ。時おり大きな声でハチマン！ て呼ばれるとびくつてなるくらいには雪ノ下に声が似てるので、できれば俺のことは大声で呼ばないで貰いたい。

「……………」

斬撃は一度きり。太刀筋が自分でもよくわからない速さでモンスターを両断する。

俺は今、下位層の迷宮に来ていた。

——50層のボスは、これまでのどのボスよりも強かった。今や壊滅した軍の規模を引いても軍がいた頃よりも武装、人数、実力的に遥かに優れた攻略組ですら、五人の死者を出した。途中、ユニークスキルと呼ばれるプレイヤー固有のスキルを会得していたらしいヒースクリフがそのスキル“神聖剣”を発動させ鉄壁の防御でヘイトを集めてくれたおかげでどうにか倒せたが、かなりきつかった。続く51層のボスは大したこともなく。つまり、25層ごとに強いボスが現れるシステムらしい。クォーターポイント、とそれは名付けられた。

ユニークスキルという固有のスキルを得たヒースクリフは、名実共に現在最強プレイヤーと言っている。

俺やキリト、アスナを含めて四強なんて呼ばれているが、ヒースクリフが一番強いだろう。ユニークスキルはそれほどまでに強い。

「……だからこそ問題なんだよなあ」

俺は雷切丸ではなく、今手に持っている刀を鞘に納めた。

別に納刀したわけじゃない。むしろ、攻撃の構えである。目の前にいるのはリザード型のモンスター。レベル的に相手にならないのは当たり前である。

「抜刀術」のソードスキル。木枯」

鞘に納まった状態で、かつその鞘の内側が光で発光して、俺は一気に刀を抜いた。

敏捷性により攻撃速度、威力がどちらも上がるこの「抜刀術」の初期ソードスキルは、抜いた瞬間にモンスターを両断するほどの速さを誇る。この「抜刀術」は、刀から派生した紛れもないユニークスキルだった。アルゴに聞いたところ、一切の情報が無いそう。慌てて口止めして、現在新年にも関わらず熟練度上げの最中である。

「キリトはギルドで新年会、アスナは他の女プレイヤーとなんかやってて、ヒースクリフはギルド立ち上げに大忙し、か」

どいつもこいつもリア充ご苦労である。俺はこれが楽でいい。心地いい。

あれから、俺達四強（あまり言いたくないが）にも変化があった。

まずはヒースクリフ。あいつは55層の解放と共にギルドを作ると宣言した。聞いたところによるとかなりの応募が来てるようで、そこからあいつのお眼鏡に叶う奴が入団となるそう。

次いでアスナ。あいつは攻略に向ける意識がより顕著になった。たまに俺以上にシビアに、俺以上に冷静かつ冷徹な作戦を平気で立てる。ヒースクリフのギルドにも入るようで、副団長をやるらしい。最近のアスナはどこか鬼気迫るところもあつてか、ソロプレイヤー代表だったはずが、やや敬遠されがちである。ギルド入りをしたら果たしてどうなるやら。どうでもいいが、それに比例して俺に話しかけてくるソロプレイヤーが増えて困る。話なんてないってのに。

「あー、ぶっ壊れたか」

何本目かの刀がポリゴンとなって消える。雷切丸は刀身や反りが合わないらしく適応外とのことで適当なコモンの刀を使つてはいるんだが、すぐ壊れる。

俺とキリトは相変わらずだった。35層でお互いバカみたいにレベル上げて、季節外れのクリスマスとかいう謎のイベントに参加して二人して死にそうになりながらこのボスである背教者ニコラスとかいうボスを倒して、なおかつそのレアドロを欲しがる聖龍連合から逃げて、とかやつてた。俺はレベル上げに行きたかったただだからその時のレアドロはキリトに渡してある。

死者を10秒以内なら助けられるらしい。ぼっちの俺よりギルドにいるあいつのが

持ってて損しないだろう。

あのときの無茶苦茶なレベル上げのせいかな、刀のスキルは全て会得してしまったので、ひとまず抜刀術のスキル上げに来ているのだが……見つかつたら面倒そうだなあ。誰につて？ 誰にでもだよ。

「……帰るか」

ストックも無くなつたし。今日はもう帰ろう。

最近やっと手に入るようになった結晶を手にとって、俺は宿のある54層へ飛んだのだった。

Episode 3, part 2

「っは」

24層の雑魚モンスター相手に今日も今日とて熟練度上げ。それなりにこのスキルの方向性とか、長所と短所を理解してきた。

まず、速い。剣速に関しては斬るという行動では最速クラスだろう。突くになると細剣という特化には敵わないだろうが、こと斬ることに关しては間違いなく最速だ。あとは、鞘から抜き放つとスキルが刀へ戻るので刀のソードスキルへのコンバートがとつもなく速い。まあ、抜刀術なんて言うくらいだから、抜いてしまえばただの刀なんだろう。理屈には合ってる。抜刀術はあくまで納刀状態でのみ発動するユニークスキルなわけだ。

「それなりに慣れてきたな……」

次は短所。まあ、わかりやすく隙が大きい。当たればほとんどお陀仏な故に、思いき

りすかせば絶大な隙を晒すことになる。一応、連撃技もあったりはするがどこぞの流派のように全部が全部隙を生じぬ二段構えってわけでもない。

ついでに言えば、抜刀術の際に左足で更に踏み込んでみたけど特に速くもならないし威力も上がらなかった。すかっても真空空間できて相手を引き寄せるとかなんなんだろうなああの流派の奥義は。

「どつちかって言えば瞬天殺の方ができてる気がするな。縮地してるわけじゃねえが」

体術スキル持っていないから壁走りとかできないしな。取っても良かったが今さら面倒だ。

「……つと、誰か来るな」

……

俺の索敵スキルにプレイヤーが引つ掛かった。迷わずこつちへ歩いてくるそいつは

「お前か、アスナ」

「こんにちは、ハチマンくん」

白と赤を基調とした服やマント……ヒースクリフの作り上げたギルド、血盟騎士団のユニフォームを着込んだアスナが立っていた。

現在56階層。55階層にホームを買ったヒースクリフは宣言通りギルドを作った。50人ぐらいの中規模ギルドだが、その全員が攻略組のハイレベルプレイヤーで出来上がってる、攻略に関しては最強のギルドだ。

リンドがそれを意識してか56層に改めて聖龍連合のホームを立てたのにも思わず笑ったが。

とにかく、これで四強の中で無所属は俺だけになっちまった。いや、いいんだけどさ。ギルドとか、面倒だし。

攻略組を支えてるギルドは血盟騎士団と聖龍連合。そして後続や新規の攻略プレイヤー達の為にと動いてもいる風林火山や月夜の黒猫団がある。クライン達も充分に攻略組のハイレベルプレイヤーだから、そんな奴らの支援を受けれるのは新規の攻略プレイヤー達にはありがたいだろう。月夜の黒猫団も、あのキリトを有しており、団員も少し増やしたからか14人ぐらいのギルドになっていた。まったくもって、みんな攻略に

一生懸命で嬉しい限りである。

「……ねえ、聞いてる？」

「いや、まったく」

アスナが何か話していたらしい。少しムツとした表情になったが、俺が聞く意思を見せたのに溜飲を下げたのかすぐに口を開いた。

「迷宮探索もせずに、どうしてこんなところにいるのかって聞いたのよ」

「あー、それな」

この攻略の鬼は俺が迷宮を回ってないことに小言を言いに来たらしい。

副団長つてのは鬼になりやすいのかね。そのうち敵前逃亡は土道不覚悟とか言い出しかねん。

「しかも雷切丸じゃなくてコモン武器の刀なんか持って、どうしちやったの?」

「……クエスト中だ。条件付きのな、刀の装備レベルも決まってるんだ。レベル的にももう足りてるし、迷宮探索もそれはそれでやってるからあまり関わってくれなくていいぞ」

抜刀術のことはまだ言えない。いくらこいつとは言え、今ではギルド所属で、こいつの上司は同じユニークスキル持ちのヒースクリフだ。
面倒な絡みになりそうなのはわかりきっている。

「……なら、いいけど」

「……なあ、アスナ」

まだ不満げなアスナに、俺は頬を搔いてそつちを見据えた。
目とか合わせたら死にそうだからそこはそらしたままで。

「ゲームクリアしたいお前の気持ちはわかるし、心からそれには賛同してやる。が、あまり先走り過ぎてても誰もついて来ないぞ。何をそんなに焦ってる」

「っ、キミがそれを言うの?」

「生憎、俺はもう開き直ってる。絶対に向こうに帰る気だし、その手段についても、現実的なモラルに基づいてさえいればなんだってする。けど、それとこれとは話が違いうだろ。」

「……お前、肩肘張りすぎてそのうち疲れきるぞ。寄り道したっていいじゃねえか。このゲーム、間違いないくらいのクソゲーだが、案外褒められる所もあるもんだ。今日だって晴れてるし、モンスターさえいなければ昼寝日よりじゃねえか」

「……そう」

アスナの表情は、とてもわかりやすいものだった。

絶望してからの、諦め。……なんだ、こいつ俺に何かしらの希望でも抱いていて、それでいて多分、俺があいつの思う俺ではなかったんだろう。

勝手に期待して、勝手に失望すんな。と言いたいところではあるが、俺もかつて雪ノ下と同じことを思ったことがあるからわからなくもない。曲がりなりにも四強とか呼ばれちまつてるしな、お互い。

もつとも、こいつは俺と違ってそんな自分を嫌悪してるわけじゃなさそうだが。

「結局、あなたもそうなんだ。クリアしたいなんて口だけで——」

「おい、あまり言うとお前をフレンドから消すぞ」

誰が口だけだ誰が。おそらく年下だろうアスナは……これが若さつてやつなんだろうか、真っ直ぐなのはいいが、それを全てにされても困る。

あれ、俺にそんな若いときつてあつたかな？ ……ああ、黒歴史があつたわ、死にたい……

「いいか、俺は攻略には付き合う。ちゃんと役に立ってやるし、指示にも従つてやる。四強なんて不本意な位置にもいるし、それなりに仕事はしてやる。けどな、お前の特攻に付き合う気はない。あまりぼつちを縛り付けようとしてくれるな」

……珍しく、苛立ってたのか結構な言葉を言ってしまった。

こつちに来てから俺もところどころおかしいな。いちいちこんなこと言うような奴でもなかったはずだ。

……良くも悪くも、命がけのこの生活で俺も変わってきちまつてることか。まあ、いつも通りがなにも通用しないからな。問題は解消も先送りにもできない。解決するためには、適した状態になるしかない。

雪ノ下や由比ヶ浜が今の俺を見たらなんて言うだろうか。雪ノ下は変わらず罵倒しできそうだが……ああ、そんな状態ですらなかったな、今の奉仕部は。

「……まあいい。俺は行くぞ、じゃあな」

少なくとも俺自身の変化のことはまだ先送りにできる。

けれど最後のリアルでのやり取りは、案外俺を縛り付けているらしい。あの二人が俺を見限らない限り、俺は俺らしいやり方を取れない。……いや、命がけなら小町がいる限り無理か。それ以外でなら、こいつらとはこのゲームまでの関係だから、いくらでも切り捨てたりできるんだが。

目の前の、どういいうわけか泣きそうな顔で俺を睨み付ける女に対して、俺は文字通り、逃げることにした。

Episode 3, part 3

— side アスナ —

「……なによ」

結局、自分だってゲームを楽しんでるじゃない。クリアしたかったんじゃないの？
だから最前線で、最速で、あんなに危ない役目を背負っていたんじゃないの？

「私は焦ってない。焦ってなんて、いるもんですか」

それになによ、あの顔。全部わかってるような……目が濁ってる癖に！

「……結局、私だけ。やるしかない……」

私がやるしかない。絶対に立ち止まらない。

このまま、進んで、クリアしてみせる。

— side 八幡 —

「隣、いいかね」

「……お前か、ヒースクリフ」

56層のレストランで、隣に最強プレイヤーが座った。

「あー、そろそろ本気でサイゼが恋しい……MAXコーヒーも飲みたい。起きていきなり飲んだりしたらだめかな？ だめだろうな……」

「56層のボス部屋、そろそろ見つきりそうだ」

「そりゃ良かった」

「今回、私は指揮と前線に出られない。だからアスナ君に全て任せるつもりだ」

「……おい、さすがに危ないだろ、それ」

「危ない、とは？」

「聞き及んでないとは言わせねえぞ。ここ最近のあいつ、マジで攻略するだけの機械と化してる。血盟騎士団の評価にも繋がるぞ？」

さすがにわかつてはいるらしい。ヒースクリフは珍しく困ったような顔をして、一度ため息を吐いた。

「彼女のクリアへの意思は本物だ。頑なだとも言える。が、私は彼女の意思を尊重したいのだよ」

「取り返しのつかないことになったら、あいつはおしまいだろうけどな」

今のアスナからは、どこか昔の雪ノ下に似た感覚を覚える。

立ちほだかる物は陽乃さんよりも強大で、追い詰められ方もあちらと違って命がけだが。

「珍しく、彼女のことを気にかけるな」

「そりゃ、下手うって攻略遅れたりしたら困るからな」

「それだけかね？」

「あ？」

ヒースクリフとは、わりとこうやって飯食ったりする。大人の距離感というか、俺が話を打ち切りたい時には乗ってくれるからか、話しやすく、思慮深い奴だからか、話しやすいというのもあった。

が、珍しく話を切らずに続けてくるヒースクリフ。思わず見ると、こちらを見て笑っていた。

「君は、どうでもいいと思うものにはとても素直な印象を受ける。だから平気で糾弾できるとし、躊躇わずに辛辣な物言いもできる。おそらく、普段はそんな言動すらしめないのだろうか」

よくわかってるじゃねえか。ま、普段は空気となつてひたすらに場を流しているだけだからな。

クラススの負担にならない俺まじステルス。

「あとはあれだな、君は感情に鈍感だ。理解はしているが、理解しているだけで感じてるわけではないと思われ」

「そうでもないと思うぞ」

まるで平塚先生みたいな物言いだ。ヒースクリフは俺に何が言いたいのか。

「知らぬは本人ばかり、だ。」

そのくせ君は、自分が身内に線引きした相手には甘そうだな。そういう人間には、自

分を隠してでも上手く回そうとしそうだな」

「……」

「当たらずとも遠からず、といったところかね？」

しかし、君も難儀だな。初めて会ったときに比べて表情が豊かになった」

ヒースクリフは満足したように言う、まだ話を続けるらしい。水を飲んでコップを置いた。

「賞賛、尊敬、嫉妬、対抗心。君の言動が本当なら、今までこういった感情とは無縁だったろう。もしかすると、感情を向けられることすら、ね。否が応でも変わらざるを得ない、この環境はどうかね？」

……言い返せない。最近、俺に話しかけるプレイヤーが増えた。

迷宮を歩けばパーティにも誘われる。敵を倒せば褒められ、ボス討伐に参加すれば期待され、討伐すれば労われ。まるで、俺が俺でない扱いを受けている。

違うだろ、そうじゃない。俺が受けるべき扱いでないはずで、それは全てキリトやアスナ、ヒースクリフに行くべきものはずで。

「君はある種、”完結”している人間だ。下手な大人よりもよっぽど大人びている。しかし、君は”未完成”だ。出来上がりには程遠い。大いに感情に振り回され、悩むといい」

「お前、教師か何かかよ」

「いや、そんなものではないよ。まあ、簡単に言えば年上からのちよつとしたアドバイスだ。それと、仕返しも兼ねている」

「仕返しって、何のだよ」

「ちよつとしたとき。君は自分の知らずのうちに私のプライドを傷つけた。だから愉快な仕返し、と思っていてくれ。少しでも、君の成長に繋がることを」

ニヤリと笑って、ヒースクリフは椅子から立ち上がった。
俺の返答より先にレストランを出ていく。

「……何がしたかったんだ、あいつ」

ぼそりと、俺は自分のめちやくちやな心の内を誤魔化すように言ったのだった。

Episode 3, part 4

「おおおおっ！」

ボスエリアの中で、キリトの剣が鋭く振られた。

50層のボスラストアタックボーナスでドロップしたらしい“魔剣”エリユシデータ。かなり要求が高いそうで、しばらくは装備できないとか言ってたのに、もう装備できてるじゃねえか。どんだけレベル上げてるんだよ、あいつ。

「ハチマン！」

「わーってるよ」

刀の範囲上位スキル。裂空。

腕と、刀の重みを一気に利用して、遠心力を使って周囲を薙ぎ払う。

どうでもいいが、やっぱリサチに大声で名前を呼ばれるとびくつとなる。

「つと、取り零しは……早いな、サチがやったのか」

「今回は私がハチマンの背中を守るからね」

「……キリトじゃなくて悪かったな」

「もう！ ボス戦なんだから茶化さないで！」

言いつつも顔を赤くしたサチを背に、俺は迫りくる雑魚モンスターを一息で倒していった。

56層のボスは雑魚沸きが今までの比ではないほど多く、メインでボスを攻める血盟騎士団の面々以外は全員雑魚狩りに担当変更となった。

俺は今回キリトやサチ、ササマルという黒猫団組とパーティを組んで雑魚処理に当てられている。

「ハチマンも言うようになったなあ」

「あんなの誰でも気づくだろう、本人以外は」

俺の目の前で忙しなく移動してボスを攻撃するキリトを見つめ、ボス戦にも関わらずササマルと二人で緊張感のないため息を溢した。

わかりやすく、サチはキリトが好きらしい。黒猫団の面々はみんな当たり前のよう知ってることなんだが、キリトは気づいてなかったりする。鈍感系ってやつか……イケメンにのみ許されることの一つだな。

「さて、と」

話を無理矢理そらしはしたものの、俺は若干動揺していた。

背中を守るとか、言われたことねえよ。つかさつきササマルのと違って、まるで友達——

「違うだろ、勘違いするな」

……それこそ違うだろ。わかってはいる、あいつらに打算とかなくて、いいやつらなんだとは。

だからって、今さら俺に根付いたものが変えられない。どう変えればいいかわからない。

「……くっそ、マジでクソゲー過ぎるだろ」

……らしくないことに、唐突に、凄く雪ノ下や由比ヶ浜、小町に会いたくなってしまうた。

「ハチマン、どうしたんだ？」

「なんでもない。ほら行くぞ、ササマル」

何回目、何体目かわからない雑魚沸きにため息を吐いて、俺は雷切丸を構え直したのだった。

「ササマル、遅いぞ」

「ハチマン基準で言わないでくれよ。そっちが早すぎるんだよ！」

真つ二つに敵を切り裂いて、そのまま沸く位置まで駆け出す。

面倒になった俺はもう沸いた瞬間にやってしまおうという魂胆で裂空を放っていた。

「ボスは……と」

血盟騎士団の面々はさすがと言うべきか、なかなか高水準な連携を組んでいた。最強プレイヤー率いる最強のギルド……か。

「出来すぎてる気がする……って、どうしたんだ、あれ」

ボスの行動パターンが変わった……ってあれ、刀に持ち変えたのか。まるで1層のボスのときみたいだな。

「……ハチマン」

「どうした、キリト」

「刀の攻撃って転倒させるのあるだろ。念のためフォローの準備をしておこう」

「あいよ」

キリトの読み通りと言ったところか。旋車を放ち、血盟騎士団の面々は転倒する。アスナを含めた何人かは立っていたけど、こけてる方が多い。

「キリト」

「ああっ！」

「くっ、リニアー！」

アスナ、そりやダメだ。お前は今回のリーダーなんだから落ち着いて体勢を立て直さねえと。

まだボスは死ぬ体力じゃないだろ。

「つらあつ！」

突きを見舞ったアスナへ振り下ろされた斧を雷切丸で受ける。

片手でアスナを突き飛ばしたこともあつてか受けも片手でしかできず、斧は俺のわき腹へ軽くめり込んだ。

視界が赤くなる、体力バーが一瞬でレッドゾーンだ。

「——っ！」

思わず頭のおかしな声をあげそうになって、必死で取り止める。

くっそ、なんでこんな怖い思いしなきゃいけねえんだよ。

「ハチマンくんっ！」

「うるせえ早く体勢を立て直せバカ野郎が！ 大したボスでもねえのに素人みたいに突撃しやがって！」

悲鳴にも似た声を出すアスナへ大声で言つて、俺はハイポーシオンを飲んだ。HPが全快していき、視界が晴れていく。

最近、大声出すことも躊躇わなくなってきたな……今回はわりと動揺しまくりだからってのもあるが。

「あー、死ぬかと思った。もう動きたくねえ、あとはやつてくれ」

「……わかつてる」

アスナが走り出すのを見て、俺はため息を吐いた。

……くそ。なんだってこんな、俺らしくもないことばかりやらされるんだか。

ああ……やつぱり小町に会いたい。戸塚にも会いたい。

「で、ハチマン。どうしてこうなってるかわかる？」

「……いや、全然なんだが」

ボス戦後、俺は何故か月夜の黒猫団のギルドホームに拉致され、椅子に座らされ、俺をめちゃくちゃ睨むサチを筆頭にオロオロする男陣を眺めていた。

「私は、凄く怒ってます」

「そうだな」

「理由はハチマン、キミです」

「いや、それはわかるんだが、なんで？」

俺、何かサチを怒らせるようなことしただろうか。
つておい男共。お前らも何領いてやがるんだ。

「腕を攻撃するとか、他にやりようはあつたでしょ」

「あー、それか」

「ハチマン、防御は俺らより低いんだから無茶しないでくれよ」

「……しかしだな、あれは適材適所というか……」

「ハチマンの適所は、誰よりも早く動けるつてところでしょ！
ああいうのは盾役の動きで、ハチマンの役目じゃないの！」

「……はこ」

なにこいつ、怖い。

「……あのさ、ハチマン。俺、ハチマンが死んだら、泣くぞ。絶対泣く。ハチマンだけじゃない、他のみんなが死んでも嫌だ」

ダツカーが心配げな様子でこちらを見てくる。いや、なんか盛大な勘違いをされてそうだな。

「俺も、ハチマンが死んだら嫌だな。もしここにいるみんなが死んじゃったら、後追いしそうだ」

「……あのな、ケイタ、ダツカーも。別に俺は自己犠牲がしたいわけじゃない。あるときはたまたま、身体がそう動いてたんだ。少し焦ってたつてもある。」

……その、なんだ、悪かった。サチも、すまなかった。次は気を付ける」

……自分でもびつくりするくらい。言葉が自然と出た。

いや、わかってるんだ。今回ばかりは、俺が悪い。奉仕部の時とは話が違う。切れる最善の手札を切ったわけでもないし、下手したら俺は死ぬし、それはこいつらにも重い

影を落とすことになってしまう。

「……ハチマン、謝れたんだな……」

「おいキリト、それどういう意味だよ」

キリトの言葉にみんな笑って、とりあえずの話は打ち切りらしい。

……こいつらと同じように笑ったりとかはできないしする気もないが、悪くないなど
思えるくらいには俺も思えるようになっていた。

Episode 3, part 5

「…………ふー」

35層、迷いの森と呼ばれるこの場所で俺はポリゴンとなって消えた刀を見つめていた。

コモンの刀じゃ、俺の使い方じゃすぐに壊れてしまう。軽い問題だな、これは。

「スキル自体はだいぶ習得できてきたし、階層を一気に引き上げる意味も込めて武器を新調するか」

雷切丸はレアドロップではあるものの魔剣クラスの武器ではない。

そろそろ新しい刀が欲しいとは思っていたし、今度鍛冶屋巡りでもするか。キリト辺り、腕利きの鍛冶屋でも知ってるといいんだが……

「とりあえず今日は戻るか。もう夜だしな」

こんなに動き回って、俺現実に戻ったら反動でヒツキーにならないよな？
っーか、学校とかどうなるんだらうな。

「……………あ？」

うつすらと、悲鳴みたいなものが聞こえた。

とりあえずそちらへ走ってみると、モンスターに囲まれるプレイヤーが一人。
座り込んで、涙を流しながらじっとモンスターを見ていた。

「ちっ……………雷切丸じゃ間に合わねえ」

念のために帰り敵と遭遇したら熟練度上げるかくらいに装備していた刀の鍔に手を
かけて、俺は一息で駆け抜けた。

「そちらよ……………っつと」

抜刀術による中位の範囲ソードスキルでまとめて薙ぎ払う。

俺とこいつらとじゃそもそも勝負にすらならねえ。当たり前のようにモンスターは消滅した。

「おい、生きてるか……？」

体力はレッドゾーン。かなりギリギリだったみたいだ。

けど、このプレイヤ……ずいぶんと小さな女はそれどころではないようで、小さな羽を手にとっていた。

「ピナが……私の友達が……」

泣きじやくるように、そいつは俺を見上げたのだった。

「あの、ありがとうございます。私、シリカっています」

「ハチマンだ。それで、どうしてあんな状態に？」

悪いがステータスは勝手に見せてももらったが、レベル的にもやれるレベルだろう」

一通り泣いて、落ち着いたらしい女の子のプレイヤー——シリカは目を伏せていきさつを話し始めた。

つまり、この子は男プレイヤーからいい感じに持て囃されて、同じパーティにいた女と揉め事になった。で、喧嘩別れしたのはいいものの、モンスターとエンカウント。こいつは珍しいビーストテイマーらしく、連れていたペットをやられてしまったと。

……災難、とも言いたいことだが、その前に。

「あのな、お前とパーティ組みたがる連中なんざ性根腐った奴らが多いに決まってるだろ。攻略終わってるこんなところでいいとこ見せたいだなんてバカか。」

お前も、ちやほやされてるからっていい気になりすぎるなよ。一歩間違えてたら死んでるんだぞ」

「……………」

……言い過ぎたか？ 見たところ、小町よりも年下っぽいし、子供に酷なことを言っ
ちまったか。

震えて、今ごろ恐怖が来たんだろう。……あー、くそ。こういうの、本当に苦手だ。

「……まあ、わかればいい。で、そのピナつてのは復活させたいか？」

「え？」

「だから、復活させたいのかって聞いているんだよ。

俺もリアルでペット買っててな。そいつが死ぬことはちよつと考えたくない。気持
ちはわかるつもりだ。

蘇らせる方法があるから意思があるなら手伝ってやる」

雪ノ下辺りに罵倒されそうだが、さすがにこれくらい年齢の奴が泣いてるのは堪え
る。……そもそも、女が泣いてるのとかそれだけでトラウマ刺激されるからやめてほし
い。

「どうすればいいんですか？」

「47層のある場所で、 Pneumaの花つてアイテムを使う。期限は三日しかないから、悠長に決めてられないぞ」

「47層って……わ、私、レベルが全然足りてない……」

「俺が代わりに戦闘は請け負ってやる。一応攻略組の人間だ。47層くらいの奴には負けねえよ。お前の装備もいくつか揃えておいてやる」

「これだけお膳立てすればいいだろう。……はあ、マジで雪ノ下がいなくて良かったわ。絶対ロリコンだのなんだの言われる。」

「あ、あの、どうしてそこまでしてくれるんですか？」

「言ったら、俺も猫飼ってるし、動物は好きなんだよ。あとは……これでもリアル職業が

お兄ちゃんだな、まあ、そういうことだ」

「……はいっ！ あの、その、よろしくお願いします！」

ようやく笑ってくれたシリカに、俺は心からホツとした。泣かれてるところを誰かに見られたらほんと通報されかねないからな。

「あれ、ハチマン？」

「あ？ なんだ、サチか。どうしたんだこんなところで」

「え？ あ、えつと……ハチマンこそどうしたの？ とうか、その子は？」

「俺はちよつと野暮用だな。こいつはさつきモンスターに襲われてるところを助けたんだ。ビーストテイマーだそうで、明日かそこらに47層でプネウマの花を取ってくる」

「47層って、レベルは？」

「あそこは平均よりレベルが低いし、俺が戦闘は請け負う。つとそうだ、要らなくなった防具とかないか？」

多少保険はかけておきたいんだが……」

「……ハチマンって、ロリコン？」

「やめろバカ野郎」

雪ノ下みたいな声で言うな。お前に近寄りたくなくなつちやうだろうが。

「……そうね、その方がいいか。わかった、ハチマン。明日ギルドのホームに来てもらえる？ 多分、キリトが何かしら持つてるから」

「なんでキリトが？」

「要らないアイテムとかも溜め込んでるんだって。おかげでストレージが一杯だって」

「あいつ……エギルのところに売りに行けばいいのによ。それか結婚でもしてストレージ共有すりゃいいのにな」

「もう！ と、とにかく明日ギルドホームに来て！ いい？」

「わーったよ。んじゃ、明日な」

サチは結局何が目的だったのか。探し物があつたみたいだが転移結晶で移動していた。

俺もそろそろ戻るとするか。

「念のため、街までは送ってやってやる。」

「……あ、それと俺の戦ってる姿は誰にも言うなよ？」

「はい！ えっと、ハチマンさん？ ハチマンお兄さん？」

「……好きに呼んでくれ」

ちよつと、お兄さんて響きにいいなとか思っていない。思っていないんだからね！

Episode 3, part 6

「……で、別室にいきなり通されたんだが俺はどうなるんだ？」

「いや、ハチマンにお願いがあつてさ」

翌日、シリカを連れて月夜の黒猫団のホームを訪れた俺はサチを含む女性プレイヤーに拉致されたシリカを横目に、キリトとケイタによって別室に連れてこられていた。

「実は、俺達はあるオレンジギルドを追ってる」

「………で？」

オレンジギルド……いわゆる犯罪者集団と思ってくれていい。奴らはPKとかも平気で行う。

ゲーム感覚が抜けないんだろうな。二回ほど遭遇して、どちらも牢獄に送ってやつ

た。

で、それが出てくるとはなかなか穏やかじゃないな。

「そのギルドのリーダーはオレンジアイコンじゃないらしくてな、しかも女なんだ。で、それが昨日あの子と揉めていた」

「なるほどな。だからサチが迷いの森にいたのか」

「そういうこと。で、俺達はそのオレンジギルドは今回彼女を狙ってくるかと踏んでる。だから、そこを叩きたい」

「それで俺らに囿になれと？」

「悪く言えばそうなる。けど、ハチマン、あの子を守ってやってくれないか？」

……まあ、そんなところだろうな。どうせ今回は拒否ができない。せいぜい、仕事が少ない方を選ぶのが吉だろう。

「元々、シリカの戦闘の代行予定だからな。エンカウントした敵は俺が代わりにやる約束だ。問題ねえよ」

「ありがとう、ハチマン」

軽く頭を下げて礼を言うケイタにいいから。つてそれをやめてもらって、元の廊下でシリカを待つ。

やがて出てきたシリカは、レベルのわりにいい装備になって、ずいぶんと見違えたようだった。

「あ、あの、ハチマンお兄さん。どうでしょうか」

「充分だ。それなら一撃でやられることもない」

「……そうではなくなつて……」

「あ? ……あ」

まったくゴミいちゃんは、なんて小町の声が聞こえた気がする。
俺は鈍感系ではないから、一応言うことにする。

「……まあ、似合ってると思うぞ。変ではないから安心しろ」

「はいっ!」

シリカはあれだな、小町から小悪魔的っていうか、意味のわからない思考を取り除いた感じか。

あまりにも真っ直ぐ過ぎて小町、戸塚に並ぶ三人目のマイエンジェルになりそうだ。

「サチ」

「どうしたの、ハチマン」

「キリトとケイタから聞いた。一応、請け負ったと伝えておく」

「！ ありがとう、ハチマン」

ヒラヒラと手を振って、ギルドホームを後にする。

さて、いろいろな思惑がありそうな場所へ行くとするか。

「……」

「ああ、リア充の巣窟だ」

「ハチマンお兄さん……?」

「……なんでもない。行くぞ」

ここはいわゆるデートスポットらしく、男女のプレイヤー達が多く歩いている。つーか、キリトとサチも来てるわけだろ。なるほど、リア充爆発しろ。

……いやまあ、女と二人で歩くとか怖いけど。シリカ？ 俺は犯罪者にはならないぞ。

「と、早速お出ましか」

ここのモンスターはデートスポットだからか、あまり強くない。

一太刀で斬り捨てようとして、目の前に躍り出たシリカに目を奪われた。

「私、ハチマンお兄さんに守ってもらってばっかじゃダメだと思って！」

「……まあ、やるってなら止めないが。俺の判断ですぐに中断させるからな」

「はいー」

俺とは違って目もキラッキラだ。あー、俺にもこんな頃ってあったのかな？ いや、

ないな。

「たあああああつ！」

くだらないことを考えてる間に、シリカが一体目のモンスターを倒していた。

……え、こいつなんでこんな動けてるの？ レベルのわりにダガーの熟練度高くね？

「ど、どうでしたか？」

「正直驚いた。ずいぶんと動けるんだな」

「それなんですけど……」

実はシリカは、それなりに攻略へ貢献したい願望を持ってて、レベル上げとかもしたらしいんだがどうにも適性レベル帯だと誰かしらの男のプレイヤーが倒してくれてしまう。パーティを組んでないと入る経験値は僅かだし、シリカは可愛らしい容姿をしてる。あとは粘着されて、結局レベルは上がらないことが多いと。

なので、自分の適性レベルから大きく下の階層で、ここなら敵の強さとかで粘着されないからとひたすらに狩ってたらしい。

「……たまに、結婚とか申し込まれたりもして……」

……おい、この国大丈夫かよ。雪ノ下、俺よりヤバイやつが結構いるぞ。

「あれだ、月夜の黒猫団、入ってみたらどうだ？ レベル的に、年齢的にもボスには連れて行けないだろうが、少なくとも攻略組へ向けてのレベル上げとかできるしな」

「ハチマンお兄さんも入ってるんですか？」

「いや、俺は無所属だ。あそこにはフレンドが多いから付き合いがあるんだよ」

「……入ったら、また私ともパーティ組んでくれますか？」

「いや、パーティは……」

「……」

おい、なんだその上目遣いは。断ったら泣くぞって視線で訴えるんじゃねえ。こつちが泣くぞ。

「……まあ、組んでやらないこともない」

「やった！　ありがとうございます！」

……小町じゃないぞこいつ。一色を素でやらせてる感じだ。

天然のあざといキャラとか、こいつ将来有望過ぎるだろおい……

「よーし、もつと頑張らないと！」

「……張り切り過ぎて空回るなよ？」

「はいつ！」

……なんか妙に疲れたが、とりあえず進むか。

将来、シリカが一色みたいな人工あざといキャラにならないことを祈るばかりである。

Episode 3, part 7

「これが、プネウマの花……」

「これで終わりだ。念のため、街に戻ってから使うぞ」

あれからシリカと二人で進んで、やばそうなのは俺がやるものの、ほとんどの戦闘はシリカがこなしていた。

途中、シリカがあわや触手プレイ——もといモンスターの蔦に絡まった時はさすがに最速で倒したが。そんなけしからんもの、お兄ちゃん許しません。

そんなこんなで辿り着いた最深部。目的の花はすっかりあって、シリカと俺はそれを無事回収した。

道中、キリト達に言われていたオレンジギルドの襲撃を警戒してはいたものの特に何事もなく、このまま折り返しになるものである。

「……あの、ハチマンお兄さん」

「どうした。何かいたか？」

「いえ、あの、その、ハチマンお兄さんはリアルでもお兄さんなんですよ？」

「そうだな」

とびつきり天使のな。とはさすがにこのくらいの子供には言えない。キリト辺りになら躊躇わず言えるんだが。

「その、なんとなく、本当にお兄さんだな。って思います」

「………そうか」

どうにも、あまりよろしくない勘違いをされている。

キリトやケイタ達にも言えることだが、あいつは俺をなんか普通に普通の人間だと思っやがる。

俺には基本的にぼっち。というタイプがつく。全てのタイプの攻撃がもれなく”こ
うかはぼつぐんだ!”だ。なにそれ弱すぎる。

「あのな、これはフレンドとか、それなりに付き合いのある連中にも言いたいんだが、お
前たちが思ってるほど俺は凄くもないし、大したこともできない。

リアルの話なんかしたら特にそうだ。俺は自分が切れる手札を全部切ってるが、周り
から見たら自己犠牲に見えたり、気に入くないものが多いみたいでな。それなりに意を
汲んで急拵えで解消すれば怒られ、自分の意思を曲げてまで、居場所を守ろうとしてみ
ればやっぱり失敗。どちらかと言えば負け組だ」

首を傾げるシリカ。と、思わず話してしまったが年齢的にも聞けるものじゃなかった
か。

「難しい話をしたな。——本当、調子が狂う。とにかく、今こんな扱いを受けてるけど、
俺は別に凄くない。やれる能力、見合った場所、あとは偶然とかで上手くここにいるん
だ。ゲームだから、つてのが一番大きいかもな」

「……確かに、難しいことはよくわかりませんが、私はハチマンお兄さんは凄いなと思います。」

さつき黒猫団の皆さんにお聞きしたけど、ハチマンさんともう一人、キリトさんて方は攻略組の中でもトップの方なんですよね？

ゲームの中でも、ここでは命がかかっています。そんな中で一番危ないところにいるんですよ？ 凄くないわけじゃないですか。誰がなんて言っても、攻略に関わる人はハチマンお兄さんが戦ってるのを知ってるんです。私も知りました。お兄さんが戦うのを見ました。それを見て、凄いなと思うのは変なことですか？

今、私は、私達はここにいます。ここで凄いな人は、凄いな人なんです」

……なるほど、そうだったのか。なんかいろいろすつきりしたわ。

「ハチマンお兄さん？」

「……いや、お前のおかげですつきりした。ありがとな、シリカ」

思った以上に礼を素直に言えた。ああ、だからなのか。

俺は思った以上にリアルをこのゲームに持ち込んでいたらしい。顔がリアルのままだから。ぼっちだから。なんて、な。間違いいはないが、俺は”比企谷 八幡”ではあると同時にこっちでは”ハチマン”だ。だから、他のプレイヤーから話しかけられるし、キリトやケイタに対して”悪いやつじゃない”なんて感想を抱ける。

このゲームの中に生きる”プレイヤー”として、全員と初対面からやり直してるからだ。

「……っは」

笑みが漏れる。俺もいろいろ見間違えていたらしい。

このゲームが始まってから見たあの風景は、確かに俺の中にまだある。つまりそれは、このゲームに生きているってことだ。

「……だからと言って、クリアしないわけにはいかないがな」

雪ノ下と由比ヶ浜に会って、話す。小町や戸塚にも会う。

それは俺の最終目標だ。大きな寄り道をするつもりはない。ない、が。

——もう少し、このゲームの“住人”として振る舞ってもいいかもしれない。そう、思えた。

「何か、後で礼をさせてくれ、シリカ」

「え？ お礼なんて、むしろ私の方こそです！」

「いや、俺の方こそだ。何がいいか決めておいてくれ、な？」

このシリカは、俺よりよっぽどこのゲームの理解度が高いな。
まさか、こんな簡単なことに気づかないなんてな。

「そろそろ入り口ですね！」

「そうだな」

ふむ、襲撃は全然ないし……これはキリト達がもう抑えたのか——

「——なんて、簡単に済むわけでもないか」

索敵範囲内に一気にアイコンが増える。

これのうち、前方に増えたのが知らない奴らで、後方に増えたのが知ってる奴ら。つまり月夜の黒猫団だ。

「……やあシリカ、お求めの物は手に入ったのかい？」

「っ……っ……！ ロザリア、さん」

目の前に立つきつそうな女と、それを睨むように見つめるシリカ。

……つまりあれがオレンジギルドのリーダーか。なるほど、確かにアイコンは普通だな。

「まあ新しい男ひっ捕まえてパーティ組ませたのかい？ 可愛い女の子は楽でいいねえ」

「おい、何不名誉なこと言ってるんだよ。いくら可愛かろうがなんだろうがシリカの見
た目考える。こんなのに粘着してる男はマジでこええぞ。俺はたまたま乗り掛かった
船で行動してるんだ。犯罪者予備軍と一緒にすんじゃねえ」

なんというか、吹っ切れたせいか言いたいこともはつきり言える。凄い！
もう、何も怖くない！

「…………ハチマンお兄さん…………」

…………前言撤回。なんか隣のシリカがめちやくちや怖い。

「私とパーティ組んでて、そんなこと思ってたんですね…………」

「…………同じ連中と思われたら困るとは、思ってた」

「そしたら私が否定しますから大丈夫ですっ！」

「あー、わかったわかった」

今一応真面目な話だから静かにな。小町にやるように棒読みで答えると、俺は雷切丸の鐙に手をかけた。

どう転んだって何事もなく素通りは無理だろうな。キリト達はどう出るかもわからないし、ひとまず俺から話を切り込むか。

リアルなら、つてのはもう無しだ。こういうのが、少なくともここでの俺の適所だからな。

「……で、だ。そんなに雁首揃えて何しに来たんだ、お前ら」

「は?..」

「惚けても意味ないぞ。俺の索敵スキルの中にはお前を囲むようにして結構な数のアイコンが見えてる」

「……ほー、最近あたしをつけ回してたガキ共といい、どうしてこう、生意気なのが多いのかしらね。」

おら、出てきなお前ら」

おーおー、わらわら出てきやがる。ずいぶんと感覚が麻痺ってきたのかゲームに馴染んだのか、疎みもせずに現れる男共を見ている。そのアイコンは全てオレンジ色。つまり、PKとかそういうのをやったことがあるって証だった。

「……………この、人殺し共が」

「ずいぶんな物言いだねえ。所詮ゲームだ。本当に死んでるかわからないだろう?」

俺には珍しいことに、こいつらには憤りを感じているようだった。

全員、同じのはずだった。ゲームオーバーは死で、俺にもあるくらいだから、このゲームのプレイヤー達にはみんな帰らなきやいけない場所や理由があるはずで。志半ばや、自殺なんていう救いのないものはこの際目を瞑るとしても、こいつらは自分の意思で他のプレイヤーを殺している。

修学旅行の件で、リア充と言えど居場所を守るためにはかなり苦勞していることを知った。こいつらは、それを、半信半疑のまま遊び感覚でそいつらを殺して、更にはそのプレイヤーの居場所に、帰る場所にいる人間達をも絶望に追いやってるわけだ。

「……ならよ」

”ハチマン”は、このゲームで他者との距離感を計れるから、居場所はいらぬ。

”比企谷 八幡”は、何よりも本物が欲しかった。どちらの俺も、それは許せない。このゲームでは、みんな必死に手を取り合う。俺のようなぼっちですら、そうせざるを得ない状況になる。

リアル俺は、まだ眠ったままだ。少なくとも、雪ノ下と由比ヶ浜、戸塚や材木座だつて俺を待っていてくれるかもしれない。……川崎もな。だから、やっぱどちらの俺も許せない。

……まだ、リアルが混同するな。仕方ないか、どちらも俺であることには変わらないからな。

「お前らが、今この場で俺に殺されたって、死なないかもしれないから大丈夫だよな？」

どうしちやっただんたろうな、俺。

後ろからぞろぞろ出てくる黒猫団のメンバーを横目に、俺は雷切丸を抜いたのだった。

Episode 3, part 8

「ハチマンお兄さん……?」

「黒猫団の後ろに下がってろ。……こういうのはあんまり見えていいもんじゃねえ」

一応、まだ脅しのつもりで抜いた物だから何もしないでおく。シリカと入れ替わりにキリト、テツオの二人が俺の両隣に並んだ。

「ハチマン、本当に殺すなよ。こんな奴らと同じになる必要なんてないからな!」

「テツオの言う通りだぞ、ハチマン。」

……お前ら、オレンジギルドのタイタンズハンドのメンバーだな?

シルバーフラグズ、このギルドに聞き覚えがないとは言わせない」

「……あー、いたいた。女プレイヤーってだけでどいつもこいつも鼻の下伸ばしちやつ

てさ。あんまりにも役に立たないからリーダー以外みんな殺しちゃった。

で、どうだった？ 心折れちゃった？ バカねえ、もしかしたら目が覚めてるかもしれないのに。したら私達、いいことしちゃったわね」

「はいっ……」

テツオの声が怒りに震えていた。ある意味、これも間違いないゲームの楽しみ方ではあるんだろうが。

まあ、このゲームの楽しみ方じゃないよな。

「そのリーダーからの依頼だ。お前達全員を捕まえてくれ、とき。」

ずっと57層で仇討ちしてくれる攻略組の人がいないか探していたよ。だから、俺達”月夜の黒猫団”が請け負った」

「月夜の黒猫団って……攻略組のギルドかよ」

「黒いコートに片手剣……まさか、あいつ”黒の剣士”のキリトか」

「ご明察。ついでに言えば、隣のこいつは『影纏い』のハチマンだぞ」

……やめてくれ、布団に入ってひたすらぐるぐる回りたくなる。
材木座じゃないんだからもう無理だそういうのは。

「……四強のうち二人がこんなところになって、攻略組つてのもずいぶんな暇人なんだね」
「お前らみたいな犯罪者を捕まえてクリアまで快適に他のプレイヤーに過ごしてもらおうのも攻略組の仕事の一つさ」

え、そうなの？ キリトいつの間になんか決めたの？
ちよつとお前主人公過ぎない？ 俺と後ろにいるサチの位置変わろうか？

「ハチマン。こっからあいつらのところまでどれくらいで行ける？」

「一息ありや充分だ」

いざ戦闘になったところで、勝負は明白だ。

所詮こんなところでPKに勤しむレベルの連中と、攻略の最前線を受ける俺らとではレベルが違う。

奴らの攻撃じゃ俺を捕まえられないし、自動で回復するキリトの体力を減らせない、テツオの攻撃も受けられないだろう。

「じゃあハチマン、これ」

テツオに渡されたのは一振りの刀。攻撃力はかなり低く、ステータスには麻痺がついていた。

「ダッカーお手製の鎮圧用武器だ。キリトの腕力でも死なないようにしてあるし、麻痺があるから一発当てればあいつらなら大丈夫だ」

「せーので、一気にやるぞ」

「……いや、いい」

こういうとき、俺はやはりまだ俺のままだと思う。

怒られるんだろな、とわかっていても、これは変えられない。

これが雪ノ下や由比ヶ浜でもおそらく同じ行動を取っていただろう。あいつらなら、余計にだ。

「え、ハチマン？」

「……じゃ、行くぞ」

雷切丸からダツカー製の刀に持ち変えて、俺は一息で奴らの真ん中まで駆けた。

当たり前というかなんと言うか、誰一人として反応も見ることでもできず、俺は奴らの真ん中でため息を一つ。

「お前らな、これに懲りたら一生反省しろよ。リアルに出てもな」

「なっ……」

「い、いつの間に!?!」

「……なんてな、そらよ」

ソードスキルを使うまでもない。走って、斬って、走って、斬って。数秒とかからずにロザリア以外の奴らを地へと斬り伏せていた。

「さて、あとはあんただけだ。どうする?」

「い、いいのかい? 私を攻撃すればあんたもオレンジだ。四強の一人がそんなので、攻略組の示しが付くのかよ!」

「関係ねえよ。元々俺はぼっちだからな。そこは変わらないし、変えない。

……オレンジになってもあいつらが即協力してくれそうだしな」

「……くっそがああっ！」

「怒鳴るなよ、怖いだろ」

ヒュン。と一閃。それだけでことは足りた。俺のアイコンはオレンジに変わったが、ロザリアは目の前に倒れた。

「この、クソガキが……」

「うるせえ、自分の立場考えておけよ。別に本気でやってもいいと思ってるんだぞ、俺は。あんまり騒がしいと——

お前を殺すぞ、ロザリア」

「ぐっ……」

なんだよ、結局殺されるのは怖いんじゃないか。顔面近くの地面に刺さった雷切丸を見ようともせず、ロザリアは悔しそうな顔をしていた。

「ハチマン！ どうして先走ったんだよ」

「こういうのは時間が命だろ。ほら、早く牢獄送りにしてやれよ」

ヒラヒラと手を振って、俺は雷切丸を納刀したのだった。

「で、ハチマン」

「ん」

「なんで先走ったんだよ」

「……時間が命つてのは確かだ。黒猫団の名前を聞いて及び腰っぽいのもいたからな。逃げるのを追っかけるのは面倒だろ？」

あとは、まあ……多少の配慮だな。黒猫団の誰かがオレンジになるよりかはソロの俺がオレンジになった方が周りの受けもわかりやすい」

「でも、それじゃ、ハチマンが——」

「——だから」

「これは、比企谷 八幡 なら言えないこと。これは、ハチマンだから言えることだ。」

「代わりにあれだ、カルマ回復のクエスト、手伝ってくんね?」

「……お前、本当にハチマン?」

「なんだよ藪から棒に。いいわじゃあキリトには頼まねえ。テツオ、頼めるか?」

「ちよ、わ、悪かったってハチマン。俺にも手伝わせてくれよ、頼む」

「なんでキリトが頼んで来るんだよ」

俺はどうかかわからないが、みんな笑顔になっていた。

笑顔にはなっていないかもしれないが、少なくとも、これから変に悩むことが少なそうで、俺は心が少しだけ軽くなった気がしていた。

E p i s o d e 3 , F i n

Episode 4, part 1

「あー、そろそろ春か」

現在三月。俺は57層で気に入った部屋を買い取って、そこをホームにしていた。

そのホームから見える景色を見ながら、なんとも言えないため息を溢した。

卒業式が近いな。……あいつら、みんな卒業か。

雪ノ下はどんな大学へ行ったのだろう。由比ヶ浜は大学へ行けたのか。

小町は総武高校でやっていけるのか、そもそも総武高校にいるのか。

川崎も、あんなことがあったから進路は気になつてはいる。上手く行けてるとい
が。

葉山軍団はまだみんな仲良くしてるのだろうか。三浦とか、卒業式に泣く奴の筆頭つ
ぽそうだな。

戸塚は……ああ戸塚、お前に会えないのがまさかこんなにも心苦しいとはな。

一色も、ちゃんと生徒会長やれるのだろうか。葉山とはどうなったのか、告白でき
たのか。そういや、これで春からあいつも三年か。 実質先輩だな。

平塚先生は……まだ結婚できてないだろうな。戻ったらネットゲ婚活でもおすすめするか。

「……くっそ」

ガラにもなく、感傷的になった。意外なことに、奉仕部だけでなく、あの学校生活をもそれなりに楽しんでいたらしい。

……置いていかれる感覚が、無償に俺を攻めてくる。

「あれからこんなのばっかりだ」

俺は確かにこのゲームを認めた。ハチマンというプレイヤーの存在はこのゲームのプレイヤーとコミュニケーションを取れるし、必要とされ、頼られ、頼ることも覚えた。したらどうだ、ずいぶんメンタル弱くなったんじゃないか、俺。

このままではダメだ。リアルに戻って絶対に苦労する。

「俺はぼっち。孤高の存在。ロンリーウルフ」

……何やってるんだろうな、俺。

抜刀術の熟練度も粗方上げたし、何もやらないとやることがない。

攻略階層は現在62層、順調に攻略は進んでいる。そういやキリトの奴、この前ダークリパルサーとか言う剣を持ってたな。魔剣に匹敵するステータスの剣らしいが、なんでそんな剣を持ったのかは頑なに教えてくれなかったな。

けど、どうやらあれは手製の物で、俺も武器を新調したいと言ったら紹介してくれると言っていたし、近いうちに聞いてみるとしよう。

「……の前に、とりあえずエギルの所に行くか」

ストレージに溜まったアイテムの山を見て、鍛冶屋に頼みそうなもののみ置いて、俺はエギルの雑貨屋へ向かったのだった。

「うす、エギル」

「おお、ハチマンか。よく来たな！」

「つてわけだ、悪いが俺はパスさせてもらおう」

「エギルが営む雑貨屋に来ると、あまり会いたくない先客がいた。

SAO最強ギルド、血盟騎士団のトップ二人である。」

「ふむ、ならば致し方ない。お客のようだし、引かせていただくよ。」

「——やあ、昨日ぶりかね、ハチマンくん」

「そうなるな、お前俺の行く飯屋にいる確率高すぎるんだよ、ヒースクリフ」

「どうやら攻略組でまだ俺と同じソロプレイヤーであるエギルを勧誘に来ていたようだった。」

「攻略組の様相は、あれから洗練された。くらいにしか言い様がない。ソロプレイヤーは軒並み血盟騎士団か聖龍連合に入り、他は他でギルドを組んだりして活動するようになった。ここに来てポストや雑魚のステータスもだいぶ上がって来たからか、攻略も慎重

さが増した。入念に偵察などを行ってから攻略に臨むようになった。

これは大きな変化と言える。

「なんだ、二人は結構話すのか？」

「世間話が多いがね。年が近そうな者はいくらでもいるが、攻略のことまで入れて深く話せる者は彼くらいなものだ。味覚も通じるものがあるみたいだがね」

「なるほどな、まあ、四強ともなりや話す内容も凄そうだが……」

「そこまでもないさ。最近、ハチマン君は話しやすくなったからね」

「それは俺も思ったな。壁が小さくなったというか……」

「お前らの思い込みだ。ほらエギル、これ」

「おう。つて、ずいぶんレアアイテム持ってるな」

「いろんなところ回って狩りまくったからな。気がついたら溜まってた」

抜刀術の訓練がてらだが……俺にはいらぬ物が多すぎる。

「キリトも同じこと言ってたな。武者修行でもしてるのか？」

「まあ、そんなところだ」

「なら」

ついさつきまで黙っていた女が口を開いた。血盟騎士団のナンバー2。閃光のアスナ。

攻略の鬼とか言われる一方で見た目はいい、一応気遣いはできる、肩書きも抜群と大気は止まらない。

アスナ様。とか呼ばれてる姿を見て笑い死ぬかと思った。すっかり攻略組のシンボルだ。

……俺も”影纏い”とかって名前を呼ばれないでそれを呼ばれることが増えて、少し死にたくなつたが。

「その武者修行、攻略しながらやって欲しいものね」

「攻略は攻略でやってる。別に何をしようが俺の勝手だろ」

「そうね、せいぜいゲームを楽しんでればいいんだわ。団長、失礼します」

「……すまないね、ハチマン君。どうも彼女は君には厳しいな」

「別に気にしてねえよ。あいつがどうしてあなのかなのはなんとなく、わからなくもないからな」

どうして、あそこまで攻撃的な反応をするかまでは俺も理解できないが。他人に失望したら切り捨てるか、自己嫌悪するもんだと思つてたが。

——雪ノ下は、あのときどんな気持ちだったんだろうな。

「と、メールだ。シリカからだな……エギル、査定は後日取りに来るわ」

「どうしたんだ？」

「レベル上げ付き合えだだよ。俺じゃなくてギルドメンバーに頼めればいいんだけど……まあ、行ってくる」

シリカはあのとピナを蘇らせて、月夜の黒猫団に入った。

伸び伸びやらせてもらえてるみたいで、ボス戦は参加しないものの、攻略組の仲間入りは少しずつ果たせている。

あいつの望むお礼は俺とのフレンド登録だったのだが、こうして暇なときにレベル上げに付き合わされている。面倒な時とかは断ってるんだが、今回ヒースクリフがいたからな。あいつといると長話になりかねないから脱出の意も込めて俺はシリカの待つポイントへ向かったのだった。

Episode 4, part 2

「おはようございます、ハチマンお兄さん！」

「よ、シリカ」

つい先日レベル上げに付き合ったシリカと、俺は何日かぶりにまた会っていた。

今度は俺の理由で、キリトに噂の鍛冶師を紹介してもらおうと頼んだら今日そのところにいるらしく、俺も呼ばれることとなった。で、何故か道案内をシリカが受けることになったのだ。

「リズベットさんのところですよね、案内しますっ！」

「名前までは知らないが……なんだ、お前も知り合いなのか？」

「キリトさんからの紹介で、月夜の黒猫団は結構お世話になってる人が多いんです。」

私のダガーも作ってもらったんですよ」

「へえ」

攻略ギルドが世話になつてゐるわけだし、キリトのダークリパルサーの性能を見ても、有能であることは間違いなさそうだ。

「こつちです」

元気一杯な様子で先を歩くシリカを見つつ、いつものペースで歩いて行く。

……そういうや、明日卒業式か。やめよ、考えた所でどうにもならないし、どうもできない。クリアできるように動くしかねえ。

「リズベットさーん」

少し街から外れた場所に、一件の小屋があつた。

ここがそうらしい。シリカが扉を開くとそのまま固まつた。

「キリト、来たぞ——つて、なんだこりゃ」

中では、キリトが慌てたようにサチとピンク色の髪の毛の女の仲裁に入ってるようで、そこから少し離れて困ったようにアスナが立っていた。

え、なにこれ、帰った方がいいの？

「シリカ、目を改めるか」

「つて、ちよつと待てえっ！ ハチマン、頼むから」

アスナは視線だけこっちに寄越して、キリトはどうか縋るようにこちらを見て、サチと女は俺という乱入者に一旦距離を取っていた。

……あれだ、これは修羅場の予感。

「あー、キリトから話は聞いてると思うが、ハチマンだ」

「リズベツトよ、よろしく。なるほど、”影纏い”の名に恥じない感じね。特に目が」

「余計なお世話だ。で、手っ取り早く用件を伝えるぞ。刀を一振り作ってくれ。こいつを好きにして構わないから」

キリト、アスナ、サチが息を飲むのが聞こえた。

当たり前か、俺は雷切丸を差し出したからだろう。

「これ、結構レアなんじゃないの？」

「一応は、な。つつても最近火力の限界を感じてる。それに、形も普通の刀みたいな長さ」と反りが欲しい。余った材料は渡すし、金もある限りは言い値で払う。できるか？」

「ハチマン、雷切丸を……」

「いいんだよ。俺にもいろいろ事情があつてな、こいつじゃ無理なことが増えてきた」

リズベットはしばらく悩む仕草を見せて、それから困つたような顔に変わった。

「そこまで言われたらこつちも持てる限りで応えたいんだけど、素材がそれだけじゃ足りないよ。」

キリトのダーククリパルサーを作つた時と同じ。相応の素材が必要なのよ」

「なるほどな、別に取りに行くのは構わない。場所とか教えてくれるか？」

「……それが、二つ必要なんだけど、二ヶ所同時に攻撃しないとドロップしなくつて。最低でも二人、必要なのよね」

「なるほどな。つてことは同行者がいると……」

パツと見回してみる。キリト、サチ、シリカ、リズベット。

リズベットの実力はわからないが、良くてシリカと同じくらいとかならう。つて考え

ると前者三人。アスナ？

頼んでも即断られるだろ、わかりきってる。

「困ったな、俺達明日からギルド総出で迷宮攻略なんだよな……」

「そうなのか」

「うん。キリトも、私も、出ずっぱりになりそうで」

「……ほー」

妙にリズベットを意識して言ったサチの言葉は、リズベットの額に青筋を浮かべさせていた。

つまり、あれか。これは……

「キリト」

「ん？」

「悪いことは言わない。爆発しろ」

「なんで!?!」

さて、となるとシリカも無理そうか。こら、そんな申し訳なさそうな顔でこつちを見るんじゃない。

「ごめんなさい、ハチマンお兄さん……」

「気にすんな。階層によっちゃ連れてくのも難しいしな。迷宮攻略ついでにレベル上げとけよ」

「はいっ!」

「相変わらずシリカには甘いんだから……」

「普通の対応だろうが。リアルジョブお兄ちゃんを甘くみるなよ」

「……」

サチ、申し訳ないんだが本気で引くのやめてくれない？

泣きたくなっちゃうから。

「私も、できればこれじっくり解体したいから出られないし、攻略組ほど強くもないからね。足手まといになっちゃうだろうし……」

「……どうするか。誰か暇そうなやつ……いるかわかんねえ」

いつそヒースクリフでも……やめよう。後ろにいるやつからリニアースれかねない。

「あ、そうだ！ アスナはどう？ お互い四強って呼ばれるくらいだし、面識とかもあるんでしょ？ 実力的にも申し分ないくらいだし」

「え、私？ 私は——」

「いや、それは無理だリズベツト。いくら同じ方向見てるって言っても人の相性つてのは存在する。俺とアスナはそれが良くない。根本的に合わねえから、アスナは無理だ。」

もう一人は俺でどうにか見つけるから、場所を——」

ダン。と大きな足音がして、俺の右側に人影が現れた。

誰かわからなくてそつちを見ると、アスナがいかにも私不機嫌です。つて顔で俺を見ていた。

え、なに、本当のこと言っただけでしょ？ なんでそんな顔してんの？

「いいわリズ。私で良ければ行ってくる。ハチマンくんも、いいわよね？」

「……いや、他の奴で——」

「い、い、わ、よ、ね？」

「……………はっ」

怖い。この攻略の鬼怖い。

リズベツトもサチもキリトもシリカも、うわあ。みたいな顔でこつちを見ている。
……こうして、気の落ち込みまくりそうな二人旅が始まることとなったのだった。

Episode 4, part 3 (☆)

— side 結衣 —

「ゆい……春休みめっちゃ遊びまくるかんね……」

「あ、あはは、うん。遊ぼうね、優美子」

卒業式が終わって、みんなで外にいる。あたしは三年も結局ずっと一緒だった隼人くん達や優美子達と別れて、一人ずつ、挨拶に行きたかった人の元へ向かおうと思う。優美子、泣きすぎだよ……

「結衣」

「隼人くん？」

「聞いたよ。比企谷、病院移るんだってな」

「……うん。ゆきのんも私も都内近くになるから、それに合わせてお見舞い行きやすいようにって。

S A O事件の被害者さんが多く入院してるみたい」

隼人くんは、ヒツキーがS A O事件に巻き込まれてからヒキタニくんと呼ばなくなつた。

自業自得。なんて笑つたさがみんなに対して、誰もが見たことないくらいに怒つたのも隼人くんだった。あたしにはわからないけど、あの二人にはあの二人なりに何かあつたのかなって思う。

「そっか、引き止めて悪かったな。俺も見舞い行こうと思うんだ。それじゃ、またみんなで遊んだりしような」

「うん、それじゃ、ばいばい」

隼人くんと別れて、あたしはまず職員室へ行つた。

最初に会おうと思ったのは、あたし達奉仕部の顧問――

「平塚先生」

「おお、由比ヶ浜か。さつき雪ノ下もいたんだ。卒業おめでとう。そして、大学でも頑張れよ」

「はい」

ヒツキーがああなってから、平塚先生も目に見えて弱ってた。平塚先生、なんだかんだヒツキーには優しかったもんね。

「……欲を言えば、三人全員の卒業が見たかったよ」

「……」

「すまないな。大丈夫、あいつはそのうち帰ってくる。」

お前達に話があるんだろう？ 比企谷はどうしようもなく外道だが、君たちとの約束を反故するような奴ではないさ」

「……はっ」

「さ、行った行った。君がいたら泣くに泣けない。

改めて、卒業おめでとう。由比ヶ浜」

あたしに背を向ける平塚先生にぺこりとお辞儀をして、あたしは職員室を後にした。

……ヒッキー……

「さいちゃん」

「あ、由比ヶ浜さん。卒業おめでとう」

「さいちゃんもおめでどう。看護学校に行くんだよね？」

「うん。……看護師さんも、人手不足だからね」

さいちゃんは教室にまだいた。夢でもある看護師になりたいみたいで、看護の専門学校へ行くんだって。

さいちゃんも、ヒッキーが事件に巻き込まれたって聞いて、毎日お見舞いに行ってた。男の友達ヒッキーくらいしかいなかったって言った。さいちゃん、可愛いから他の男子は変な色眼鏡で見ちゃうみたいで。

あたしも、あれから何回か告白されたりした。ヒッキーのいない隙間がどうこう、なんて意味のわからない人もいて、正直、男子が少し嫌いになった。

「また、八幡のお見舞い、行こうね」

「もちろんだよ！」

少し言葉少なく、あたしはさいちゃんと別れた。

「あ、結衣さん！」

「……由比ヶ浜か。卒業おめでとう」

「サキサキもおめでとう」

「……はあ、いちいち訂正するの面倒になったよ」

あたしに飛び付いてくる小町ちゃんの頭を撫でて、あたしはサキサキに笑いかけた。やった、最後に勝った、かな。

小町ちゃんは、あれ以来、甘えてくることが増えた。

といつても女子にばかりこういったスキンシップをするけど、男子とは全然、話もしないみたい。

ヒツキーを足掛けにして小町ちゃんと親しくなろうって男子が多かったみたいで、小町ちゃんは多分あたし以上に男が嫌いになっちゃってるかもしれない。

「と言うか、あんたとは大学でもよろしく。か。まさか同じ大学とはね」

「あはは……うん、よろしくね」

私とサキサキは偶然同じ大学に合格した。学部は違うけど、友達が同じ大学っていうのは少し心強いな、なんて思う。

「……小町、あんたの兄貴のところには行くからさ。早く帰って来いつて言つときなよ」

「了解であります！ あ、結衣さん。雪乃さんが部室にいるから、だそうです」

「ん、わかった。またね、二人とも」

みんなには一通り挨拶したかな？ あたしはゆきのんが待つ部室へ小走りで向かったのだった。

「ゆきのん」

「由比ヶ浜さん、卒業おめでとう」

「ゆきのんも、おめでとう」

ゆきのんは、あれから元のゆきのんに戻った。

戻ったどころじゃない、びつくりするくらい素直になった。あたしとか限定、だけど。陽乃さんに、もう二度と後を追わないって言ったり、隼人くんに対して、どんなことがあっても絶対に嫌いって言ったり……そして――

「私、今日は比企谷くんのところ、行けないわ」

「ゆきのんもなんだ。あたしも、なんだ」

夜は優美子達と打ち上げだから、今日はヒッキーのお見舞いに行けない。
ゆきのんは、家の人と出かけるのかな？

「さつき財津——いえ、材木座くんが来たわ。これから彼に卒業報告に行くそうよ。彼、なんて言ったと思う？」

” 八幡は俺のたった一人の友達だから、どんなことがあっても待つてるし、何かがあつたら助ける” だって。比企谷くん、凄く迷惑そうな顔をしそうね」

「でも、ほんとには嬉しいんだよね、ヒツキー」

「ええ、きつとそうよ。彼はいつだって自分すら騙してしまふから。一色さんもいらしたわ。」

小町さんは任せて、とお伝えください。とのことよ」

「そっか……」

いろはちゃんも、ヒツキーが事件に巻き込まれたって聞いてから真面目に生徒会長をやつてた。

ヒツキー曰く「あざとい」ってところもあまり見せなかつたし。二年連続生徒会長なんてやって、今年の生徒会選挙までは生徒会長をやっているみたい。

「ねえ、ゆきののん」

「何かしら、由比ヶ浜さん」

「……三人で、卒業したかったな」

泣きすぎちゃったのか、涙はもう流れなかった。けど、悲しくないわけじゃない。忘れたわけじゃない。

むしろ、前よりも全然、ヒッキーが好き。

「そうね。けど、彼は帰ってくるわ。しぶとさも、ずる賢さも並みじゃない。もしかしたら、解決に向けて最前線にいたりして」

「あはは、ヒッキーらしくないなあ」

けど、ヒッキーが何もしないなんて考えられない。

きつと、いろんなことを頑張ってるんじゃないかって思う。

「彼が戻ってきたら、私達の番ね」

「……うん」

——私、比企谷くんが好きよ。

ゆきのんの言葉は、不思議と当たり前だっと思って思えた。あんなに頑張ってたヒツキーを見てた人が、ヒツキーを好きにならないわけがないって。

あたしがそうなんだから間違いない。

サキサキやいろはちゃん、それこそ陽乃さんだっけ怪しい。ヒツキー、なんでこんなにモテてるの？

目、腐ってるはずなのに。

「ゆきのん、あたし、負けないから」

「私もよ。いくら由比ヶ浜さんでもこれだけは負けられないわ」

どちらからというわけでもなく、私達は笑いあっていた。

Episode 4, part 4

— side 八幡 —

「……はぁ……」

翌日の昼過ぎ、木々の生い茂る山の中で俺は大きくため息を吐いた。

今ごろ卒業式は終わっただろうか。あいつら、全員卒業できただろうか。

同行者のことも含めて、俺は何重にも憂鬱な気持ちになってもう一度ため息を吐いた。

「……何よ、そんなに私じゃ不満？」

「そうじゃねえよ。お前には関係ない」

突っかかってくるアスナを流して俺は目の前のモンスターを斬り払った。

今の俺の装備はリズベットに渡された刀だ。なるほど腕はいい。要求の低さのわり

にステータスは高く、中級者くらいに好まれそうな造りをしている。

「……本当に、なんなのよ」

「俺は俺だ。お前は俺に何を抱いて、何に失望したのか知らないが、これが俺だ。あまり、過剰な期待を寄せるな」

「そうね、そうするわ。他のプレイヤー達みたいにゲームを楽しんで、リアルなんて忘れればいいんだわ——」

「——俺はっ!」

耐えきれず、大声が出た。最近慣れてきたとは言え、大声はやはりあまり好きじゃない。
い。

悪い、なんて謝るつもりもないが。

「……俺は、今日、何もなければ卒業式だった」

「っ！」

「忘れられるかよ。なんだって、誰だって、忘れられるか。俺を知らないこの世界は住み心地がいいかもしれないが、それでも俺は………本物が欲しかった。愚かかもしれないが、な」

だから、だからあの二人と話をするはずだった。
何がなんでも、クリアしてやるって決めた。

「攻略組の連中だけじゃない。誰だって、みんなクリアしたいと思ってるだろうよ。でもな、真っ直ぐに突き進めるのは一握りだ。」

……全員が全員、お前と同じくらい強いなんて思うんじゃねえよ」

無理矢理に会話を打ち切って、俺はアスナに先導して道を歩き始めた。

……人に対して正面から感情的に言葉を向けたのはどれくらいぶりだっただろうか。

「……はあ」

ため息を吐いてモンスターを斬り捨てる。
だから言ったんだ、こいつとは相性が悪いってさ。

「(ハ)は……」

「このダンジョンを抜けた先にそのモンスターの巣があるんだと」

「そう」

グイグイと進んでいくアスナ。

人の相性は悪いものの、戦闘に関してはお互い問題ないせいか、ダンジョン攻略もどんどん進んで行く。

ダンジョンにもボスはいらるようで、最深部の先、扉を守るようにして頭を二つ持つり

ザードマンが立っていた。

「どうするっ？」

「私がやるわ。すぐに片付けて進みましょう」

仕事をしなくていいならそれに越したことはない。

アスナに任せて、俺はその様子を眺めていた。

——side アスナ——

「……なによ」

遠めに立つボスに、武器の切っ先を向ける。

何階層も前から、私の心は荒れに荒れていた。彼も結局、私の理解者じゃなかった。

そう思ってたはずなのに……

私は、彼をフレンドから消せなかった。あのボス戦の時、死にそうになるハチマンく

んを見て背筋が凍った。そして怒鳴られて、まるで反論できなくて、悔しかった。そして――

――俺は、今日、何もなければ卒業式だった。

あんなに悲痛なハチマンくんの顔を見たのは初めてかもしれない。

わかっている、あれは私が悪い。……ハチマンくんだけじゃない、みんなリアルに戻りたいから攻略してるわけで、リアルを忘れてる人なんて、ほとんどいないなんて、当たり前なのに。

「フラッシュング――」

助走を付けて、細剣の最上位ソードスキルの準備をする。

自分への嫌悪感と、もやもやと、この荒れた気持ちを全て剣に乗せる。

「――ペネトレイター――」

最速、最大のソードスキル。助走が必要なのを除けば、このスキルの最高速の私はハチマンくんにも並ぶくらい速い。

59層の、ただのダンジョンレベルのボス。確認なんてするまでもなく私はそのボスを貫通していた。

「……………ふう」

けれど、少しも心は晴れなくて、そんな私を――

「この、バカ野郎が」

――ハチマンくんが思いきり突き飛ばしていた。

「きゃつ……………」

金属音が響く。慌てて目を向ければボスはまだ立っていて、ハチマンくんがいつも通りの速さでそれを斬り付けていた。

「ちっ、距離離すぞ」

イライラを隠しもしないで私に言って、私達は距離を取った。

「いつかのリプレイかよ。相手が倒れたかどうか確認できないような素人じゃないだろ、お前は」

「それは……」

「もういい。いいから下がってろ」

——それは、その言葉はあまりにも冷たくて、切り捨てるようで。

その言葉に私は自分の中の感情が抑えきれなくなつて、彼の言葉を聞かず、私は一気に駆け出していた。

Episode 4, part 5

「リニアー！」

何度撃つても、何発入れても、ボスは倒れない。

おかしい。どうして、こんな……

「なんで、なんでなのよー！」

ヒュン。と風を斬る音が聞こえた。

ソードスキルが発動したのはわかるけど、残光しか見えないほどの速さのそれはボスを二つに両断して、ハチマンくんは私の腕を掴んで引っ張った。

……今の、なに？ 何をしたっていうの？

「なんでもどうしてもあるか。落ち着け」

「でも……」

「いいからほら、息を吸え。吸う感覚を持て」

言われた通りにする。息を吸えてるかわからないけど、吸っておく。

「で、吐け」

言われた通りに深呼吸。ハチマンくんが見せた速すぎるソードスキルのせいもあってか、私は混乱しつつも少し落ち着けた。

「さて、お前が突っ走って30分ほど経った。ついでにとボスを見てたが何も得られなかったんでとりあえずこっちに戻すことにした」

「なによ、それ」

「事実だ」

端的に告げられたそれは、やっぱり私に対してもういらないうつていうようで……

「……私は、いらないうつてこと？」

「は？　なんでそうなるわけ？」

「そういうことでしょ？　そうよね、クリアばかり目指してやってる私がこんなで、寄り道して、ゲームを楽しんでるキミの方が全然優秀だものね」

もうわけがわからない。私は何が言いたいか、何を言いたいか。悔しくて、支離滅裂だつてわかつてても、言葉が止まらなかつた。

「……なあ、アスナ」

「なに——」

コツン。と、頭に何か当たる感覚。痛くなんてないし、何かと思えばハチマンくんは私の頭にチョップを落としていた。

その表情は、もう面倒そうなものを見るような目だった。いつも以上に濁った目で――

「もう一回言うぞ、落ち着け」

一旦ボス部屋から出て、ハチマンくんは大きくため息を吐いた。それから近くの石段に座って天井を見上げた。

「ま、お前も座れよ。どうせこのままじゃあれは倒せないしな」

「けど……」

「諦めろ。打開策を考えないと無理だ。何回攻撃したか考えてみる」

今度こそ、私も近くの石段に座った。

そこでハチマンくんはもう一度ため息。

「まあ、年下だろうとは思ってたんだけど、お前……案外子供っぽいのな」

「なっ、いきなり何を言うのよ」

「事実だろ？　なんだよさっきの痲癩は。」

俺はお前が俺より劣ってるだとか、いらんだとか思ってたないぞ。そもそも、お前がいなくなったら誰が攻略組引つ張るんだよ」

「え？」

「まずだな、俺は肩の力を抜けて前に言つたら。ギリギリまで張り詰めた結果がさっきの痲癩だ。」

無理な嘘はどつかで破綻する。自分を騙したいならできる範囲でやれよ。

周りはどう思うかは別として、俺はそのつもりでやってる」

「……でも、私はこのゲームから出たくて」

「わかってる。俺だってそうだって何回も言ったろ。」

俺は茅場晶彦を心底恨んでる」

「なら、どうしてそんなゆとりが持てるの？ ハチマンくんも、私と同じでクリアに追われてると思ってたのに。だから、自分をも利用してたって思ったのに」

ここにきて、聞きたいことが初めて聞けたのかもしれない。

ハチマンくんもさつきと違って何か納得したように頷いてる。

「それがお前が俺に抱いてたもので、失望したもので、

いや、気持ちにはわかる。知らず俺はお前の理解者みたいな立場になってたんだろ。俺は失望したこともされたこともある。どっちも経験者だな」

なんとなく、悲しそうな顔でハチマンくんはそう言って天井を見上げたまま肩を震わせた。

笑っていたみたい。何にだろう。

「最初は俺も狂ったようにモンスターを狩ったりした。死にそうになるくらいな」

ぼそりぼそりと、いつも通りの少しくぐもった声でハチマンくんは話を続ける。

「その時に見た風景が、綺麗だったんだよ。

ゲームだ、クソだ。って割り切れなくなるくらい。精神的に追い詰められてたのもあるのかもな。でも、この”世界”を楽しんでも言い様な気がした。あときは誰かに文句なんて言われるとは思わなかったしな」

皮肉を言ってハチマンくんは私に視線をやった。

……ふんだ、そんなの知らない。

「救われた。文字通り俺はあのとときにこの世界に救われた。お前に比べて余裕が持てる理由その一だな」

「つてことは、まだあるの?」

「二つ目は、俺が”ハチマン”であることだな。それを認められるようになった」

「……どういうこと?」

いつも余裕っぽくて、皮肉っぽい笑顔を浮かべたりほんとは切羽詰まらないと感情的にならないハチマンくんが、そんな風に救われただなんて言うのも意外なのに、もう一つは、更にわけのわからないものだった。

「俺はこのゲームのプレイヤーのハチマンだ」

「そうね」

「お前はこのゲームのプレイヤーのアスナだ」

「ええ」

「つまりそういうこと。ここはリアルじゃねえ、死んだら死ぬっていうクソゲーの中だ。でも、だからこそ俺は“ハチマン”として生きてる。リアルの俺じゃ受けなさそうなの評価を受けるし、俺もリアルよりかは安心して人と話ができる。今ここにいるお前は誰だ？ アスナだろ。俺はお前のリアルに興味もないし、知りたいとも思わない。が、ここにいるアスナに関しては一定以上の評価はしてるつもりだ。

「ここ最近無茶が目立つが、これだけ攻略が進むのはお前の手腕だからな。俺には絶対できない」

「……今ここにいる私は、アスナ。」

結城明日奈じゃなくて、アスナ。親に言われた通りに何かをする結城明日奈と、こうして自分の意思で武器を持って、戦うアスナ。同じ中身なのに恐ろしく違う人に見える。

「……ね、ハチマンくん」

「あ？」

「私ね、ずっと……ずっと、親に言われるまま頑張ってきたの」

「……どうしたいきなり。リアルのことはあまり話さない方がいいぞ？」

「いいから聞いて。」

きつとこのまま親の言うままに勉強して、結婚して、多分、私の人生は端から見たら完成されてるかもしれないけど、きつとちっぽけな人生になるんだと思ってた」

ずっと、そんな自分を見て見ぬフリをした。息苦しさを感じても、自分の未来が怖くなくても、知らないって、目を閉じてた。

「このゲームが始まってからはね、最初……もうダメだっと思ってた。」

親はゲームなんかに関われた私に失望するかもしれないし、せつかく歩んできた道からも外れちゃうかもって怖かった。ちっぽけな人生になるんだか思ってたくせにね。けど、1層を攻略して、上手くいって、クリアできるかもって思った」

したら、そんな恐怖も、何もかもが吹き飛んだ。

「自分で、自分の道を開けたことが嬉しかったのかな。そうしたらもう、リアルに戻って自分がどうなるのか、知りたくて。」

こんなゲームになんか負けたくなくなって、絶対にクリアしてやるって、思ったの。攻略していく度にその想いは強くなっていった」

「そうして、今のお前がいる。ってか」

「うん」

「……どうしてこう、エリートコース歩んでる奴ってのは面倒なのが多いのかね」

「え？」

「俺の知り合い……まあ、入ってた部活の部長にな、お前みたいなのがいたんだよ。つつても、言っちゃ悪いが、アスナよりも遥かに完成されてるような奴だ。」

誰よりも正しくあろうとして、嘘を許さない。そいつもぼっちでな、そんな世界を変えてみせるとか言う奴だ。つっても何をやらせても一番取れるような奴だ。できないことがない」

「……そう、なんだ」

「そいつは独り暮らししててな。親の敷いたレールを完全に走るの嫌らしい。そのくせ、そいつを更に凄くしたかのような姉のことは追っかけて、姉さん姉さんってうるさい奴だ。でも、正しくあろうとして、その言葉に真っ直ぐで……とにかく、面倒な奴ではあつたけどな」

語るハチマンくんは、どこか誇らしげだった。

きつと、彼にとつて重要な人なんだろうなって思わせるくらいには、感情が伝わってきた。

「まあ、そういう奴もいるんだ。俺にはわからない世界だが、俺からみればそいつくらい凄いことをお前もやってる。お前は“アスナ”だ、こういう評価は“アスナ”のもの

で、リアルにまで向かわせる必要はない。自分の道を自分で開けて嬉しく感じれたなら、アスナであることを認めとけよ。何も振り返れって言つてない。

立ち止まって左右見るくらい誰も文句なんて言わないだろうよ」

私は、私。結城明日奈だけど、結城明日奈じゃなくて、ここにいるのはプレイヤーのアスナ。

結城明日奈ができなかったことを、アスナは先にできた。そんな私を私が見てあげなくて、誰が私を見てくれるっていうのだろう。

「持てる手札を切った人間は、なんであれ認められるべきだ。

まあ、あれだ。……よく頑張ってるよ、お前は。

なんだこれ、俺のキャラじゃねえ……」

頭を抱えていきなり俯くハチマンくん。

どうしてだろう。どうして彼の言葉はこんなにもすんなり入ってくるのだろう。さっきの冷たい言葉も、怒鳴った声も、今の話も……なんで、こんな……

「……おい、アスナ？」

「え？」

「あー、良かった。もし泣いてたり怒ってたらどうしようかと思った」

「……もう、なんかいろいろ台無しだよ」

「いいんだよ、こういうのは俺のキャラじゃない」

思わず笑ってしまった。ハチマンくんは、凄く捻くれてる。でも、だからこそ真っ直ぐ人を見てるのかもしれない。

こんな風に声をかけられたかったのかな、私。

「そもそも、お前も充分このゲーム楽しんでるだろ。

クリスマスだかなんだかで女プレイヤーと集まりがあるとか言ってただろ？」

「そ、それは……」

「……ま、そういうことだ。この際何か気になってたこともやってみればいい。クリアっていう最終目標はそう簡単に折れないだろ。状況が状況だしな。」

このゲームをリアルだなんて認めないけど、プレイヤーとして存在してる以上、やったもん勝ちだ」

「もし、何か手伝って欲しいものがあつたらハチマンくんは協力してくれる?」

「断固拒否する」

「えー……」

「……俺がいた部活はな、餌を欲する人間に餌の取り方を教える。っていう活動をする部活だった。」

俺が動きたいと思った時に、できること限定で、餌の取り方くらいなら教えてやるよ」

「……ちよつとまだ不満が残るけど、良しとします」

なんだか心の内が軽くなったみたい。こんなに長く人と話したの久しぶりだし、こんなに自分のことを話したのも久しぶり。

ゲームクリアもできてないし、解決した。つてよりは解消してもらったって言葉が当てはまる。けど、それでも心は軽くなって、同時に私はこのハチマンという人の本当の姿を知ってみたくなった。

捻くれた先の、彼の本当の姿を見てみたい。

「……なんだよ」

「ううん。さて、攻略を再開しましょうっか、ハチくん？」

「は？　なにそれ」

「ハチマンくんてちよつと長かったから短くしてみたの。どう？」

「どうって……はあ、好きにしろ」

諦め良く大きなため息を吐いて、ハチマンくん——ハチくんは私から大きく目をそらした。

これは私からの宣戦布告。いつかきつと、彼がどんな人かをも攻略してみせる。つていう宣戦布告。

「それでだけど——」

久方ぶりに作ってるって意識しない笑顔で、私は彼に作戦を提案したのだった。

Episode 4, part 6

— side 八幡 —

「でね、ハチくん」

アスナは先ほどとはずいぶん変わって楽しそうにいろいろ話している。名前の呼び方に関しては一言申したいものはあるんだが、まあ……とりあえず終わったとしよう。

しかし凄いなハチマンパワー。こんな説教じみたことを言っても真面目に通るとは。

「ヒキタニまじきもいんだけどー」とか「あいつ何様のつもりだよ」とか言われるのが常なのにな。こうも違うのか。

……やつぱりキャラじゃないからもうやりたくはないけどな。今回はあまりにもアスナの様子がおかしかつたから八幡物申す。つてやったけど。

自分の心の内を話すつてのは思ったより度胸がいるもんだな。話すと確かに幾分かすつきりするが……

「……まあ、あいつらとの予行演習みたいなもんだつたつてことで」

「ん？ 何か言った？」

「独り言だから気にしないでくれ。で、だ。お前が落ち着いたから言うが、あのボスは正攻法じゃ倒れない。あれだけ攻撃してそれでも生きてたからな」

「うん」

「ゲームでの経験で言うなら頭を潰すとかが可能性としては高いか」

「それは二つ同時に？」

「そこはどれが正解か怪しい。まあ、どっちも潰して損はないだろうけどな。つーわけで、その方向でやってみるか」

「わかった」

そんなわけで改めてボス部屋へ入っていく。
……おいアスナ、さつきよりなんか近くね？

「アスナ」

「なに？」

「近い、離れろ。俺はそうやって近寄られるのは苦手だ」

「却下します。今はパーティ組んでる最中なんだから」

……本当にどうしたんだこいつ。いちいち態度が変わりすぎて女まじ怖い。微妙にトラウマ刺激されるわ。

「じゃ、俺右から行くわ」

「わかった。私は左ね」

同時に駆け出して、俺は刀を抜いた。アスナもレイピアを構えてボス越しに俺と視線が合う。

「行くよ、ハチくん！」

「合図はお前に任せる。好きなタイミングでいい」

「うんっ！　せーのっ！」

俺の刀とアスナのレイピアがボスの頭に直撃して、お互いの位置が交差する。

振り返ればボスは消滅していく最中で、どうやら俺達の考えは当たっていたようだった。

「さつきまでの苦労はなんだったんだかな」

「うー……悪かったわね」

「いや、別にそういうつもりで言ってるよ」

ボスが守っていた扉が開かれて、そこから本当のダンジョンが始まる。

実を言えばこれはNPCからのクエストであり、綺麗な山々は中腹から火山へ変わり果てて、村へ時おり災害を振り撒く。その元凶である火山のモンスターを駆除してくれというクエストで、そのボスモンスターの状況限定で落とす部位破壊ドロップがお求めの物だ。

「いやあ、バーチャルってすげえ」

「どうしたのよいきなり」

扉から出るとマグマが蠢く火山となっていた。暑さを感じさせないものの、正直見るだけで精神的には暑くなってきた気がする。

「だって見てみるよ、マグマだぞ。普通こんなところ来たらどうにかなっちゃう」

「それは……確かにそうかも」

モンスターも急が変わって硬そうな甲羅を背負ってたり、どう考えても炎系です！
って言わんばかりの見た目が変わり、スリップダメージとかいろいろ警戒しなきゃいけないさそうだと俺はため息を吐いた。

「めんどくさそうだな……」

「そうね、けど大丈夫よ。私達なら」

「……お前、熱でもあるのか？」

「なんでそうなるのよ！」

いきなりそんなことを言うなよ。びっくりして顔そらして以降顔見れなくなっちゃうだろ。

「……でもね、さつきと違ってこうやってパーティを組んで戦って、凄く楽しいなって素直に思える。」

今まではそう思っちゃいけないって思ってたんだけどね」

「そりゃ良かった」

そう言われれば多少無理してでも捲し立てた甲斐があったってもんだ。

……まあ、俺はまだ卒業できてないからな、奉仕部にいるしゲーム内で問題解消してもバチは当たらないだろ。というキャリアルに戻ったら雪ノ下に恩賞を求めるまでである。……フルボッコにされそうだが。

「さて、そろそろ行くぞ」

「うん」

言って、それなりの速さで俺達は駆け出した。キリトに比べて足の速さは俺もアスナ

も速いから結構な敵をスルーしていく。

別にレベルは足りてるしな、どっちも。

「ねえハチくん」

「あ？」

「ハチくんは、この世界を楽しんでるの？」

「……それなりにはな。リアルなことはリアルに戻ってから考えることにした。こつちを解決するまで先送りだ」

「そうだよね。うん、私もハチくんみたいに考えようかなって思う」

「あまり褒められた話ではないな、それは」

「いいの。私がハチくんみたいに考えようって思ったただけなんだから。これは私が決め

たことだからハチくんにも何も言わせないから」

「……そうかよ」

恥ずかしくない。恥ずかしくなんてないからな。

くっそ、やはりこの世界での俺への評価はいろいろ間違え過ぎだろ。

Episode 4, part 7

「で、こいつが件のボスモンスターか」

火山の山頂にて、二つの頭を持って全身を黒い鱗で覆って、結構な大きさをした龍は口から小さな火の息を出しながら俺とアスナを見つめた。もういかにもつてくらしいのモンスターらしきで、かえってなんかホツとする。

「リズが言ってたのって、顎のあれかな」

「だろうな」

龍の顎にはそれぞれ金色の牙？ のような物が付いていた。

わかりやすく光っていて、これまたいかにもな部位破壊箇所だった。

「どうするっ？」

「とりあえずダメージを与えましょ。それで、私でもハチくんでも、行けそうなタイミン
グで声をかけてお互いに合わせる」

「ずいぶん大雑把な上にハードな要求をしてくるな」

「でも、できるでしょ？ 元々ハチくんの強さは信頼してるんだから」

「不本意ながら四強だなんて呼ばれてるからな」

「うん。でも、今はハチくんを信頼してるから。」

もつと簡単に行くと思う」

「……俺がこうなのは、この世界——このゲームの中だけだからな。本来こんなに仕事
はしないぞ」

やりづらい。こつもズバズバ言われると返答に困る。

俺のコミュ力じゃ今のこいつは手に余る。だからか、さっきの言葉はどちらかと言うと俺に言い聞かせるように言った。

こつちでもリアルでも、俺は愚かな勘違いをしないと決めている。

「仮にそうだとしても、だよ」

「——俺、やっぱりお前との相性は良くないみたいだわ」

「ふふっ、そう?」

「無駄口叩くのは終わりだ。行くぞ」

これ以上のやり取りは俺に多大なダメージを与える気がしてならないからか、俺は先行してボスへと斬りかかっていた。

さすがに一つのフィールドを丸々奪うボスだ。体力も多いし、二つの口から吐く炎の息はもちろん、地面から炎の柱を出したり巨体による物理攻撃も多い。何より案外素早い上に空とぶのは許せない。

こつちにはそんな便利な機能ないんだよ。

”抜刀術”の試し切りには良さそうだがな」

アスナがいるにも関わらず口走って、首を横に振った。

……まあ、口外するなって言えば今のアスナなら見せても良さそうではあるが。今回のアスナとのいざこざの発端でもあるし……あー、人間関係ってこういうとき本当にめんどくせえ。

「ちよつとハチくん！」

「あ、悪い。見逃した」

「もう……」

ひとまずは部位破壊に集中するか。また閃光様を怒らせても面倒だしな。

「そろそろよ」

一太刀入れて横へずれる。俺のいたそこには炎の柱が出ていて、その向こうではアスナが走り出すのが見えた。

「フラッシュング・ペネトレイターー！」

細剣最上位のソードスキルが発動して、アスナは文字通りボスを貫通しつつ俺の隣へとやってきた。

一定以上のダメージが入ったからか、ボスは軽く体勢を崩して中ダウンしている。

「ハチくん！」

「あいよ」

走りつつ、ソードスキルのためを作る。そして顎を目掛けて刀を振りかぶって――

「せーのっ！」

「これで終いだ」

ガキン。と何かが破壊した音がして、地面に二つの尖った牙のようなものが落ちる。
素早く二つとも拾って俺達は一旦距離を離れた。

「できた？」

「問題ないぞ」

素材の名前に逆鱗なんて付いてるけど、おい、これのどこが鱗なんだよ。
どう考えても牙だろうが。

「——！」

「うわ、怒ってる……？」

「そりや、文字通り龍の逆鱗に触れたからな」

黒い鱗は体内から赤くなるように変色して、目は光り息は荒い。

呼応するかのように周りのマグマも燃え上がって、よくある狩りゲーとかの発狂状態のようになったらしい。

「……アスナ」

「どうしたの、ハチくん」

「一応、今回の発端だからな。お前がこれを誰にも言わないということ前提で、俺が下位層にいた理由を教えてやる」

「え？」

刀を納刀して、身体を斜に構える。

装備的にも問題ないし、モンスターのにも問題ない。

このランクの、この体力のモンスターくらい一回のソードスキルで沈められないならいろいろ修正する必要もあるしな。

「詳しくはまだ言いたくないから、とりあえず見せるだけな。一回きりだ、よく見とけ」
準備は整った。さて、どれくらいのダメージが出てくれるか、試すとするか。

「――雷華」

放つのは、抜刀術の上位ソードスキル。

初期ソードスキルの木枯は自身の敏捷性が韜走りに乗ってダメージも上げるものである。

これはその上位版のもので、性質としてはアスナのフラッシング・ペネトレーターに近い。助走をつけて密着して、そのまま一息に斬り抜く。

敏捷性をそのまま貫通力に乗せて貫くフラッシング・ペネトレーターとは違いむしろ防御が強い敵にはまるで使えないが、こうやって肌を晒してる相手ならむしろ効果的で

「……なに、それ」

アスナの呆けた声が聞こえる。

それはそうだろう。俺がこれだけ大きなボスを刀で真つ二つに両断したわけだからな。

雷華は、攻撃の際に武器の切れ味を上げる性質もあって、助走した際の補正と敏捷性がダメージに乗るからか普通にダメージが通る相手なら上位スキルの括りでもトップの単発ダメージが出せるだろうと自負している。

ここまで大きなボスをも真つ二つにできるならそれはずいぶんいい意味で調整できそうだな。

—— side アスナ ——

目の前で起きた光景に私は理解が及ばなかった。

一発で倒れたのはまだ理解できる。私にだって状況を整えればできないことじゃない

いから。でも、あれほどの大きな龍が真つ二つになるってどういうこと？

「ま、こういうわけだ」

息を吐きながら肩の力を抜いてハチくんはこつちへ振り返った。

クエストクリアの為のアイテムはもう拾ったみたいで

ゆつくりこつちへ歩いてくる。

「まさか……」

これに近いことは経験があった。50層の、団長が神聖剣を発動させた時にも同じように理解が及ばなかった。

——見たことないソードスキル、驚くような性能、それはつまり——

「答えは言わねえぞ」

私の顔に出てたのか、ハチくんは先にそれだけ言って刀を鞘に戻した。

「ずるいよ、ハチくん」

「知るか」

こんなやり取りでも楽しくて、私はくすりと笑った。

私がこういう反応をすると、決まってハチくんは嫌そうな顔をする。多分、これはハチくんの本質的なもののかな？

人との距離が近すぎるのをあまり好まないというか、どうしても警戒してしまう感じ。団長やエギルさん達と上手く話せてるのはきつと、あの人達が大人でそういった距離の取り方が上手だから。

……キリトくんや月夜の黒猫団のみんななどの付き合いが多いのは、きつとハチくんの中で大きな存在になってるから。本人は否定しそうだけど。

——なんだか、凄くモヤモヤする。

「そんな風に言わないでよ——って、え？」

不意に、私の周りをポリゴンが包んだ。

火山の色も混ざった少し赤くて、結晶みたいなそれは、瞬く間に消滅して――

「――きれい」

ボスエリアは山頂だった。

火山の影響で雲や灰に覆われて見えなかった所が晴れて、山頂から見える景色はいつだったか、両親に連れられて行った山から見えた景色みたいだった。

下の、まだ火山になってた部分もポリゴンになって、結晶が消えていくと同時に綺麗な風景が変わる。

「……こういうのは、ゲームだからこそ見れる景色だな。唯一、このクソゲーで評価できるところだ」

そう言って下を見るハチくんの顔は人と話してる時からは考えられないほど穏やかで、目も不思議と濁ってるように見えなかった。

……また、モヤモヤした。

「きつと、これを綺麗って思えたのはハチくと話せたから、かな」

「やめろ恥ずかしい。お前の受け取り方が変わったんだよ」

悔しいから、私はハチくんが困ったような表情になるであろう言葉をわざわざ選らんで言ってみた。

……できれば、私と話すときもキリトくんや黒猫団のみんなと話してる時のような顔でいて欲しい。本音を言えば、今こうして景色を見てる時のような顔でいて欲しい。でも、わかってる。私にはまだ無理。

ハチくんの人へ引く線は溝になって、なるべく近寄らせないようにしてるから、いきなり飛んで行こうものならその溝に叩き落とされる。ついさつきまでハチくんに対して嫌な女だった私には、いきなりは絶対に無理。

「——ねえ、ハチくん」

「なんだ、どうしたんだよ」

「……えっと、やっぱりなんでもない」

「あ、そう。さっきのソードスキルについては明かさなからな」

「そんなのじゃないわよ」

だから、橋をかけていこう。ちよつとずつ、ちよつとずつ橋をかけて溝を渡って行く。

——もしも、キミが来る途中に言っていた、欲しかったと言った”本物”。それがキミにとってそんなにも望むものなら、私がその”本物”に代われないかな。それが、その”本物”に加えてもらえたりしないのかな。

そうやって彼にいつか尋ねることを目標にして、私はハチくんへと笑いかけたのだ。た。

Episode 4, part 8

「うす」

「いらっしやい、ハチマン」

あれから三日後、俺はリズベットの店を訪れていた。アイテムを渡して刀を頼んで、出来上がりのメールを受けて来たわけである。

「頼まれてたもの、できたわよ。注文通りの出来になったと思う」

渡された刀のステータスを目にする。確かに雷切丸のステータスより遥かに高く、魔剣クラスに匹敵する性能だ。

「上出来だ。いくらだ？」

「これくらいでいいわ」

指定された金額は予想よりも遥かに低いもの。おいおい、なんでこんな安いんだよ。

「後で増額とかされても払えないからな？」

「そんなことしないわよ。それとは別に要求があるから」

「なるほどな……で、なんだ？　礼はする。多少の難易度のものなら取ってきてやるぞ」

「それもありがたいんだけど、私が聞きたいのはキリトのことよ。あんた、友達なんでしょ？」

「まあ、フレンドではあるな。聞きたいって、なにを？」

それからしばらくの間リズベットに一方的にキリトのことを聞かれた。サチとは付き合っているのか、他の女の子との関係はどうなのか、とか。

なんで俺は恋する女の話の話を聞いているんだろうな。やはり俺の役目ではないだろ、これ。

「なるほどね……よし、ハチマン。これからも私に協力してくれるわよね？」

「別に構わないが……お前、リアルに戻ってもキリトと会うつもりでいるのか？」

「え？ 当たり前じゃない。キリトだけじゃないわよ、アスナ達とだって会うつもりよ？」

「……そうか」

そういう考えの奴もまあ、いるのか。

「……って、ハチマンは違うの？」

「当たり前だ。リアルとこれは違うだろ。リアルに戻ったらおしまいだ」

だからこそその”ハチマン”の評価であって、俺も俺らしくなく動けてる。

リアルに戻れば俺はまた”八幡”だ。そうなることに不満はないし、そうなりたいからこそこうして攻略をしている。

「そんなの、寂しいじゃない。私達、みんな協力してクリアを目指してるのよ？」

そりゃ、私は戦えないけど……それでも——」

「必ずしも、リアルとここが同じとは限らないだろ。」

今受けてる評価はこの”ハチマン”のものであって、リアルの俺とは別だ」

「そんなことないわよ。だって、クリアしたとき、それはみんなの活躍よ。」

最前線に立ってたハチマンだって、リアルのハチマンだって評価されるに決まってるじゃない。

キリトも言ってたけどね、ここはリアルではなくてゲームなんだけど、でもここに今生きている以上、私達にとってここは今リアルなんだって」

「あいつ、そんなこと言ってたんだな」

らしいと言えばらしいか。

キリトは皮肉とか抜きに一生懸命だ。真面目にこのゲームをクリアしようとするし、このゲームそのものを楽しんでもいる。生きていると言った方がわかりやすいか。だから、あいつの周りには自然と人が集まる。

葉山とかとは違う、あいつは本物だ。

「……らしいと言えばらしいけどな」

それが俺に当てはまるかと言えればそれはノーだ。

あいつはリアルそのままやっていられるのかもしれないが俺はリアルでこんなことやっても同じ評価は得られないし、そもそもやる場面がない。

カースト最下位つてのはそういうものだ。

「目、なんか凄い濁ってるけど？」

「余計なお世話だ。とにかく、俺はお前らほどこのゲームに入れ込んでねえよ」

「ふうん……」

そう言つて俺を見るリズベットの目はなんとなく半信半疑っぽそうな、なんだあれ、なんでそんないかにも「私知ってるけど？」みたいな目でこつち見てんの？

「なるほど、黒猫団の人から聞いた通りね。顔に出てることと、言ってることが合つてない。気づいてる？」

「……いや、意味がわからないんだが」

「言葉通りの意味よ。そういうこと言ってるくせに、ずいぶん悲しそうな顔してるけど？」

「……まさか、本気で気づいてないの？」

「さつきから何を言ってるか理解できないぞ」

悲しそうな顔？ 何が悲しいんだ。当たり前のことを考えてるだけであって、悲しくなる要素なんてないだろうに。

「……なるほどね。みんなにお土産話ができたかもしれないわね。

まあいいわ、ハチマン。キリトのこととか聞きたいから私ともフレンドになつて」

「それは構わんど。格安でもらつちまつたからな。それくらい受けるし、いくらかは依頼してくれば素材取りくらいはやってやるよ」

「ありがと。と、その刀の名前だけ——」

焰雷。ほのいかずちと読むそうだ。ずいぶんこれまた強そうな単語を並べた名前だな……

「振りやすさ、切れ味の良さに重きを置いただけあつて火力も文句なしに出せるはずよ。でも、くれぐれも長く斬り合つたりしたらダメ。手数少なく斬るようにして。じゃない

と壊れるわ」

「わかった。それなら俺に合ってるから問題ない。特にこれからは斬り合うとかはする気もないからな」

抜刀術。あれは捨て身に近いレベルで防御を捨てて代わりに攻撃力を得る物だ。

他のユニークスキルがどんなのかは知らないが、あれは少なくとも手数とかそういうのじゃなく、一太刀。

問答無用で斬って捨てる。だからとことんまで切れ味が高く、その代わりに脆かろうとも問題はない。

「礼を言う、リズベット。ゲームクリアまで愛用させてもらう」

ストレージから装備して、俺の腰に重みが増した。

青い装飾の鞆に、柄の布も青みのある黒だ。俺の衣装とも相性がいい。雷切丸よりも少し軽くなったそれを見て、思わず俺は笑みを浮かべたのだった。

Episode 4, part 9

— side other —

「リズ、来たわよ」

ハチマンが焔雷を手にしてから約一週間後、アスナはリズベットの店を訪れていた。店内にはサチ、シリカもおり、二人はアスナにそれぞれ挨拶を交わした。

「よし、来たわね。じゃあ始めるわよ」

「ち、ちよつと待つてリズ。私、何の集まりか聞いてないんだけど……」

困惑するアスナをよそに、わりと睨み合っている印象の強いリズベットとサチは互いの顔を見合わせてため息を吐いた。

「ここにいるメンバーでわかりそうなものだけど……」

「……キリトくん？」

言われて、アスナはリズベットとサチの想い人を思い浮かべる。顔立ちがどこか中性的で、このゲームにおける自分と同じ位置にいる少年。

シリカも彼には尊敬するプレイヤーとして懐いているようではあるので、この解答は間違いではないと思われる。

「それもあるけど、それじゃあんたを呼んだ理由にならないでしょ。

それと、ハチマンのことよ」

「ハチくん？ え、どうして……？」

リズベットとサチはキリトに想いを寄せている。その理由は聞いているし、わかっている。

そこで何故八幡の名前が呼ばれたのかわからないようで、アスナはもう一度集まったメンバーを見回した。

「あ、あの……アスナさん？」

一人、該当者がいた。彼を兄のように慕って、実際にお兄さんと呼んでいる少女。彼女が八幡と関わるきっかけや、八幡も彼女への態度は比較的柔らかく、まさかと言った様子でアスナはシリカを見つめた。

同時に、得体の知れない焦燥が自分の中に生まれる。

「あの、わ、私……ハチマンお兄さんのことは好きですけど、お二人の様な好きとは違うと思います……」

あくまで彼女は八幡に対し、兄のように慕っているだけだと少し俯きがちに答える。サチはふと苦笑いしてその言葉を肯定した。

「ハチマン本人も、シリカに対してお兄さんしてるだけみたいだからね。あれで、面倒見はいいみたいだし」

「あの腐った目の男がねえ……って違う。ハチマンについてはあんたよアスナ。あんた、ハチマンからネットクレス貰ったんでしょ？」

「ええっ！」

先程の言葉はどこへ行つたやら。シリカが思わず身を乗り出してアスナを見つめる。リズベツトとサチはシリカの言葉がいつ変わるのかわからないような所にあるのだろうと察したのか軽く苦笑していた。

「そ、それは……あのクエストのクリア報酬だったのよ。で、ハチくん、自分にはいらぬものだからやるって言われて。」

……いらぬなら売りに行くってすぐ言われたから他意はないと思うわ……」

対して顔を赤くしていたアスナだが、その時のことを思い出していたのか段々と恨みがましい声になって、最後にはため息を吐いた。

ハチマンらしいとサチは肩を竦めて、リズベツトは先日ものやり取りを思い出したのか呆れたようにため息を吐いていた。

「キリトもなんだけどね、あの二人……どうしてかこう、人と距離をちゃんと置こうとするんだよね」

「キリトのあれは人との距離感がわからないだけで、結構強引に行けば案外あっさりじゃない」

「それは、そうだけど……」

「ハチマンのアレはもう病気よ。だからあんた達だつて手を焼いてるんじゃないの?」

そうなのであった。キリトはリズベットの言う通り、思いきり真正面から行けばしかるべき反応と、あっさり素の姿を見せる。なんらかの理由で人との距離感が掴めず上手く話せなかっただけで、黒猫団と関わることでキリト自身はかなり変わりつつあった。

一方ハチマンは頑なに受け入れを拒む。エギルやヒースクリフ、クラインや黒猫団の面々とも話すし、最近は野良でパーティを組む姿も見られるそうだが、一人で活動する方針は一切変えてはいない。

「この前ね、あいつに刀渡したんだけど、ちよつと話したのよ。」

あいつ、恐ろしいくらい割り切ってるのね。リアルに戻ればこの関係は全ておしまい。みたいなこと言われちゃってね」

「……そんな」

シリカの眉尻が下がる。彼を兄のように慕っているシリカのことだから、リアルに戻れてもお礼くらいいいにいきたかったのだろう。

アスナも、彼からリアルの自身と今の自分との乖離を説かれはしたものの、まさか八幡がそこまで割り切ってるとは思わなかったようで驚きを隠せていなかった。

「リアルとこつちでは違うって。リアルの自分はああも積極的でなく、人からこんな評価も貰えないって言った。」

……しかもね、苦しそうなものよいちいち。本人は自分がそんな表情をしてることすら気づいてないみたいだけど」

過剰な感情演出からだろうか、本来なら無表情や引き攣った笑みを浮かべて話す八幡の顔は、苦しそうに歪んでいるようで、リズベットは首を傾げていた。

「我慢してるとかじゃないのよね。本気で気づいてない。ああまであんなに」

彼のリアルでの経験を知らない彼女らは、一様にして首を傾げた。

「で、それをキリトやケイタに言っちゃったわけよ。

したら今日無理矢理にでも誘って迷宮攻略に行つたみたいよ。サチ、何か聞いてない？」

「……まさか、軽いボス攻略って……」

「ハチマンのことでしょうね」

はあ、とリズベットはため息を吐いて肩を竦めた。

ハチマンと付き合いこそ短いものの、彼の言葉や態度には思うところがあるのだろ

う。

「キリトが言ってたけど、こういう命がけのゲームだからこそ人の本質が見えやすいって。こんな状況で、いちいちリアルとゲーム内を完全に離して考えれる余裕なんてないじゃない。」

”きつと、ハチマンはリアルでもなんだかんだで面倒事を先頭に立って解決してたんだと思う” っつのはキリト談ね」

「リズベット、ずいぶんキリトと会ってたみたいだけど……」

「ごめんなさいね、ここ一週間くらい武器のメンテとかでうちに来てたのよ、キリト。だからいろいろ話しちゃったのよね？」

「……」

無言でバチバチ鳴る火花にシリカはそつとアスナの隣へ来ていた。

そんな彼女を見つめながらアスナは今頃キリト達に連行されているであろう少年に

想いを馳せた。

「……本物が欲しい、か」

八幡の言葉は、ゲームのことではなかった。自分との会話のやり取りさえも、リアルなことだっただろう。

「ねえ」

「どうかしました？ アスナさん」

ぼつりとアスナが言葉を発して、シリカ及び全員の視線がアスナに向いた。

「きつと、ハチくんのこととはリアルに戻らないとわからないわ。だから、これは先送りにしでしょ」

本人も言っていた。自分のことは先送りだと。このゲームをクリアすることが先だ

と。

それは、大いに領けるところである。

「だから、クリアするまでにハチくんに教えてあげるの。この結び付きはリアルに戻ったってなくならないって。ね？」

にこりとシリカに笑いかけると、シリカも大きく頷いていた。

「はいっ！ 私、リアルに戻ってもハチマンお兄さんに会いたいです。皆さんとも一緒にいたいです！」

「そうと決まれば話は早いわね。私達は今から同盟よ。そんであんたらはわからないけど、私とサチはライバルでもある。」

キリト&ハチマン攻略組、結成ね」

「ハチマン攻略はキリト達も入りそうだけど……」

「したらそれ足掛かりで更にキリトにも近づけばいいのよ」

あんまりな物言いにさすがのサチも苦笑いだが、この攻略組の結成には誰も何も言わなかった。

「……ハチくん」

——私のもっと、キミが知りたい。

言葉には出さずに、今頃迷宮で面倒そうにしているだろう八幡を思い浮かべて、アスナはそつと天井を見上げていた。

Episode 4, Fin.

E p i s o d e 5 , p a r t 1

「――諸君、お疲れ様」

ボスが倒れ、ヒースクリフが全員に労いの言葉をかける。

今回ラストアタックをしたらしいプレイヤーが嬉しそうに装備を変更していた。

俺と言えば、暇人よろしく。今回は取り巻きの雑魚の排除に回っていた。

「うへー、次も同じようなフロアならあまりやりたくねえなあ……」

隣に立つクラインが心底嫌そうなため息を吐いた。

言わんとすることは理解できる。どうにもこの65層はホラーフロアらしく、階層全体が暗くどこか気色悪い。ボスに関してはここファンタジーだろおいつてレベルで、どういうわけか和風な古井戸に薄暗い雑木林。さすがに黒髪で完全な白服ではなかったが、どつかで見たような女の幽霊で、ひたすらに精神攻撃メインだった。いや、精神攻撃なんてないんだが……

こう、なんつーの？　ちっちゃい女が悲鳴をあげながら殴りかかってきたり、倒すと怨嗟の声をあげながら消えてったり。とにかく、疲れた……

「今回はヒースクリフに感謝、だな……」

なんでも、四強ばかりが先頭に立つのではなく、他のプレイヤーも先頭に立つことで更なる攻略組の人数を集めようとのことらしい。

65層ともなればあまり俺達を看板にもできないしな。むしろ俺達抜きでもできるくらいには思っただけで貰えないと困る。

ちなみにそれを言い出したらしい副団長様はどっか行ったらしい。どっかってなんだよどっかって。

キリトやサチもいないし、今回、なんだってんだ？

「うす」

「来たか、ハチマン君」

66階層が解放されて数日か経った。残念ながら66層もホラーエリア（誰が名付けたかそう呼ばれてるらしい）で、ややどんよりした心持ちの中、俺は55層にある血盟騎士団のホームへと足を運んでいた。

至急来い、とのヒースクリフ直々のメールだったのもあって、何かあったのかと来てみれば、団長室もホームも特に慌ただしさは感じられなかった。

「今頃、リアルでは桜が散った頃かね」

「さてな。桜なんてずいぶん見てないからわかんねえよ。で、用件はなんだ？」

月にして五月。余裕で五月病にでもなりたいんだが、ここはそうもいかない。……四月に小町が同じ年になっちまったってのに、今までよりショックが少なかったのは、感覚が麻痺ってきたからか。

攻略はだいぶハイペースでは進んでいる。血盟騎士団やらの大手ギルドによる大部隊、月夜の黒猫団のような中規模ギルドによる精鋭攻略、俺含むソロプレイヤー達の小

回りを利かせた攻略。恐ろしいくらい順調に進んでいるせいか、最近、一部プレイヤーのゲームへの順応化が目立つようになってきた。

「先日、軍から連絡があつてね。残っていた攻略組、及び育てていた者を攻略組として最前線へ加わらせたいとのことだそうだ」

「へえ、中、下層の維持に努めてただけじゃなかつたんだな」

人数が増えるのは悪いことじゃない。その分早く進むし、俺も楽ができるからな。

「……しかし、なんでそんなことを俺に？」

「進言されてしまつてね。同じ四強にある”影纏い”殿にも伝えるべきだと。」

キリト君にも伝えたとも。彼は今、下位層の圏内で起きたPK——殺人事件を追っているそうだね。たまたま訪れたレストランで黒猫団のタンクの女の子……サチ君だったかな？ 彼女と桃色の髪の毛の女の子を連れていたよ」

なるほど、だからいないのか。サチと……おそらくリズベットでも連れてるのか。くそ、リア充め……爆発しろ。

「と言うか、進言てなんだよ、進言て」

「血盟騎士団にも、影纏いを目標にしているプレイヤーは結構多い。君は不本意かもしれないが、確実に君の強さは他のプレイヤーに影響を与えているんだよ」

「恐ろしい話だな、全く」

「人は結局のところ、行動によってその人を評価することが多い。君の物言いも含め、その行動はそれだけ人に評価され、影響を与えているのだよ」

いつだったか、似たような話をリアルでもした気がする。

まさか、こんな形でまたこの話題になるとは思ってたが。

「半分を超えて、クリアも見えてくるようになった。」

だからこそ焦りや油断も生まれてくる。そしてその中でみんなこのゲームを生きている。したらこの世界に対して溶け込んでしまう。わかってやれない話でもないだろう?」

こいつ、時おり偉そうになるよな。ちゃんと団長としての立場を考えてるのか、他のプレイヤーとは違う……どうもロールしている感じが拭えないんだよな、ヒースクリフは。それだけ余裕があるつてのは凄いが、逆を返せばこれくらいで動じないままでいられる理由や経験でもあるのかと疑りたくもなる。

……ま、いいけどな。クリアに貢献してくれば文句はないさ。

どうせリアルに戻れば会うこともない。

「そんな偉そうな物言いするつもりはねえよ。言い分も理解できなくはない。する気はないけどな。」

軍のことはわかった。用件はそれだけか?」

「ああ。もう一つ、もしアスナ君に会うことがあればよろしく頼む」

「？ よろしくも何もないだろ。別に」

らしくなく、いまいち要領を得ない物言いのヒースクリフに首を傾げ、俺は血盟騎士団のホームを後にした。

あいつの言っていたことがわかるのは、その数日後のことだった。

Episode 5, part 2

「……はー、気持ち悪いな」

迷宮を焰雷を片手に歩き回る。あれだ、さしずめお化け屋敷って言ったところか。さすがはホラーフロア。

正直、腰に焰雷がなかったらとても攻略したくねえ。いつぞやのボス階層で出たゾンビはまだいいんだ。

海外のモンスターってのは比較的びっくりとか、グロテスクが売りなもんだからな。けどなんだよこの和風フロア。和製ホラーってのは海外でもドン引きされるような出来なんだからな？

こりや、キリトやサチは攻略が嫌で下の層の事件に首突っ込んでるのかもな。

「つと、いきなり出てくるんじゃないやねえよ」

幼女な見た目の口裂けモンスター。気味が悪いわ後味悪いわで、こればかりはぼっち

プレイも過酷に感じる。

「頼むから成仏してくれよ」

抜刀術のソードスキルで沈める。

正直、これを躊躇う理由はもうほとんどない。情報なんてないし、俺に聞きに来ようものなら逃げるし。

快適な攻略の為にはボス戦で使うべきではあるんだが、今回に関してはヒースクリフの意を汲むか。

……別に楽をしたいわけではない。本当だぞ？

前もって今回はよほどがない限り前に来るなど言われたのもあって、大人しくさせてもらおうと言うわけだ。

「……ずいぶん毒されて来たか、俺も」

久しぶりに完全な一人になったせいとか、場所が場所だが小さくため息を吐いた。

ここ最近、本当にらしくなかつたからな。パーティに誘われまくりの日々、一年半も

こうしてゲーム内で命のやり取りをしていれば、嫌が応でも順応してしまうものなのか。以前よりも四強や影纏いの言葉に嫌悪していない俺がいる。肯定する気もないが、受け入れつつある、というのか。まあ、正直に話せばこれまでのトラウマだらけの日々よりもこのS A Oでの時間の方が濃いのは間違いない。……間違いないが、

「だからと言って、あいつらに勝つことは絶対にならない。あり得ない」

奉仕部にいた時間だけはこうなっても明確に思い出せる。

それが、今でも俺の拠り所だ。俺が、俺を保てる理由でもある。

「雪ノ下、由比ヶ浜、俺は……本物が欲しい」

あの時から抱いていた身の丈に合うかもわからない願いは、まだ届けられない。

だから、決して死ぬわけにはいかない。でも、帰らないわけにもいかない。

この世界は、このゲームは本来なら俺の欲しいものが見えたのかもしれない。みんな、俺をハチマンという人間として評価してくれるし、俺も、頼るなんていう滅多にできないことができた。でも、それではだめだ。前には進めない。

あの二人に、あの時に話すはずだった言葉をかけるまで、俺は高校二年の冬休みで止まっている。

例え二人が俺なんて忘れて前に進んでいたとしても、それを知るまでは俺は進めない。比企谷八幡は、どんなに捻くれようとも雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣にははつきりと言わなくてはいけないことがある。

結局のところ、八幡はあの時に止まったままで、ハチマンだけが不相应に前に進んでいる。だから、俺はあいつらのようにリアルまで込みで仲良くしようなんて考えられない。まあ、リアルと同じや評価が違うのも事実だが。リアルで会う気がないからこそ、このコミュ力があるとも言える。

「……とつととクリアしないとな」

少し、気持ち悪さが紛れた。

俺がこんな風に考えているなんて知ったらあいつらはなんて思うだろうか。

雪ノ下は……案外ちゃんと聞いてくれそうだ。あれで真摯な言葉にはちゃんと答えるからな。

由比ヶ浜は、喜びそうだな。尻尾でもブンブン振りそうだ。

「さて、行くか——」

「きやあああああつ！」

気を持ち直して歩き始めようとして、そのタイミングで聞こえた悲鳴に、俺は本気で帰ろうか悩んだのだった。

「で、何やってんのお前」

そちらへ向かえば、いたのはこのところ姿を見せなかった閃光様。地面に座り込んで口裂け幼女に囲まれていた。

一応助けてみれば、まだこちらを睨むようなアスナは「うー」と威嚇したままである。

「ここに遅れを取るほどではないだろ、いくらなんでも」

「……………のよ」

「あ?」

「ダメなのよ、こういうの!」

「……………あー、なるほどな。でもお前、いつだかのボス部屋でのゾンビは大丈夫だったろ?」

「ああいうのは大丈夫なのよ! でもこういうお化け的なのはダメ。無理なのよ」

「……………もしかしてお前、前の階層の攻略もあんまやらなかった理由って……………」

「……………わ、悪かったわね」

どうやらそういうことだったらしい。

攻略組の人員の為に四強を外そうなんて言ったのも建前なんじゃないのか、これじゃ。

「……まあ、いい。俺は行くぞ」

ピコン。とパーティへの勧誘音で足を止められる。
送り主は言わずもがな、アスナだ。

「お前な……」

「攻略はしたいけど、一人はもう嫌なの。お願いハチくん」

「……はあ」

まあ、いいか。今は一人でいると余計なことを考えまくっちゃうしな。
気を紛らわすならパーティ組んでる方が楽か。

「後で飯奢れよ」

……本音を言えば、このホラーフロアは一人だと俺もなかなか苦しいってのがあるから、とりあえずこいつと組んでとつと攻略してしまいたい、というものがあつたりする。

「もういや……」

「俺はお前がもう嫌だつつの」

あれからそれなりに時間が経って、俺はヒースクリフのアスナをよろしく。と言う言葉
葉を思い出していた。

もしかして、こういうことか。

アスナはモンスターが現れる度に軽く悲鳴をあげて、悲鳴をあげて、叫んで、なんなんだこいつは。

ヒースクリフが言っていたのはお守りのことだったのかよ。

「攻略の鬼ともあろう者が、どうしたんだよ」

「無理なものは無理！ ハチくんだって及び腰じゃない！」

「ばっかお前、俺がこういうの大丈夫なわけないだろ」

お前が必要以上に驚いてるから大丈夫なんだ。じゃなかったら今日はもう帰ってる。

ほんとにね、マジで。

「はあ……お前。今回も休んでればいいんじゃない？」

ヒースクリフも他の攻略組育成にやる気を出してるしな」

「だとしても、攻略はしておきたいのよ……」

強情な奴め……

「強情な奴め……」

おつと声に出して言ってしまった。睨むな睨むな。

とは言っても、お前さつきから一步も前に歩こうとしてないじゃん。

「別に、無理なもんは無理でいいだろ。我慢する必要もない。見栄や体裁なんてこんなところじゃあっても意味ないしな」

俺の場合、リアルでも意味あるかわからないけどな。

「ハチくんは、捻くれてるくせに素直だよ、そういうところ」

「一言余計だ。俺は基本的に素直なんだよ。もう仕事したくない。帰りたい」

「——でも、やらなきゃだからやるんでしょ？」

「……別に、そういうわけじゃねえよ」

遠からず、ではあるが。これこそ素直にいう必要もないからな。

だから、俺はニヤニヤと笑うアスナから少し離れた。

こいつ、さつきまでビビりまくりだったくせに。

「あのな、何をどう勘違いしてるか知らないが、俺は自分の為だけに動いてる。

そうやって、さも理解しているかのような物言いは不愉快だ。俺を本当に理解できて人間なんてそういないし、そもそも自分が理解されるような人間でもないことは自負してる。そして、それでいいと思ってるからな」

……少し、言い過ぎたか。らしくない、また感情的になっちまった。

やつぱりここは良くない。今一度はつきりさせなくてはいけない。

——俺が、勘違いしない為にも。

「お前らが欲しいのはハチマンの力だ。俺が四強なんて位置にいるからこそ、こうしてお前らとの関係性が保てる。」

勘違い、しすぎるなよ。アスナ」

ここは仮初めだ。リアルではあってもゲームでしかない。だから、ダメだ。居心地良く感じることはいけない。

何より、こんなところで本物を求めたら、あいつらに申し訳が立たない。

「……勘違いじゃないよ」

「あ?」

「勘違いなわけじゃないじゃない。私、1層からキミと面識あるんだよ?」

別にその頃からこのゲームのトッププレイヤーじゃなかったでしょ、私達。それに……強さだけ求めているなら、私はキミにあんな態度とらなかつた。同じように、どんなことがあってもクリアを目指してる仲間で、私の理解者だって思ったから。だからあの時にハチくんがこの世界をちゃんと生きてるって知って悔しかった。悲しかった。もし強さだけ求めているなら、強いままなんだからこんな気持ちにならないよ。

理解してない? うん。だって、ハチくんのこと何も知らないから」

俺を見つめるアスナから、視線を外すことができなかった。

なんだ、こいつは。こいつは誰だ。つい少し前まで俺に敵意を向けてきた人間が何を言ってる？

「前に、焰雷の素材を取りに行つて、ハチくんとお話したでしょ？

それからね、今までハチくんと話して来たこととか覚えてる限り全部思い出してたの。そうしたら、一つ気づいたんだ。

ハチくん、どうでもいいことには本音とかで話しやすい。それで、自分を含めて大事なことほど本質を隠そうとするの。私との会話でもそう。私がキミに敵意剥き出しの頃はなんでも素直に答えたり話してくれてたよね。それはつまり、私がどうでも良かったから。でも、こうして普通に関わつてると捻くれた物言いが増えるんだよね。それはつまり、多少なりとも気を許してくれてるってことだよな？」

「そんなわけないだろ。どんだけおめでたい性格してるんだよお前は」

「ならハチくんのこと教えてよ。理解してるみたいなのが嫌だったならそんな風にし

たのを謝るから。

だから、ハチくんのこと教えて？ 私はキミのこと知りたいよ。私だけじゃない。クラインさん達やエギルさんもそう。何より、キリトくんや黒猫団のみんなだってハチくんのこと、知りたいと思ってる。ハチくんだって、気づいてるでしょ？ みんなが本気なの」

「……アスナ、もうやめろ」

いけない。これ以上はいけない。

なんだこれは、なんだこいつは。ここまで真正面から俺に向かって来た奴はいたか？ 空気も読まず、スルーもせず。この女は一体なんなんだ。何より、なんで反論ができないんだ、俺は。

「止めない。ねえ、ハチくん。

キミが求めてる”本物”。そこに私達も入ることって、できないのかな——」

——衝動的に、柄を握っていた。抜刀術を発動していなかったのは幸か不幸か。

アスナは急に戦闘体勢に入った俺にすら、変わらぬ佇まいで立っていた。

「次言ってみろ。さすがの俺にも我慢の限界があるぞ」

ふざけるな。俺をよく知りもしない人間が、どうしてこんな偉そうにしている。

アスナ、お前なんて雪ノ下の能力を少し下げて由比ヶ浜のコミュ力を足したある種最強型じゃないか。そんな奴が、俺と関わるのはおかしいだろ。

「ハチくん、リアルとこつちを割り切り過ぎて逆にくつつけちゃってるよ?」

「どういうことだよ、はつきり——」

「あー失礼。そこにいるのは四強の”閃光”殿と”影纏い”殿とお見受けする」

俺の言葉は第三者の声で途切れることとなった。

声のした方を見れば、そこにはそこそこの規模のパーティ。

良さそうな装備に身を包んだ一部隊がいた。

「あなた達、軍の……」

「いかにも。我らは新生した軍の攻略部隊です。

攻略組の四強のうち、二人とお会いできるとは良かった」

今度はアスナが不機嫌そうになる。対して俺はちようど良かった。

「ここらでいつもの調子に戻っておこう。」

「これからは攻略で会うことも増えましょう。」

いずれ、攻略の要は軍へ返り咲きます。と、軽く宣戦布告に参りました」

「つは、なんだって構わねえよ。攻略が捗るなら好きにやってくれ」

「その宣戦布告……だとしても、現在の攻略の要は血盟騎士団です。和を乱すことは許しません」

「ええ、だからいずれ、です」

「……シンカーやキバオウもずいぶん勢いよく出たもんだな。キバオウはともかく、シンカーがそういうった出方をする人間には思えないが」

まあ、数えるくらいしか会ったことないから、実際はこういう奴なのかもしれないが。

「あの二人は関係ありませんよ。主導の方もいずれお会いできるでしょう。では、また」
去っていく軍の一部隊。まったく、完全に水を差された。元の調子に戻れたのは良かったが。

「……ねえ、ハチくん」

「どうしたよ」

「あの人達、どうしてあんなにいい装備持ってたのかな」

「さあな、買ったんじゃねえの？」

「……そう」

「話はいいか？ もう乗らないから俺は帰るぞ」

「私もいいわ。……一人じゃ嫌だし、言いたいことはわりと言えたし。ねえハチくん。私、本気だからね？」

「……あつそ」

俺の後ろを歩くアスナの表情は見えない。が、アスナは俺の表情が見えない。

これでいい。今の俺の表情は、俺本人でもよくわからないものになっているだろうか。

Episode 5, part 3

「……おい、どういうことだこれ」

「えっと、サチに聞いてきちゃった」

あの迷宮攻略から一週間。俺のホームへと何故かアスナが来ていた。

あれだけ論争してたつてのにどういうメンタルしてるんだか……そもそも、俺が一方的に押されてたつてのは知らない。

つーか、なんでホームに来てるんだよ。と思つたらこれだ。

一度だけ、キリトと黒猫団の古株メンバーを招いたことがあつたんだが、それが仇となつたらしい。

「なにお前、ストーカー？」

「酷い！ 違うのよ、今回も真面目な話」

「ここで言え。用件によつてはこのドアを閉めるからな」

ドアを少し開いて、内側と外側で会話を続ける俺達。

この前の話を続ける気なら、本気で扉を閉めるつもりだった。

「軍のことよ」

「軍？ 軍がどうしたよ」

「話したいから、開けてもらえない？ それか出て来てもらえると助かるんだけど」

「……待ってろ」

軍の話題つてことは、攻略にも関わることだ。

あまりいい予感はないが、俺はドアを開けたのだった。

「ほらよ」

「あ、ありがとう……」

「で、軍がどうしたんだよ。また壊滅した、とかじゃないだろうな？」

「アスナを招き入れて、一応の体裁らしきを出すために紅茶を出してやって話を聞くことにする。」

「また壊滅なんてやらかしてたら本気で見限るけどな。」

「違う違う。やっぱりね、不自然なのよ」

「不自然？」

「おかしいじゃない。軍の人達が最前線クラスの装備をしているって。あの人達、いな

いじゃない」

「だから、買ったんじゃないの?」

「どうやって? ねえハチくん。ハチくんは今の装備、どうやって揃えたの?」

「あ? 焔雷はお前も知っての通りだろ? 防具的なのは最前線が上がる度にドロップ品を防具の鍛冶やっているとところに持ち込んで作ってるぞ」

「うん、そうだよね。私もこのレイピアはリズの手作りで、防具はハチくんと同じ。血盟騎士団お抱えの人がいるからその人をお願いしてるの。じゃあ問題です。」

「最前線の武器や防具、それは市場でどれくらいの高額で取引されると思う?」

「……見当もつかないな」

「答えは、これだけよ」

そうやってアスナが提示した金額に、俺は少なからず驚いた。

いや、だってこの金額……おいおいマジかよ。これにもう少し色を付ければこのホーム買えちゃうぞ。

「これが武器や防具一式揃えるのに必要な値段。

命がけのゲームで、かつ最前線の一番新しい装備だもの。当然よね。では、彼らはこれをあんなにお手軽に買えると思う？」

「どうだろうな。腐っても軍は大規模ギルドだ。徴収すりやできなくはないんじゃないか？」

「半分正解。……軍はね、下位層で税金の徴収をしているみたいなの。ラフィンコフィンを始めとして、下位層では特にPKなんかも横行しやすく、その治安維持代みたい」

ラフィンコフィン……俺みたいなぼっちプレイヤーでもよく聞く名前だ。

レッドギルドを自称する殺人集団。いつかのオレンジギルドと違って、殺人を認識した上でやってる狂った連中だ。

あれの真似事をする連中も出てきたのか。

「せっかくだから、下位層に行ってきたの。したらね、下位層では、軍に関わるな。って言われてるそうよ。どうも、かなりの悪政を敷いてるみたい」

「シンカーはどうしたんだよ。キバオウだって、今回のことは主導じゃないんだろ？」

「それが、二人とも全然表に出てこないみたい。ユリエールがなんとか、つてところで」
「確かに、いろいろ妙だな」

不自然と言うか、気持ち悪い。何かおかしな気すらするな。

「そんなわけで、団長の許可を得て下位層の調査をすることになりました」

「ヒースクリフが許可をしたのか？」

「団長は私の進言に今回は賛成していたし、軍のおかしさには首を傾げていたみたい。ついでにキリトくん達も手伝ってやれって。次の階層からはまた攻略に参加しないとだからね」

こいつ、ホラーフロアが嫌だからって、わざわざそこまでしたってのかよ……

「……まあ、頑張れよ」

「うん、頑張りましょ、ハチくん？」

「は？ 何言ってるの？」

「お手伝いを頼みに来たの。団長もハチくんなら対人戦は問題ないだろうって言ってたし、何かあれば呼ぶからって」

「待て待て待て、おかしいだろ。俺はやらないぞ？」

「大丈夫！ 餌を取るの私だから。ハチくんにはもしもの手伝いと、下準備を手伝ってもらうだけ。ね？」

「…………マジかよ…………」

これはあれじゃないか？ こいつを招き入れた時点で俺の負けが決まった的な

……

「そういう部活やってるって言ってたでしょ？」

だから、その一環でことをお願い。ね？」

「…………」

その言い方は汚い。奉仕部を出されてしまったら、俺は受けないわけにはいかない。

部長に何を言われるかわからない。これは仕方ない。うっかり話した俺の自業自得か。

「……俺からは能動的に動かないからな。余計なお世話になるかもしれないし」

「うん、ありがとう。じゃ、行こう？ ハチくん」

恐ろしいまでの強引さと行動力にため息を隠しもせずに吐き出した。

ああ、なんだってこんな……こういうところは雪ノ下というよりは陽乃さんぽいな。お嬢様ってのはみんなこんななのか。怖すぎるだろ、いくらなんでも。

Episode 5, part 4

「この辺りに来るのも久々だな」

「そうね。キリトくん達は……と」

アスナに連れられて俺は19層に来ていた。こっちには捜査に難航してるらしいキリトやサチがいるらしい。

リズベツトは今回は店にいらなくてはならないそうで、お休みだとか。あちらも軍の妨害？　と言うか介入に結構手間取ってるそうだ。

「にしても、言われてる程には見えないが」

19層の街の様子としてはそこまで異常にも見えない。確かにアインクラッド解放軍のエンブレムを付けた人間が多いが、一般の人間もそこそこ多い。

「うん、そこまでには見えないね」

アスナも同意して頷く。つーか、これなら俺いらなくね？

そもそも対人戦（交渉）は専門外だ。アスナ様にお任せするのが一番いい。

「……と、思ったかつただけどな」

「どうしたの、ハチくん」

「なんでもない」

ぼっちというのは視線に敏感だ。こういったバーチャル空間だろうが、見られてる。というのには敏感だ。

だからこそ俺は隠蔽スキルもほぼ最上位まで振ってある。必要以上に見られるのは嫌だからな。そこ、自意識過剰とか言うな。

——話を戻す。そんな俺は見られてるわけではないだろうが、今回視線を浴びているのはアスナだ。見てくれは間違いなく美少女で、着ているのは血盟騎士団のユニフォーム

ム。攻略組を引っ張っているって意味で顔も広く知られてる。そんなのが下位層に来て、見られないわけがない。単純に、こいつに視線が向くから普段通りにあいつらが動いてないってだけだ。

「皮肉なもんだな」

本来、軍がどう動くかアスナはしばらく自分の目で見ることはできないってことか。

……こういうのは美少女だとか美少年だとか、そういうのの特権で奴か。キリトや俺はヒースクリフやアスナに比べて下位層にまでは顔は知られてないだろうから、そのせいであいつも捜査が難航してるんだろうな。キリトがああキリトだってわかればこうなるわけなんだから。

「ハチマン、アスナ」

「よう、サチ」

「二人とも、こっちこっち」

少し遠目からサチがこちらに手を振っている。

想像以上にキナ臭そうな事件は、まだ続きそうだ。

……帰っていい？ だめか。

「ふむ、四強のうち三人が揃いぶみか、なかなか光景だな」

「お前も来てたのか」

サチに連れて来られた先のレストランには鼠のアルゴも来ていた。

こいつもトップクラスの情報屋として大活躍中のようで、レベルはともかく攻略組には欠かせない存在になっている。

俺の抜刀術を唯一知ってる人間でもある。口止めしてあるから口外はされてないが。

「アーちゃんに呼ばれてネ。軍について、だったナ」

電子音を鳴らしてアルゴはウインドウを開いた。

何やらいろいろ漁ってるようで、珍しく真面目そうな表情だ。

こいつも、黙ってればそれなりなんだが話をさせると話し方がこれだし、情報屋っていうポジションからか、あまり人気はないらしい。

アスナ、サチ、シリカなんかは攻略組でも大人気だ。

最近リズベツも腕利きの鍛冶師かつ、あの見た目なこともあってか人気が上がって来てるそう。

究極的にどうでもいい情報だった。

「実は俺たちもシンカーとキバオウについてはほとんど掴めなかつタ」

「アルゴでも、か……」

「そりゃ、出てこなくなっちゃった奴の情報なんてさすがの鼠女でも無理だろ」

顎に手を当てて思索するキリトに答えて、俺は出された水を一口飲んだ。

しっかりと水分を採ったように感じる辺り、脳つてのは凄いなだよな、やっぱり。

「念のために生存も確認して来たケド、二人とも死んではないナ。石碑には書かれてなかつタ」

アスナとサチの安堵の声が聞こえた。まあ、死なれてたら俺もさすがに後味悪い。これは、俺も良かったと心の内で安堵しておくことにする。

「……つてそうか！ その手があったのか！」

「キリト？ どうしたの？」

「石碑だ、サチ。あの二人の名前を後で確認しに行こう。

俺の推理が正しければ、名前は無いはずだ」

どうやらあちらはあちらで何かに行き着いたらしい。

興味ないって言えば嘘になるが、ただでさえ面倒なことに巻き込まれてる以上、キリ

トのことにまで首を突っ込むのは御免被る。アスナもまあ何も言わないし、自分の抱えてる案件をはつきりわかってくれてるようでありがたい。俺を帰してくれたらもつとありがたい。

「そつちにもいい情報になったみたいで良かった。

で、ここからが本番だヨ、ハッチ」

「なんで俺に話を振るんだよ」

「暇そうだったからナ。軍の主導者だけど、全然知らない名前だったわりに、ずいぶん良さそうな装備をしてたヨ」

「なるほどな」

果たしてそれが、どこまで本物の実力が反映されてるかってのは考えものだが。

「それと——」

そこで話を切って、アルゴはチラとキリトを横目で見た……気がした。

「一説によると、二振りの片手剣を使うらしい」

「つまりなんだ、二刀流ってことか？」

「二刀流!？」

遠回しな言い方を直球に変えてやったら、キリトが血相を変えて立ち上がった。
なんだなんだ、どうしたんだよいきなり。

「どうかしたのかよ、キリト。って、アルゴもずいぶん面白そうな顔してどうしたんだ
?」

「いや、知るの俺っちのみ、ってネ」

「……あ、そう」

ロクでも無さそうな雰囲気を感じ取ったのでここでこれはおしまい。ハチマン、虎穴には入らない。

虎児要らないしな。

「でも、二刀流を使うってことは……」

「まあ、ユニークスキルってことだな。そんなの情報一切出回ってないし」

「そ、そうだよな。ユニークスキル……だよなあ」

「キリト、どうしたの？ いきなり変になって」

「いや、何も無い……」

変なキリトはほつといて、しかし、ユニークスキル使いか。

これで俺を含めて三人目ってことになるな。

「……まあ、本当ならな」

半信半疑。いや、一信九疑ってとこか。アスナに引つ張って来られた理由である軍の金の話と、あとはこれが階層を進んでいくネットゲだからつてのが理由だ。

ヒースクリフや俺は最前線で戦っているから、レベルも高い。敵の討伐数も多いし、だからこそ条件こそわからないもののユニークスキルを得ている。

こんな下位層でちよこちよこやっててもレベルは上がらないし、そんな奴がトッププレイヤーの仲間入り出来ちゃうような武器を手に入れられるとは思えない。

まあ、こんなところか。

「アスナ」

「どうしたの、ハチくん」

「鵜呑みにはし過ぎないようにな」

「わかってる。本当の話なら、なんでもっと早く来なかったのかってなるものね」

「そういうこつた。そういうわけだ、鼠女。今回ばかりは悪いな」

「いいや、仕方ないナ。引き続き協力するヨ。」

しかし、ハッチが急にやる気だしテ、どうしたんだ？」

「……別に、大した理由じゃねえよ」

どちらに転んでも、下手に攻略を阻害されたら困る。

それに……ゲーム感覚過ぎるバカのようななら、痛い目見せて黙らせた方がいい。……らしからぬ思考を出した自分のため息を吐いて、俺は水を飲んだのだった。

Episode 5, part 5

「うす」

「やあ、呼び立ててすまないね」

「そう思うなら呼ぶなよな。攻略はどうだ？」

ひとまず解散となった俺は、どういうわけかヒースクリフに呼ばれていた。

アスナから報告は聞いてるはずだっけのにどうしてこう……っか、なんで俺来てるんだろ。

「順調ではあるよ。軍も、今のところ素直に協力してくれている」

「そうか。っか、報告ならアスナから聞いただろ。なんで俺にまで聞くんだよ」

「多視点から意見を聞きたいと思つてね。君の意見はアスナ君よりも率直で、裏表がない。」

「そういう点ではとても頼りになるよ」

「過大評価だな。まあいい、大体アスナから聞いてると思うが——」

それからしばらくの間、ヒースクリフと情報交換を行つていた。

実際のところ、ヒースクリフとの情報のやり取りはかなり有用ではあるのと、こいつとの距離感は楽でいい。時おり何考えてるのかわからないのと、やたら詳しくすぎてびっくりするが。

「……ふむ。して、二刀流の件はどう考える?」

「半信半疑……にすら信が足りてないな。お前はどどう思う?」

「……そうだな、おかしいとは思わないかね」

「思ってるさ。ポツと出がユニークスキルを取れるとは思えないしな。まあ、ユニークスキルかも怪しいわけだが」

「いや、他に情報を聞いたことがない。ユニークスキルと見ていいだろう」

「……なら、ユニークスキルとする。だとしても、いや、尚更おかしいだろ。今のところユニークスキルを会得、公開してるのはヒースクリフの神聖剣のみ。お前レベルでやっとなんだ」

「ならば、本来他に会得するのならば君やキリト君のような者でないとおかしいな」

……何か、小さくひっかかる。何かはまだわからないが、なんだ……これ、何かが……

「ハチマン君？ どうしたのかね」

「……なんでもない。とにかく、俺としては胡散臭いことこの上ないってところだな」

「ふむ、私も同意しよう。ハチマン君、攻略しているときだけでいい、軍には気を付けていてもらえるか？」

「勝手にそうしてるっての。……意外だな、お前はこういうの、アスナに丸投げすると思っただが」

「今回は少し違ってね、まあ……私にも許容できないことがある。大人の事情、というやつだ」

「安心してくれ、そこまで興味ないからな」

「ふ、君ならそう言うと思っただよ。だが、そんなに興味ない、で切り捨てていいのかね？」

「どういふことだよ」

「そうやって切り捨てていった先で、君は大切な物を失うぞ。そして、引き返せない孤独の道しかない」

「こんなゲームの中に大切な物なんてあるもんかよ。そんなものがないから、俺はゲームクリアの為に自分じゃ絶対やらないポジションにいてまで攻略をしてるんだ」

そりゃ死なれたら寝覚めは悪いが、奴らを大切な物とは断言できない。

奉仕部だって、俺にとつてかけがえのない場所ではあるかもしれないが、まだ、大切な物になるのかまではわからない。

「本物を欲してる段階の俺に、大切な物なんてわからないな」

「……ハチマン君。これは、ゲームではあつて遊びではない。意味合いは違うが、この世界は紛れもなく本物だ。異世界、とも言える」

「そんなのわかつてる。それなりに楽しくはやらせてもらつてるつもりだ、俺も」

イベントとか、そういうのはほどほどに参加してるからな。レアアイテムは欲しいし。

生産系のスキルを一切上げてないのは面倒なだけだからだが。

「どうしたんだヒースクリフ。お前、こんなこといっち言うやつだったっけ？」

「君の言う”らしくない”と言う奴だろう。なんとなく君とは話が合ってしまったてね。どうにも人生の先輩ぶりたくなってしまふ。もつとも、君は私よりも遥かにまともなものだが」

「どうだかな」

「アスナ君は以前あった表情の険が取れて、だいぶ穏やかになった。本人からそれとクエストに行ったからと聞いたが。私には絶対にできないことだよ。

人を変えるということは難しいことだよ」

「変えてない。変わる必要なんてない」

アスナは元あった形に戻っただけだ。キリトだって、本来あったものに戻っただけ

だ。人との距離感を掴めるようになっただけで、俺のような人種ではなかったって話だ。

——なら、俺はなんだ。俺は俺として、ここにいます。

変わるつもりなんてないって言っているのに、そもそも周りの動きが違う。だから、ハチマンとしてここにいることを選んでいるはずだ。そもそも、八幡はあいつらの為に自分を多少なりとも変えようとしてて——

「……話はこれでいいか？ この階層の攻略は任せた。

もうしばらくお前やアスナに付き合ってやるよ。じゃあな」

やめろ。やめろ。これ以上考えようとするな。

俺が求める物はここにはない。無い物ねだりをここでする必要はない。

「ああ、すまないな、ハチマン君。そして、最後に二つ、考えることをやめてはいけないよ。君は特にね。そして、時には受け入れることも大事だ。」

「前向きに検討しておく」

ヒースクリフの物言いは、無駄な重みがある。

だからだろう、あいつの言葉に僅かな違和感を抱きはしたものの、思考そのものを断ち切る為に全て丸呑みして歩き始めたのだった。

「……………どういふことなんだろうな、まったく」

とは言っても、気持ち悪さを増して思考は離れてくれない。
一つずつ、ゆっくり整理してみる。

俺は、あいつらに言わなきやいけないことがあるから、リアルへと戻らなきやいけない。
い。

この世界だけは、綺麗だ。クソゲーではあるが。

不本意ながら、俺はこのゲームにおける攻略組でトップのプレイヤーにされている。

俺が強いから、このような評価や周りからの反応が貰えてる。

これは、リアルとは関係ない。

なのに、あいつらはリアルに戻っても話したいと言っている。
チグハグ過ぎる内容に、俺は内心で頭を抱えた。

「のくせ、全員のフレンドを切るわけにもいかない、か」

誰も同情や憐れみなんてない。わかりやすく言えば俺達は仲間なんだろう。
友達だなんだなんて、そんなバカな——

「——そういや、そんなこと言ってるのがいたな」

あいつは俺を友達だと言う。友達なんてギルドの中にたくさんいるだろうに、何故そんなことを俺に言うのか。

考えが堂々巡りしてて気持ち悪い。

「ヒースクリフの奴、後で覚えておけよ……」

息を吐いて、俺はホームへと戻ることにしたのだった。

E p i s o d e 5 , p a r t 6

「これが軍の徴収か……」

翌日、俺はアスナとは別の層へ来ていた。あいつといたんじやまた警戒されて終わるし、昨日の今日で、あいつのペースに巻き込まれると面倒な気分なのもあった。

寝て起きれば多少はすつきりするが、こんな状態で誰かといたくない。ぼっち最高。つてなわけでアスナと途中で別れて俺はまた19層へ来てみたんだが、なるほど絡まれる。圈内では隠蔽スキルもそこまで役に立たないようだ。通行税ってなんだよ。

「お、お前……軍に楯突くつもりか！」

「……」

断ったら圈内戦闘突入だった。いや、圈内なら死にはしないしダメージも通らないからオレンジにもならないんだが、まあ、このゲームに怯えて生きる層にはこいつらはと

でも怖く思えるだろう。

軽くあしらってやったらすぐに逃げる体勢になってるあたりこいつらもお察しだが。これで装備は俺らのに近いって、おかしいだろ。

「……はあ、もう少し強くなつてからにするんだな。そういうのは」

いつだかアスナが言つてたな。圈内戦闘は恐怖を刻むつて。つまりこういうことなのか。

まあ当たらないとはいえこんな風に追い詰められたら嫌なもんか。レベルの差と戦闘経験の差か、こんなので俺に攻撃当てれるとも思つてるのかよ。

……こんなのが、攻略に出てくるつてのか。死ななきやいいがな、マジで。

「これで怖いって思つたなら攻略には出てくるな。圈内だから死なないのであつて、外に出りや、死ぬんだぞ、俺もお前らも」

「お前、まさか攻略組の人間か！」

「まあな、わかったならどっか行けよ。もっかい同じことやるぞ」

剣速においてはアスナ程ではないにせよ、こいつらレベルじゃ視認なんてできないだろう。

ましてや毎回真後ろから首に一撃ずつぶつけてやったんだ、なかなか効いていたのか、男達はそそくさと消えて行つた。

「……ハチマン、ずいぶんえげつないことするな……」

「キリトか、見てたのか？」

「たまたま、な。もし面倒になりそうだったら助けようかって思ってたけど……やっぱりハチマンとは決闘したくないな。対人向けすぎだつて、ハチマン」

物陰から出てきたキリトが肩を竦めた。

昔にあったコミユ障っぽさはもうまるでなく、人前に出るのはダメであるものの、攻略組を引っ張るにはこいつも欠かせない。

その上で廃人思考過ぎてこいつは俺以上にパーティ選びにうるさいが。下手なのとパーティ組むくらいならソロの方がいいってのには同意できるが。

「ハチマンも調査か？」

「まあ、な。アスナがいると軍の奴ら警戒しちゃうから、俺一人だな」

「あー、アスナ様ってやつか」

「そういうこと。そっちは殺人事件の調査か？」

「そんなところ。と言っても殺人事件か怪しくなってきたけど」

「……？ どういうことだ？」

「少し、長くなるけど話をして大丈夫か？」

「構わねえよ。どっちにしろ攻略は今やらずに後回し状態だからな。場所移動するか」

「ん、ならラーメン屋行くか」

「……あんのかよ、そんなの」

こいつのフットワークには結構マジでビビる。

なんでラーメン屋なんか知ってるんだよ、こいつ。

「……まあ、ラーメンだな」

「ヒースクリフもなんかいろいろ言ってたよ。ハチマンが驚いたようで良かった」

連れてこられたラーメン屋は、本当にラーメンだった。

ずいぶん味わってなかったこの味が凄く懐かしく感じる。

キリトは何かわからないが、面白そうに笑っていた。

「で、そもそもの事件の概要から話してくんね？」

「圏内でPKなんつーなかなかないことが起きたわけだろ」

「ああ、まずは——」

キリトが言うには、サチとリズベットとその時はササマルも一緒にいたそうで、この層に用事があつて来ていたらしい。

そこで、圏内なのに死んだ人間がいたと。調査に出たもののどうやって殺したかはわからない。その死んだ男のフレンドつーか元同じギルドの奴と話してみればせいつも後ろからナイフでグサリとされて死んじまった。やはり、圏内なのにどうやって殺したのかは不明。

「でも、昨日のアルゴとの会話で気になってきつき石碑を見てきたんだ」

SAOには、死亡者を確認するための石碑がある。

アルゴはそこでシンカーやキバオウが死んでないことを知ったからな。死者を調べ
るならそれが早い。

「したら、無かったんだ。やっぱり、二人は生きていた」

「……なるほどな。なんで偽装したのか、とかはまだか？」

「ああ。後でその二人と同じギルドにいたらしい奴に会いに行つて、そこから二人に会
いに行くつもりだ。

今日の夜辺りに、な」

「そうか。まあ、どうやら進んだようで良かった」

「そつちは？」

「まだまだだ。軍の状態はさっきの通り。あんな連中が攻略組に出てくるなら、何人か
で済むかわからないくらいには死人が出る」

「……だよなあ」

「死人が出るとなると、少なからず影響は出る。士気は下がるし、心に来る奴だつている。」

今攻略を引つ張つてるアスナ辺り、やばいだろうな」

あいつも俺も、このゲームのトッププレイヤーつてだけであつて、人の死に強いわけじゃない。

中身は二年前に置いてきた子供のままだ。俺がこれだけきついんだ、アスナや、キリトだつて結構なダメージを負うだろう。ここまで来て、身近な人間に死者がいないのは奇跡的でもある。

「……なんだかんだでアスナとかのこと、心配してるんだな」

「死人が出る、つてのは洒落になつてないんだよ。」

別に、俺やお前に当てはまらないことでもないんだぞ」

「そっか……そうだよな……なあ、ハチマン」

「あ？」

「ハチマンは、俺がもし死んだら、どう思う？」

「いきなりなんだよ」

まあ、こいつの置いてきた年齢的にそういうの考えるお年頃か。

キリトが死んだら……か。攻略がかなり進まなくなるだろうな。これは四強全員が死んだ時に言えることだが。

……一応、第一層から付き合いがあるのか。こいつとも。つか、このゲーム始めた時からの付き合いか。

フレンド切ってた時ですら顔は合わせてたりもしたしな。そんな奴に死なれたら、まあ……多少は……

「……どうだろうな」

「ハチマン？」

「なるべくなら、そういうことは考えたくない」

瞬間的に呼吸困難にでもなったかと思った。いや、そんなことあり得ないが。

……基本的にぼっち思考ではあるが、これは良くない。死ぬのがどうか、今は考えない方がいい。

——俺が、本当にハチマンになってしまいかもしれないから。

「そっか、そうだよな。うん、俺もそんなこと考えたくない。ごめんハチマン、嫌なこと聞いた」

「いや、いい……お前、妹に会わなきゃなんだろう。あまりそういうことは考えるなよ」

俺はこのゲームのプレイヤーだ。住人であることまでは認めても、このゲームそのも

のは絶対認めない、

リアルよりも欺瞞だらけなはずのこのゲームの中で、何よりもリアルな“死”という話題は俺にとって良くない。

やっぱり、今は一人でいたい。

「さて、こんなところだな。俺は行くぞ」

「おう。ハチマン、今度また美味しい店見つけたら行こうな」

「その時になったら考えとく。じゃあな」

キリトを置いて先に店に出る。

ここに来て、俺は俺自身が何を思っているのか、少しわからなくなった。

雪ノ下、由比ヶ浜の二人と、小町、戸塚……何なら材木座も入れてやつてもいい。川崎もまあ、なんとか。

あいつらに会って、話す。そうしなきゃ俺は進めない。変わることを悪いことと思わなくなろうとしてはいたが、でも、それはあの二人と話してからのこと。それまでは

「変わることをすら許容できないはずなのに、なのに、それと同じくらいに——
——キリトが、キリト達が死ぬなんてことを欠片にも想像したくなかった。」

E p i s o d e 5 , p a r t 7

「……俺はなんだ」

雪ノ下さん——陽乃さんは俺を理性の化け物と言った。

それは言い得て妙なのかもしれない。別に、なんら悪いことはしていないつもりだった。

感情が先走って、昔あれだけ失敗した。なら、そんなものは不要だ。人の言葉にある裏を読むように、信じないように予防線を張った。

奉仕部のあいつらとだって変わらない、葉山達のやり取りは馬鹿馬鹿しい。そのはずだった。

だからこそ、俺はぼつちというポジションを活かして、最短かつその場しのぎとしては最善を選んでいた。同情なんかいらぬ。俺は俺の平穩の為に、俺自身だけは裏切らない為にやったことだ。損だなんて言わせないし、俺が切れる札を切ったんだ。それを、自己犠牲だなんて言わせるつもりは今でもない。

「なのに、俺はあの時自分を”変えて”しまった」

俺は、俺のやり方に満足していた。なのに、そのやり方じゃ傷つく他人が生まれて、嫌だと言われて。

考えに考えた末に、俺は俺なりに大切にしたいもの、なくしたくないものが出来てしまったことを意識した。

同時に、あれだけ嫌いだった葉山達のような上辺だけの綺麗事も、その保たせる為の水面下の努力を知って、許容することもできた。だから、あの選択をすることができた。結果は最悪だったが。

「でも、それでも俺は——」

俺は、今までの負けから感情を一切排他して打算と計算での行動に主を置いてきた。自画自賛と言われようとこれには無駄はほとんどなかったし、俺自身何より満足していた。

問題の先送り、最小限の被害、悪意の集約。手っ取り早く負けない方法だ。それは結果を見ても決して大きく間違えてたとは言わせない。

感情すら計算して、どんな状況でも計算して、だからこそ、修学旅行の時、雪ノ下や由比ヶ浜が抱く嫌悪感がわからなかった。

いつしか、俺は感情が表す当たり前も、わからなくなつてた。

それからあの選挙を経て、あんな状況のまま迎えた冬休みで、不意に本音が漏れた。

「俺は、本物が欲しい」

ここ数年で、久々に出てきた感情だった。

俺は理性の化け物、感情のわからない化け物だ。でも、俺は選挙の件で、初めて守るために動いた。

感情に触れて、自分の感情が初めて溢れた。

このまま、雪ノ下を——あんなにも強くて正しい、けれど不器用な女の子を苦しめてなるものか、

由比ヶ浜を——あんなにも優しく素敵な女の子を悲しませていいものかと、どれほど、自分の中であの場所が大きくなつていたか。そう、わからされる言葉だった。

だから、だからこそ電話した。変わることを許容して、俺は久しく出さなかつた感情を出そうとした。

「その結果がこれだ。大声出したくもなる」

故に、比企谷八幡は自分らしさを捨てても戦う。

本物が欲しいと、自身を変えてもいいとすらまで思つて願つた二人にだけは、俺は素直で居続けなければならぬ。

俺に、俺にあんな感情を向けてくれたあの二人にだけは、俺はちゃんと言葉を伝えなければならぬ。

例え、目を覚ました時にはもう二人はそれぞれ前に踏み出せてもいい。したら、謝ろう。

何かに困つてるなら助けよう。俺は、俺に素直である為にも、そうあろう。このゲームでいる中で変わらず考え続けて、そう思えた。

——だからこそ、八幡は、ハチマンではない。

これは八幡の思考であつて、ハチマンは違う。このゲームで得てしまったハチマンの名声は、八幡のものじゃない。けれどそれでいい。俺はあの二人へ言葉を伝える為はこのゲームを攻略している。そのはずだった。

なのに、なんだあれは。

「……もし、キリトが死んだら」

別に俺は狂ってはいない。一般的な常識としてキリトが死ぬなんてことはあつて欲しくない。だが、なんだあれは。

瞬間的に呼吸困難になったような、気持ち悪さと喪失感。このゲームが始まってから時折来る、感情的な部分という奴だ。そんなの考えたくない。それは純粹に、キリト達を失うなど思考でもしたくないという素直な嫌悪感だった。つまり、それは、俺はあいつらに対して不必要なまでに入れ込んでるんじゃないのか。

ここはゲームで、ハチマンの評価は決して俺の、八幡の評価じゃない。なのに、あいつらはまるでハチマンを通して俺を見てるようで……

雪ノ下や由比ヶ浜という例外はあくまで例外で、やはり、俺は感情をまだ理解できていないのか。

かつてないくらいに、俺は動揺していた。

「もう、こんな時間か」

何時間も座って自問自答していたらしい。

後悔、動揺、今まで排他してたはずの感情に振り回されて、それを振り払うように俺はベンチを後にしたのだった。

「おい、起きろバカ野郎」

数分後、圏内とは言え催眠PKなんでものが流行ってるのに原っぱに横になって寝てるバカ野郎ことキリトを発見して、俺は呆れたように睡眠解除のアイテムを使った。

「んあ、ハチマン……?」

「お前な、寝るなら室内にしろよ。いくら黒の剣士でも、寝てる場所に決闘挑まれて攻撃されたら何も出来ずに殺されるんだぞ。」

さつきそという話をしてたつてのに、無用心過ぎる」

混乱して、動揺してるとは言え自分を取り巻く感情にはつきり当たりがついたせい
か、言動もきつくなる。

おそらく、キリトや他の身近な誰かが死ねば、この混乱や動揺を更に置き去りにして
自分がどうにかなるのがわかってるからだ。

理性の化け物は、感情については何も対策ができていない。

「わ、悪い。昼寝日和でさ……」

「お前な……昼寝はいいが、安全なところでやれよ。」

「ここは『死ぬ』ってことだけがリアルなクソゲーなんだぞ？」

「わかったよ。気を付ける」

「ならいいが——」

「けどハチマン。俺はそうは思っていない」

「あ？」

「死ぬことだけがリアルだなんて、そうは思っていないよ。ここは、今の俺達にとってのリアルだ。俺達は今を生きてる」

「ちよつと、何を言いたいのかいまいちわかんないな、段階を追って——と、そうもいかないか」

いきなり真剣な顔で言うキリトに、何を言いたいのかわからない俺はひとまずストツプをかけようとしたものの、突如入ったアスナからのメールに、内心で喜んだ。

「アスナからの呼び出しだ。詳しい話はまた後でな」

「あ、ハチマン。……わかった！ 絶対、話するからな？」

「わかったわかった。とりあえずお前はこの事件終わらせて来いよ」

「ああ、夜に落ち合つて二人から話を聞いて、後はどうするか改めて考える」

「そうか、ま、頑張つてくれ」

意図して必死に感情に蓋をして、俺はヒラヒラと手を振つた。

雪ノ下達を想えば想うほど、キリト達への感情も出てくる。……本当、なんなんだ、これ。

Episode 5, part 8

「酷い……」

あれからアスナと合流した俺は共に第一層、はじまりの街へと来ていた。

もう何人追っ払ったかわからない。最下層ともなれば攻略にさして興味を抱けない連中が多いからか、アスナが相手でもお構い無しだ。と言うか、認知されてない。それでいいのか軍よ。

「はじまりの街だつてのに、ここに残つてそんな連中は全然歩いてないな。いるのは軍の連中か、俺らみたいな理由があつて降りてきた連中か……」

聞いた話じゃ子供を保護してる場所もあるつて話なのに、これじゃあそもそも話すら聞けないな。

さすがにはじまりの街まで来るのは失敗だったか。

「大丈夫ですか？」

「は、はい」

アスナはさつき軍の連中にしつこく付きまとわれてたらしい女のプレイヤーに近づいて、安否を訊ねていた。

俺はと言えば、さつきのキリトとのやり取りでおかしかったのが少し落ち着いたのか街を見回しているくらいの余裕は戻っていた。

まあ、内心は荒れに荒れてるけどな。どんなに足掻こうが俺は心は17歳で止まっている。キリトとかアスナとか、あいつら俺より年下なのにメンタル強すぎだろ。

「お待たせ、ハチくん」

「ん。で、どうするよ。こんなのにじゃ情報集められないぞ」

「そうね……うん、ちよつと予想以上に酷かったわ。」

「戻ったら団長に報告しておくね」

「それは好きにしてもらってもいいけど。にしてもあれだな、ここは、いかにもな場所だ」

「いかにもな場所？」

「見てみろよ。弱肉強食、欺瞞に満ちてる。見かけるのは俺達みたいなのか軍かで、はじまりの街にいる連中は見かけない。わかりやすいカースト分けた」

「徒党を組んで、面倒なことをやっている。その割を食うのはいつだってカーストが低い者だ。俺のように望んでぼっちになつて人間じゃないと、これは耐えるのは難しい。」

「やっぱり俺はその辺りロンリーウルフと言える。孤高……はダメだな。雪ノ下からいけないとそう言えない。」

「ここがある意味、一番リアルに近いかもな」

どう思ったのか知らないが、アスナは無言で俺を見ていた。

「お前はまだ世界を変える。なんつつていろいろやらかしてんのか。雪ノ下」

ふと、奉仕部に入った時のことを思い出して、やっぱりため息を吐いたのだった。

「あの、ハチくん……?」

「なんでもない。家に帰って寝てたいって思ったくらいだ」

「……もう。すぐそうなんだから」

「平穩無事に生きてたい人間なんだよ、俺は」

「ずいぶんその平穩無事から離れた所にいるように思えるけど?」

「それに関しては我ながらやらかしたと思ってる。他力本願にしとけば良かったか」

「そうだったら、攻略はこう進んでたか怪しいけれどね。ハチくんの存在も、やっぱり大きいよ」

「……自覚はしてるさ」

だからこそ、こうして戸惑ってるんだ。お前が、お前らがどうしてハチマンだけを見ようとしなのかな。

「いたぞ！ あいつらだ」

「あ？」

「え？」

不意に、槍やら何やら持った奴らに囲まれる。なんだなんだ、時代劇かよ。

「軍の連中だな」

「そうね。……報復つてところかしら」

「妥当な線だな」

オクターブの下がった声でアスナがぽつりと言った。

軍の対応ややり方を見て、かなり頭に来てたみたいだからな、うん、怖い。

「どうする、ハチくん」

「個人的には相手するの面倒だから逃げたい。どつちにしろこれじゃ得られるものもないだろ」

「それもそうね」

とりあえず適当に脅かしておいて、そのまま逃げるとするか。

面倒事はごめんだ。リアルでも、ゲームでも。

「待て」

不意に、声が聞こえた。囲んでいた軍の連中の動きが止まって、道が開ける。

「モーゼかよ」

「あ、それ私も思った」

隣から同意の声を頂けた。つて、そんなのはいいんだよ。

目の前に来たにこやかなイケメンスマイルを浮かべるいけ好かない感じの男は誰だ？

「四強のハチマンさんとアスナさんだね。こんなところにいるなんて、どうかしたのかな？」

「ちよつとした用事だ。つーか、誰だお前」

「俺はオウル。今の軍の攻略を任されてる」

「……なるほど」

つてことは、こいつが例の。確かに、装備は良さそうだな。……やっぱりキナ臭い。

「つーことは今の軍の攻略のメインはお前か。噂で聞いたが二刀流使うんだってな」

「そこは、ノーコメントで。直に俺も攻略には参加するから、そのときに、ね」

「……そーかい」

パツと見て葉山つぽい雰囲気似てるかと思つたがその中身はまるで違うな。
なんというか、まあ合わないだろうな。

「時にハチマンさん。君は無所属を貫いているとのことだけど、良かったら軍に来ないか？」

四強とあらば、かなりの地位が用意できるけど」

「いらねえよ。俺はギルドとかそういうコミュニティが嫌いだし、お前らのマスコットになる気もない。それに地位なんて何の役に立つんだよ。クリアする気あるのか？
お前」

これまたずいぶんゲームに入れ込んでる奴だな。

こんなのが今の主導で大丈夫なのか？ 本当に、ロクなことにならないといいが……

「それじゃ、俺達は行くとする。シンカー達によろしく言っておいてくれ」

「……ああ」

甘いな、葉山つぽい雰囲気ならそこでもにこやかな笑顔を浮かべておけ。そこで嫌悪感を出しちまったらお前はそこまでだ。

大きくため息を吐いて、俺達は一層を出ることにしたのだった。

「どう思う、ハチくん」

「……できれば関わりたくないな」

どうあったってあんなの無理だ。アスナ、無言を貫いてるつもりだろうけど渋い顔になってるからな、お前。

「とりあえず、団長に報告するわ。はじまりの街を含む下位層のこともね」

「それであいつが動くとも思えないが」

「いいのよ、勝手に人員借りるから。軍の横暴を許すわけにはいかないわ」

「あまり下手に衝突し過ぎるなよ？ 攻略の時とか面倒になるぞ」

「わかってる。けどねハチくん。それでも私は見過ごせない。ただでさえ死の恐怖に怯えなきゃなのに、ここでの生活そのものも脅かされるなんて、許されないことよ」

「ほー、攻略の鬼がずいぶん丸くなった発言するじゃねえか」

「……よ、余裕ができたの！ 今までより、ずっと。料理スキルとか、取ってみたりしてるんだから」

「そりゃ良かった。まあ、好きにやってくれ」

あのアスナがそこまで、ねえ。

まあ、なににせよ本人がいいならいい。俺がとやかく細かく口出すことでもないだろ。

「今は、私達はちよつと立場が逆になっちゃったかな？」

「それでもねえよ。確かに俺はリアルに戻らなきゃいけない焦がれるほどの理由はあるけど、ゲームの範囲でならそれなりに楽しませてもらってるしな」

単純に割り切れているだけだ。いつも通り全部を打算と計算で決めている。

……別に、雪ノ下や由比ヶ浜はいないしな。それに最初こそいつも通りにやったが今回はトッププレイヤーというカーストを利用してすらいるんだ。あいつらだって文句はないだろう。

「他人のプレイングに文句はない。よほどのことがない限りはな」

今回はそのよほどのことになるわけだが、果たしてあいつはどうするんだかなあ。

「ハチくん、なんだかんだで懐広いよね」

「お前自分で言ってただろ。俺はどうでもいいことには素直なんだ。そいつらの行動にまで責任なんて持ってやれないし、どうにかしてやる余裕もない。そういうこと」

なるほど。と何か納得したらしいアスナ。それから不意にぐい、とこちらへ顔を寄せ
て。

「おい近い離れろ」

「ハチくん」

「あ？」

「私は、全ての行動に自分で責任を負う。負ってるつもり。だから、これからもパーティーとか組ませてね？」

「……好きにしてくれ」

キリトと叫ぶアスナと叫び、どうしてこうもまっすぐというか、素直なんだこいつらは。

こいつらだけじゃない。このゲームで俺の周りにいる人間は全て、こんな奴らばかりだ。清算しようとしたってできそうにない。まったく、どうしてこうなった。

アスナと別れて、俺は夕飯を食うために適当な階層の飯屋にいた。

料理スキルとかは取ってない。ゲーム内マネーは相当に貯めてあるし、普段戦ってるんだから、こういうときは働きたくない。

そもそもからして働きたくない。

「俺は、どうしたいんだらうな」

明確な答えはないままに、独り言はそのまま消えた。

次いで思考しようとして、勢いよく開いたドアに俺はそちらへと意識を向けられた。

「いタ、ハッチ！」

「……どうしたんだよ、アルゴ」

「どうやら俺への来客らしい。今日は本当に忙しいな……つたく。明日はホームから出なくてもいい？」

E p i s o d e 5 , p a r t 9

「……………くそが」

既に暗くなった道を、俺は全力で駆け抜けていた。

その傍らでアイテムウインドウを開き、装備を焰雷からいつぞやのオレンジギルドの連中を取っ捕まえた際の麻痺付きの刀に変えて、目的の場所へと向かった。

話は、少し前に遡る。

「どうしたんだよ、アルゴ」

「今、すぐにキー坊の所へ向かってくれ」

「要領を得ない言葉だな。だから、どうかしたのかよ」

「……ラフィン・コフィンが絡んでル。キー坊が危ない」

「待て待て、何にどうラフィン・コフィンが絡んでるんだ？」

「キー坊の関わってる圏内の事件、あれの情報を求めてる人間がいたんだがナ、それ……ラフィン・コフィンの人間だつタ。知らずに答えてテ、さつき口封じに殺られかけて命からがら逃げて来たところダ」

「……つまりなんだ、キリトの奴、このままだとラフィン・コフィンの連中とぶつかると
てわけか。」

「……おいアルゴ、あいつは今どこにいる」

「そこまでは……すまない」

「いや、それなら俺もスキルでどうにか追っかける。お前は念のため人の多いところに

いろよ。……行ってくる」

「ハツチ、キー坊もだが、無理だけはするナ」

「当たり前だ」

昼間あんな話をした直後でこれかよ。

キリトがやられるとは思えない、が。それでも焦燥を感じて、俺はそれを振り払うように首を振って理性で押さえ付けて走り出したのだった。

「キリトは……こつちか」

徐々に近づいてくる。らしくないとか、下手すれば対人戦になるとか、そういう懸念もあるが……そんなことよりもキリトのアイコンの有無を気にしている。

なんだよ、結局俺はずいぶんあいつに入れ込んでるじゃねえか……

「……死なれたら寝覚め悪いからな」

無理矢理理由付けして、足を止めずに走り続ける。

木々を抜けた先に見えたのは、逃げる女に剣を振り上げるオレンジアイコンのプレイヤードだった。

「——エクストラスキル、抜刀術」

普通にやったんじゃ間に合うかわからない。

ここで躊躇う理由も特にない。俺は鞘に手を触れさせて一息で飛び込んで行った。

——side キリト——

「Ha! ほら、全力で守れよ黒の剣士。そうしないとここにいるお前以外、死んでしま
うぜ?」

「くそ……っ！」

元黄金林檎のメンバーを追って、シユミットを連れて来た先がこれだ。

死を偽装した二人が探していたのは死んだ黄金林檎のリーダーの、リアルでも夫婦だったらしい男のグリムロック。あろうことかこいつは、ラフィンコフィンなんてものを雇って残りの黄金林檎のメンバーを全滅させる気だったらしい。

麻痺性のダガーで上手く突かれて動けないシユミットを守りつつ、他二人を更に守る。幹部クラスの赤目のザザとジヨニー・ブラック、リーダーのPOHはまだ見てるのだが、来てる人数が多すぎる。こんなことを想定していなかったせいかな、前に使おうとしていた麻痺性の剣は持ってきてない。殺すわけにもいかないから、どうすれば……

「い、いやっ！」

「残、念……だったな、黒の、剣士。これで、終わり、だ」

奴らのギルドメンバーの一人が、ヨルコさんへと剣を振り上げる。

「しまっ——」

「——間一髪、か」

音もなく、剣を振り上げた男が地面に倒れ伏せた。

小さく、呟くように聞こえてきた声はよく聞く声。頼りないけど安心する、友達の声。

「Yeah! まさかお前までこんなところに来るとはな。初めて会うな、影纏い」

「まあ、ちよつとあつてな。お前がP O Hか? なるほどな、人でも殺してそんな見た目してるわ、お前」

ハチマンだった。ハチマンが、刀を持って立っていた。いつものマフラーで顔の下半分を隠して、ちよつと怖いあの濁った目付きでP O Hを睨んでいる。

「Ha! それはお褒めにあずかり光栄だ。お前はやれそうだな、どうだ、遊ぶか?」

「寝言は寝てから言えよ。あー、一応これ寝てることになんのか」

刀を鞘に納めて、ハチマンはマフラー越しにわかるように呆れていた。

俺と言えば、ハチマンがここに来てくれた、ということにホツとして、周りを見回した。全員新たな乱入者に視線が行っている。

「馬鹿、なのか、豪胆、なのか……」

「Yeah! 仮にもこのゲームの最強の一角だ、これくらいは余裕なんだろうよ。なあ、影纏い」

「知るか。あとその呼び方やめろ。ついでに言えば俺は眠いから帰ってくんね?」

相変わらず調子の変わらないハチマンに、俺まで脱力しそうになった。

——なったところで、P o Hの笑い声にまた意識を集中させる。

「H a H a! ずいぶん奴だな。おいお前ら、今度はこつちも狙え。活きがいいぞ。」

It's show time!

ハチマンに向けて、ラフィンコフィンの奴らが走り出して行く。不謹慎かもしれないけど、俺は口元だけで笑っていた。

だって、ハチマンと戦うってどういうことかを理解してない。俺やアスナはもちろん、ヒースクリフだって決闘したくないプレイヤーに選ぶような奴なんだ、ハチマンは。

「……はあ。ばか野郎どもが」

ハチマンの姿が消えた。正確には走り出して、一番近くのメンバーの真横に現れる。手数で無理矢理ごり押しして、時間ダメージでの最大ダメを出す俺とは違って、ハチマンは極振りして視界に留めるのも難しい速さから、高い単発ダメージを出してくる。総合ダメージは俺の方が上だけど、単発火力に関してはハチマン、次点でアスナといったところだ。アスナには連撃がある分、単発は若干ハチマンより低い。

そして、ハチマンの凄いところは攻撃をかなりの確率でクリティカルにすること。弱点部位……例えば首とか。そういう場所へ正確に当たるとクリティカルヒットになってダメージを上げるんだけど、さすがにアスナのような正確さはないけど、クリティカ

ル率はアスナより高い。

そして何より、対人戦ではハチマンの二つ名の由来で、一番わかりやすい強さが発揮される。

「なっ、消えた……?」

「んなわけないだろうが」

三人目が倒れて、ハチマンはそいつの後ろでため息を吐いた。

そう、速い。剣速もだけど何より本人が恐ろしいくらい速い。俺以上に防御を捨てて更に素早さに特化させてるせいかな、俺がもしハチマンと戦うなら攻撃に合わせて反応するのが最善だと思う。待ちを強制させる時点でハチマンのあれはおかしい。

ヒースクリフの神聖剣でも、あれは防ぎ切れるか怪しそうだ。もつとも、神聖剣破りは俺も”とっておき”を使えばできなくはなさそうだけど……間違いなく、俺達の中で一番対人戦に強いステ振りをしてるのがハチマンだ。

「ほう、さすがは影纏いってところか。化け物染みた強さじゃねえか。てめえも本気出せ

「ばこれくらいはやれるってわけだな、黒の剣士」

「……さあな。ハチマンだって、まだ本気かも怪しいぜ？」

青い影と銀色の光が走って、その度に一人が倒れる。

不意に、影がP o Hへと迫った。

「っ！」

「おー、さすが人殺し。完全に不意をついたつもりだったんだがな」

「Ha、ずいぶん気の早い男だな」

「邪魔な奴は消しとくに限るだろ。特に、お前らみたいな奴は」

ゾツとした。ハチマンの刀はP o Hの目の前で止められていて。いつもの、感情が籠ってないような声のはずなのに、ゾツとした。

「何人殺したかとかは知らないが、人の居場所を奪う権利は誰にもない。こんなクソゲーの中でも、な」

「クソゲー、か。何を、言うかと、思えば」

「いいじゃねえか。このゲームでのPKはプレイヤーの権利だぜ？」

「……あ、そ」

「ハチマン！ 後ろだ！」

ハチマンの姿がまた影に消えて、後ろから斬りかかってきたプレイヤーの更に後ろから斬り倒していた。

……くそ、結局ハチマン一人に全部任せることになっちまった……そんなのでいいのかよ……

「あんま大したことないな。こいつら」

「Ya、人を殺す手段なんてどこに行っても大差ない。圧倒的優位からリスクを抑えて殺る。正面からどうこうできるお前達がおかしい、とは思わないか？」

「ゲームなんだろう？ レベルくらい上げろよ。で、どうすんだ？ お前らはここでどうこうしちゃった方がいいとは思うんだが」

……覚悟を決めろ、俺。

「ハチマン、俺もやるぞ」

「キリト？ お前、でも武器が……」

ラフィンコフィンのような奴らは俺も許せない。

俺だって、ハチマンほどではないかもしれないけど、リアルの母さんやスグのことをいつも想ってる。

だから、理不尽に理不尽を重ねるこいつらは、嫌いだ。

「構わない。むしろ、覚悟が足りなかった。最悪の場合——お前らを殺すぞ」

ハチマンがいつも言う、あの言葉。今日は俺が言うことにする。

全部が全部、友達に任せっぱなしなのも嫌だ。

「……………どうする?」

「Ha! 黒の剣士、影纏いの単身でも本気で来られたら厄介だからな、二人揃ってたら更に部が悪い。よってまだ早い。そういうことだから、俺達は行かせてもらう。See

you

あれは、転移結晶!

「くそ、逃がしたか!」

「こっちの面子が全員生きてるなら御の字だろ。ほらキリト、倒れてる奴ら牢獄送りにするから手伝え」

さっきの剣呑さがなくなって、普段と同じやる気のなさそうなハチマンの声。

最近のハチマンは、感情の過剰表現も相まって結構わかりやすくなってきたからか、たまに無理してるように見える。もしあのゾツとするような声音が、そういう無理から出てきてるなら、ハチマン、大丈夫かな……

Episode 5, part 10

「よ、ハチマン」

「うす」

昨日の一件から一日。俺はキリトに連れられてレストランへ来ていた。お礼に昼を奢ってくれるらしいから、随伴に預かったというわけだ。

……結構な数の人間を斬ったつてのに、慣れてるのか麻痺してるのかなんとも思わなかった。まあ、あの武器なら死なないつてのがわかってたからだけど。

「一応、あの子のことも報告しときたくつてさ」

「律儀な奴だな。別にいいつてのに」

「俺がそうしたいからしてるんだ。ラフィンコフィンを雇ってたグリムロックは牢屋行

きになったよ」

「まあ、それがいいだろ」

「……凄いやな、自分の奥さんが変わっていくのが嫌で殺すなんて。俺には想像もつかない」

「俺は、変化つてのがあまり好きではない。が、それを他人に強制する気もない。理解はできないな、そういうのは。そもそも、そんな執着を持つようなもの俺にはないが」

”あの場所”を除き、だが。

あれだけは唯一執着してると言える。

「バカな話だ。ゲームはゲーム、リアルと別になつたつておかしいことじゃない。命がけとは言え、ここは作り物だ。偽物だ」

故に、本物を求める俺はこのゲームを認める気はない。どんなことがあつても、何を

得ても絶対に。

「でも、生きてるよ。俺達は」

「あ？」

おそろしく真つ直ぐな目で、キリトは俺を見ていた。

例えば、会った頃のどっか気を使うような距離の取り方は、いつの間になくなってたな、こいつ。

「例え偽物でも、ゲームでも、俺達は今ここに生きてる。今ここにいてることだけは、否定しちやいけない気がするんだ」

「面白いことを言うもんだな、お前」

「そんなことないさ。だって、きつかけは理不尽だったとしても、俺達は前を向いて歩いてる。今こうやってここにいるよ。ハチマンに会って、クラインに会って、みんなに

会って。ゲームだけど今を生きてる。リアルに戻れば全部なくなるなんて、それじゃ……今こうして生きてることを否定してしまう気がする」

「……」

「ハチマンが、リアルにすぐ戻りたいのはわかってる。俺だつて家族に会いたい。けど、リアルに戻つてもハチマン達とも会いたいわって、それは我がままになるのかな」

「なんで、そこまで思えるんだ。お前らは……」

「生きてるから。ここでのことは、俺にとつてはリアルだ。年齢こそ違つかもしれないけど、ハチマンは俺の友達で、クライン達や黒猫団のみんななかけがえのない友達だ。ゲームだから、なんて割り切りたくないんだ。この時間を無駄にしたくない。今を、懸命に生きないと待つてくれる人にも失礼だつて思うんだ」

「待つてくれる人……」

雪ノ下、由比ヶ浜は待っていてくれるのだろうか。小町は、どうしているのか。

あいつらは、俺がここまであいつらへ想いを馳せていることを知ったら喜んでくれるのか。

「俺、戻ったら家族にただいま。つてちゃんと言うんだ。だから、その為に懸命に生きようって。それで、ハチマン達にも向こうでお疲れ様。つて言うんだ」

「何度も言うが、こっちと向こうじゃ俺は全然違う。お前らが見てるハチマンは、俺じゃない」

「それでもだ。それに、そんなことないと思うぞ。ハチマンがそんな器用な人間なら、もっと上手いことやってるんじゃないのか？」

……なかなか痛いところを突いてくる。そりやそうだ、今まででは考えられないことをしてはいるが、俺の本質は変わってたまるか。

「リアルのはチマンだって、めんどくさがりで、捻くれてて、つてとこだろ。今さら何

言ってるんだよ。俺、もう一年以上お前と付き合いあるんだぞ」

年相応の、子供っぽい笑み。

ああ、なんというかやはりこいつは人たらしの気があるんだろう。

これだけ生きてきて、こんなに裏表を感じさせない言葉は初めてかもしれない。必死に生きてるから、打算や計算が働かない。感情ですらない、こいつにとって、キリトにとって当たり前らしい。

「なあ、ハチマン。とりあえず今を一緒に生きよう。で、リアルに戻って全部解決して、それでみんなでお疲れ様ってやろう」

……自分でも言ってたことだったな。ひとまず今をどうにかしないとそもそも進まない。

雪ノ下達に会うためには帰るしかない。が、帰れないから帰るために戦っている。

そもそも、問題の先送りは俺の得意技だったはずなのにな。

「なあ、キリト」

「うん？」

「リアルに、俺が大切にしたい場所がある。何よりも欲しい、本物があつた。ここで俺がリアルのように生きてしまったら、そいつらに申し訳が立たない……なんて思ってるんだ」

溢れた言葉は、俺を友達だとずっと言い張るこいつにだからこそ、かもしれない。

自分の中の疑問。あいつらへの操のような物だった。何よりも欲した本物、そうあるはずのあいつらへ、勝手に消えて……その先で、俺がこうして生きていたら失望されるんじゃないか、と。

「ハチマンがそこまで言うなんて、よっぽどの人達なんだな。というか、ハチマンてほんと自分にはどうでもいいこと以外には凄く真剣だよな。それも、これも、全部取ればいいんだよ」

「……たか」

え、なにいつてんのこいつ。

全部？ どういうことだ？

「その、ハチマンが俺達を一定以上まで認めてくれてるって前提だけどき。その人達も、俺達のことも。全部、それだけである必要なんてない。

それにほら、ハチマンがそれだけ言う人達って俺も会ってみたいしな」

「……一人、まじでドギツイからな」

「……え」

……少し、肩が軽くなった。あいつらが俺を待っていてくれたら、土産話にはちようどいいか。

俺があいつらの為にどんだけ頑張ったか、その過程で自分らしからぬ状況下においてしまったが故に、キリトみたいな物好きな奴らの集団に付きまとわれちまったってな。

「それに、もし必要なら俺がついてくからな。ハチマンがどんだけゲームで頑張ってたか、俺や黒猫団が証明してやる！」

「あ、そ。……まあ、そのときは頼むわ」

俺は変わらない。八幡とハチマンは別だし、これからもぼっちプレイヤーを続けはする。

が、戻った時に雪ノ下達へ無駄な心配をかけないように、な。俺にも仲間みたいなのんができてたと言えるようにしておくのも悪くないか。俺が望む本物はあの二人のところ以外にない。が、望む、望まないにせよ俺の計算や打算の上からやってくるこいつやアスナみたいな奴には、好きにさせておこう。死んでほしくない、生きていて欲しい。と思っているのも事実だ。

卒業式を境に狂っていた歯車が戻った気がした。偉そうにアスナにあんなこと言うてこのザマか。

やはり、俺はああいう役には向かないな。適役つてのがあるもんだ、なんだって。

「キリト、今日は奢りじゃなくていいぞ」

「え、でも……」

「その代わりまた別の日に奢れよ。適当に店探しといてやるから」

「……わかったけど、なんでまた」

「そういう気分になったんだ。まあ、礼だけ言っておく」

これでいい。とつとクリアはする。が、せっかくここまでやってるんだ、もう少し、俺も肩の力を抜こう。俺らしくやることにしよう。

Episode 5, Fin.

Episode 6, part 1

「ハチくん、お待たせ」

「ん、準備はできてるな？」

「もちろん」

SAOに入つて二度目の誕生日を迎えて少しした頃、リアルじやまだ夏だな。

そんな中で、俺は72層の迷宮に立ち入っていた。アスナに呼ばれ、レベル上げも兼ねて攻略を進めようとのことだった。

あと三つで例のクォーターポイント。間違ひなければそのボスは尋常ではないくらい強いだろう。

「今日はあの取り巻きいないよな？」

「当たり前です。クラディールがいたんじやハチくん私ともまともに取り合ってくれないじゃない」

「面倒なのは嫌だからな」

キリトと以前話してから、だいぶ肩は軽くなった。

そもそも、最初に俺はこの住人として振る舞うことを良しと思つて、この世界が綺麗だ。つてことだけは認めてたはずだったのにな。どうも卒業式は俺にとつてそれなりに大きなものだったみたいだ。

——違うな、あいつらが俺より先に卒業してしまう。そのことが俺を追い詰めてたんだろう。我ながら、ずいぶん別人のようになってしまったらしい。

こいつらのおかげなのか、こいつらのせいなのか。

「また考え事？」

「さてな」

はぐらかされたことに頬を膨らめますアスナを無視して先に歩き出す。

リアルでこいつらと会う。とやらには返答はしてはいない。それも含め、俺は全て先送りにした。

キリトのいうこの今とやらを生きること意識を向けることにして、それらは置いておくことにする。

まだ、この理性の化け物は感情には鈍い。何故こいつらが俺にここまで友好的なのか、また俺の強さとの利害関係なだけなのではないか、なんていういつもの思考が強い。が、口に出せばサチを筆頭に説教されてしまうので、半信半疑程度には信用することにしました。

「そうそう、料理スキル上げ終わったよ」

「ずいぶん早いな。もうカンストしたのか」

「思いのほか楽しくてね。ふふ、まさかこんなスキルを上げるなんて思わなかったな」

「……お前も、肩が軽くなったようで何よりだな」

「え、なんか言った？」

「いや、なんでもない」

呟いた独り言は聞かれずに終わった。いい、それでいい。

少なくとも俺の周り是这样して穏やかにはなっていない。……問題は山積みではあるが。

「今回こそは、誰も失わないでいきたいね」

「……そうだな」

あれから68層のボスで、俺は抜刀術のユニークスキルを使った。

ダメージの通る部位が一ヶ所しかなく、一定ダメージはほとんど通さない。というユニークボスだったんだが、あまりのめんどくささに使った。そのあといろいろやっぱり面倒だったの言うまでもない。

とは言え、今の話題は前の階層にて二刀流なんていうユニークスキルを使い、ボスを一人で討伐してたキリトだが。

どちらにせよ、まあ面倒なのに粘着されやすくなってしまった俺とキリトである。主に軍な、軍。

あいつらは、確かに人海戦術とかで大きく貢献はしている。しているが、装備のある中層上がりのプレイヤーなんて技術はたかが知れている。軍がまた攻略に関わってから、攻略組の中に死者が出始めた。

装備に技量が追い付かないんだ。どう足掻いても限界は来る。

攻略組の中で小さな問題になりつつはあることだ。キリトが二刀流でボスを攻略した時も軍が先行してボス部屋へ行ったところ、全滅の危機にあったから、という話だな。

「少なからず問題が出るかと思っただが、問題だらけだったな」

ひとりごちて柄に手をかける。ラフィンコフィンだってまだ活動中らしく、中層のプレイヤーがやられたりしているそうさ。

なんだかんだ、やはりクリアは早めにしないとイケないのは間違いない。

「ハチくん」

「ん」

ザン。と先手の一撃を与える。抜刀術のソードスキルで一体のモンスターは倒れ、俺はそのまま後ろへ引いて、アスナと位置を交換した。

「はあっ!」

入れ換わる形でアスナの攻撃が入り、そのままもう一体を倒して終わり。

レベル的には問題なくなってきたているようだ。ここのところ、モンスターのアルゴリズムがおかしくなってきたから、尚更レベルだけでも余裕を持てるようにしておかないといけないからな。

「……それにしてもハチくんもキリトくんもユニークスキル持ちかあ」

「アスナも持つててもおかしくなさそうだがな」

「何か条件があるのよね、きつと。それもわりと厳しめのやつが」

まあ、ヒースクリフも俺もキリトもどこかしら極振りしてるステータスで戦ってるからな。

それに相当するアスナもユニークスキルくらい持つててもいいと思うが……

「私はね、多分ハチくんがいるから取れないのかなって思う」

「どういうことだ？」

「私も敏捷振りだけど、ハチくんほど早くない。硬さ、速さ、手数 of 最高峰にそれぞれユニークスキルは発動してるから」

アスナの強さは本人の技術によるところが多いのは確かだ。正確無比の突き。あれは誰にも真似できないもので、あれだけで既にユニークスキルみたいなものと言える。

キリトの反応速度も尋常じゃないしな。一回圏内でちよろつと戦闘してみたが、あいつの俺の攻撃を反応して避けやがった。戦闘自体は何もなく引き分けだったが。あいつ、俺に攻撃届かないと見るや待ちになりやがったからな。俺も攻めるの止めておしまいだ。

「ま、安心しとけ。お前もキリトやヒースクリフみたいに充分化け物染みてるから」

「む、自分はどうかのよ」

「ぼっかお前、俺は普通だ。ステ極振りのごり押しプレイ。ゲームとしての強みを活かしてるんだよ」

「一太刀でモンスター倒すような人がよく言うわね」

「あんなもん、首狙って振っておしまいだろ。悩むまでもねえ」

キリトにこれと言ったら狙って首に当ててクリティカルを出すってことがどれほど

難しいかを力説されたが、相変わらず何が難しいかわからん。力技で手数押しの子リトとは合わないだけなんだろう。

「さらっと簡単に言わないでよね……私だってクリティカルは狙ってても上手くできないのよ」

「……そうなのか？」

「うん。ハチくんほどは無理ね。ふふ、ハチくんも充分な化け物よ」

「そうかよ」

何がおもしろいのか笑顔になるアスナを尻目に納刀して、俺は息を吐いて視線を前に向けたのだった。

Episode 6, part 2

— side アスナ —

「こんにちは、アスナ」

「ケイタさん、どうも。キリトくんもこんにちは」

血盟騎士団のホーム、その中の大きな一室に月夜の黒猫団のリーダーであるケイタさん。そしてこのゲームで三人しかいないユニークスキル持ちのキリトくんが入ってきた。

二人は既に部屋の中で椅子に座るハチくんの手を振って、その近くに座る。

ここのところハチくんは凄く話しやすくなった。別に優しくなったとかじゃないけれど、なんとなく、変わった気がする。

以前のハチくんは、きつと前の私のような感じだったのかな。余裕がなかったんじゃないかって思ってる。

ハチくん、自分を隠すのが上手だから断言できないけど。

「月夜の黒猫団もすっかり攻略組に必要なギルドになっちゃったわね」

「そりゃ、キリトを擁してるし、全体的にハイレベルプレイヤーが多いしな」

私の言葉にハチくんが返してくれた。こういうところは変わらずで、どうでもいいと思ってることにはひどく素直なのは同じだった。ハチくんにとって、ギルド間のバランスとかは関係ないからなんだろうと思う。

「ふん、我々ほどではないがな」

「はいはいそうですねー」

「……野良風情が……」

「クラデール、静かにしてください」

私のトラブル防止の為に付けられた護衛だけれど、それがトラブルの元になってる気がする。ハチくんは本当に気にしてないのか変わらさずぼうつと天井を見て、クラディールはハチくんを睨んでいた。

この人は腕もそこそこ立っし、悪い人ではないんだけど、ゲームに入れ込み過ぎてる気がする。みんな、リアルに戻れば一人の人間なのに。

「けどよ、ついでハチマンはソロのままここまで来ちゃったな」

ハチくん同様先に来ていた風林火山のリーダー、クラインさんが話題を変えるように言った。

そこは、ちよつと私も気になる。一人がいいって言っても、ここまでソロのまま来るのも珍しいかなって。

私もソロってだけでは限界があつたからここに入ったんだし。

「別ににも困ることはないからな。こうやって顔を合わせるのはまだいいとして、カースト内に入ってまでどうこうするのは無理。絶対無理」

相変わらずの人間嫌いでした。でも、顔を合わせるのはいいってことは、少しはよくなったのかな？

——ハチくんと話す度、もつと彼のことを知りたくなる。不思議というか、彼と話すとは何故か素直に話せてしまう。それは多分、ハチくんが人の負を肯定できる人だから、かな。捻くれてるけど、相応に許容の範囲が広い。

最初から人嫌いな彼は、だからこそよつぽどのがないと人を嫌わない。そもそも、元々どうでもいいから。

恐ろしいまでに感情を排他した考え方。でも、ハチくんが望むのは”本物”。それは、居場所なのか関係なのか人なのか。ハチくんにとって、それほどまでに焦がれる人がいるって知って、私はその人に嫉妬した。

好きか嫌いかで問われれば間違いなく好きだと言える。けど、それが好意かって言われるとわからない。

本当の彼が見てみたい。可能なら彼の”本物”の一人になりたい。けど、それは恋愛感情を含んでるわけではない……と思う。

「やあ、お待たせしたね」

「団長」

やってきた団長——ヒースクリフさんの言葉で私の思考は止められた。

定期的な攻略会議。それは攻略組の各ギルドのトップ、そして現状最強クラスのプレイヤーによって行われる。モンスターのアルゴリズムの変化などに合わせて、必要以上に被害を出さない為に。そして、最近は更にもう一つ、軍についても話す必要があつて、こうして集まるようになってる。

「攻略は順調みたいだね。皮肉にも、軍の人海戦術が功を奏しているようだ」

「……が、そのうち迷宮でも死人が出るぞ、あれは」

ハチくんが団長に視線を向けた。この攻略会議、団長が来るとハチくんはよく喋る。普段は全然話さないで聞いてばっかで、たまに横槍入れるだけなのに。団長とは親しいのかな……なんだか、ずるい。

「同意しよう。ソロプレイヤー視点から見ても危ういかね？」

「あいつらとパーティ組みたくはないな。次の死者は俺になりかねん」

「言わずとも、君を彼らと組ませることはないよ。このゲーム最速にして最大の単発ダメージを誇る影纏いに、周囲の処理を任せるなんて役不足だろう」

「過剰な評価でもあるがな」

「こほん、いいですか、二人とも」

いつもこうだ。こうやって言葉のやり取りを楽しんでいるみたい。

団長もハチくんくらい不思議な人だけど、だからこそ二人は何か共感することでもあるのかな。団長も、現在の軍を指揮するオウルさんには辛辣だ。

曰く「彼は本物にはなりきれず、偽者すら不可能」らしい。意味がわからなかつたけど、このゲームをまるで異世界のように扱って、現世と隔離して考えすぎてるようなあの人の言動は私も苦手だ。

「軍に対しては、静観を貫くしかないだろう。なるべく、無理はさせないようにする」

リンドさんの言葉に、みんなが頷いた。どこかで綻びが出るのを狙うしかないのが辛いところだけど、問題は山積みだから仕方ないのかもしれない。

ハチくんは、「最悪クリアすれば全部おしまいだ」って言ってたし。

「こちらの話もしていいか？ 先日、ラフィンコフィンのメンバーを三人ほど捕まえた」

リンドさんのギルドは自分のメンバーが襲われたのもあったか今ラフィンコフィンを追っているみたいで、これも私達の抱える問題の一つだ。人殺し集団を捨て置くわけにはいかない。

「ここに来て、奴等の人数も増えている」

「……P O H め」

あのリーダーの包丁使いと少し面識があるらしいキリトくんが低く唸った。

ラフィンコフィンのようなギルドになんて入ろうとするんだろう。私には理解がでない。

「そしてだが、軍はこちら方面にも人員を割いているようだ。何が狙いなのかはわからんが……」

「大方、手柄が欲しいのだろう。ここで名声を得れば一瞬にして成り上がりだ。私だつてそうだったろう、神聖剣でね。あれは狙ったものではなかったが。キリト君やハチマン君も同じだ。そもそも、オウル君は二振りの剣を使うとの話だったが二刀流はこの通りキリト君の物だ。彼は本物足り得ない」

「概ね同意してやるが、どうしたよ。よく喋るじゃねえか」

「私とて、人の子だよ。ハチマン君」

……だからもう、この二人は。

「へえ、てつきり天才タイプかと思ったがな」

「ふむ、その心は？」

「言ってることが正論しかないんだよな。気味悪いくらいに正しいの、お前。毛色は違うが似たようなのが身近にいたから、なんとなくな」

そう言って笑うハチくんは、どこか作ったような笑顔で団長のことを見つめていた。

Episode 6, part 3

「たあああつー！」

シリカの攻撃でモンスターが倒れた。もう最前線の迷宮のモンスター相手でもだいぶやれるようになってきたな。まあ、ボスに連れてく気はないが。

俺は今日、シリカに連れられて迷宮攻略に来ていた。巷で“竜使い”のシリカなんて呼ばれてるそうで、妖精扱いをされてるそうなの。

「どうでした？ ハチマンお兄さん」

「問題無さげだな。ずいぶん強くなった。が、一人じゃここに来るなよ？」

「はいっー！」

小町が天使ならシリカは妖精か。なるほど、いい得て妙だな。こりゃ妖精だ。

サチ、という例外はいるが、黒猫団はボス参加や単身の迷宮攻略は任意性らしく、また抜けて最年少のシリカは絶対不参加らしい。まあ、妥当な話だ。

シリカもこれだけ強くなったら変な男に寄られることも減ったそうで喜んでいた。

……そりやそうだ。もうレベルや装備、技量全部最前線クラスの腕で、そんなのにかっこいいと見せれるプレイヤーがどれだけいるって話だからな。

「つと、邪魔だ」

抜刀術の範囲ソードスキルで二体のモンスターの首を撥ねる。

最初の俺とキリト、すっかり立ち位置が変わっちゃったな、俺ら。いつの間にか俺が単発ダメージトップになって、キリトが手数最多になって、な。

ケイタ曰く「理想的な振り分け」らしいが。まあ、最速らしい俺がトップクラスの単発ダメージ稼いで、腕力極振りのキリトが手数で押すわけだからな。

「ハチマンお兄さんの攻撃、本当に見えないです……」

「剣速だけならアスナとどっこいだな。あいつもこれくらい速いぞ」

「そ、そうなんですネ……」

納刀して、辺りを見回す。ひとまず狩り尽くしたらしく、攻略の為に歩を進めることにした。

なんかすつかりシリカのお守りが板についてきた気がしなくもない。リアルお兄ちゃんならキリトの奴もなんだが、あいつら人助けとかしてるからなあ。そっちやるならこれの方が気楽なのは間違いない。

「あの、ハチマンお兄さんは強いってどういうことだと思いますか？」

「どうしたんだよ、藪から棒に」

「……最近、中層くらいの男のプレイヤーの人に話しかけられても私の方が強いことが多くて、強いね。って言われることが多くて……でも、強いって言ってもキリトさんやハチマンお兄さん達がいるから、わからなくて」

「さてな。今の俺はともかく、俺も元々強いってのと真逆の人間だ。悪いが、望む答えを出せそうにない」

「今のハチマンお兄さんはどうですか？ このゲームで、一番強い人の一人じゃないですか」

「それでも変わらないな。俺が強いわけじゃなくて、このゲーム内でのハチマンが強いんだ。ゲームが強いだけで今までが覆るわけでもない。俺は、俺らしく」

変化は認めよう。多少は素直に答えてやろう。が、俺の在り方は変わらないし、変えるつもりもない。

……前より取れる手札を選ぶようにはするけどな。サチとかケイタとか、雪ノ下や由比ヶ浜みたいじゃなくてガチで説教しに来るから怖い。

「むしろ、ハチマンお兄さんがなんで強いのかわかった気がします」

「……お前、話聞いてた？」

「はい！ 私も、私らしくです！」

「……あ、そう」

「むー、ハチマンお兄さん、冷たいです」

こいつ、年齢のわりに大人びてるんだか年相応なんだか、どっちなんだよ……

「——あれ、影纏い君じゃないか」

「あ？」

シリカの対応に悩んでいると、不意に後ろから声をかけられていた。

索敵圏内に人間がいたのはわかったが、まさかこいつか。

崩れやすい下手くそな仮面を付けた軍の今の指導者……

「オウルか、一人とは珍しいな」

「そんなときもあるさ。君こそパーティーかい？ 竜使いとご一緒とは、珍しいものだね」

「まあ、そこそこ付き合があるからな」

会話こそしているが、俺もあいつもお互いに眼中にいない。俺は元々興味ないし、こいつも俺の立ち位置にしか興味がない。

ヒースクリフの反応には驚いたが、このオウルはよくも悪くもエンジヨイ勢。いわゆるライトプレイヤーだ。壊滅した時のプレイヤー達こそちゃんど攻略をしてきたメンツだが、今の軍はライトプレイヤーの集まりで、その中でライトプレイヤーより少しできる奴つてのがオウルなわけだ。装備だけ整えたライトプレイヤーが最前線じゃ役に立たないなんてよくある話だし、現に軍からの死者がそれを物語っている。

……リアルでも死ぬってことをわかってやってる辺り、バカ野郎共ではある。

「さすがはソロプレイヤー。フットワークが軽いね」

「気楽でいいからな。責任も少ないし」

「それだけの力を持ちながら、ほんと勿体ないな、君は」

「いいんだよ。所詮こんなのゲームの中でしか役に立たねえ。いくら今を生きるとは言え、このままじゃ破滅しか待ってないこんなところでしか役に立たないもん、しがみつく必要もないだろ」

「……君は異質だな。黒の剣士や神聖剣すら自分の立場を理解した上で行動していることがあると言うのに、君はとことんそれを利用しない。君とてその気になれば上位ギルドの一つは作れるだろうに」

「いらねえよ、そんなもの。余計なしがらみを生むだけの面倒なものだし、俺の望む物はそこにはない」

俺が望むのはあいつらとの再会。そして、万に一つでも雪ノ下や由比ヶ浜にはこんなところについて欲しくない。

「とことん君は俺とは合わなそうだな……理解できない。この世界で、せつかく強者に選ばれた君がそんな思考だとは」

「俺のことを理解できる人間なんぞ、両手の指より少ねえよ」

キリトやアスナにだって理解されれるとは思わない。

こつちの俺は比較的行動派だからな。本物はもつと卑屈で陰険だ。ある意味じゃ陽乃さんが一番理解してるんじゃないやなろうか。あの人まじで怖い。

「ただのゲームならいいんだけどな、あまりお遊び感覚でやり過ぎるなよ。お前の言うこの世界は、しっかり人が死ぬ。理想に殉じるなんてくだらないことやるつもりなら、一人でやれよ」

こいつは、俺と真逆のタイプだ。自己顕示欲、見栄、名声。輝かしいものに目がなくて、それが欲しくて仕方ない。

葉山や三浦みたいな雰囲気も無さげだから、本来は背伸びしている生徒その一なんだ

ろうな。それがここに来て立場や場所を得てしまった。抑圧されてた感情が爆発したんだろう。と思っておくことにする。

「……直に、軍がまた主権を得る。その為の足掛かりを今用意している最中だ。そうして軍が復権した時に、君はまた同じことが言えるのかな」

「言えるさ。だからぼっちプレイヤーなんだから」

こいつの考え方は、時に危険だ。その足掛かりとやらがろくでもないことであることは間違いないとして、せめて巻き込まれないことを祈りたい。

「……悪いな、シリカ。待たせちまって。行くぞ」

「あ、はい」

ずいぶん気力を削がれたが、シリカのお守りを再開する為に俺はオウルを尻目に歩き始めたのだった。

……あー、余計な時間使ったな、
ったく。

Episode 6, part 4

人っていうモノは、おそろしく脆い。肉体的にもメンタル的にも。

ふとした拍子で死ぬこともあれば、ふとした拍子で殺してしまうこともある。

が、結局それはフィクションの話で現実的に俺とは関係ないと思っていた。このゲームの中ですら、少なくとも”殺人”は俺と無縁のはずだと思っていた。

——今、この瞬間までは。

「ハチ……マン……」

しゃがみこんでいたササマルの声が聞こえる。良かった、生きているらしい。

アスナの取り巻き——クラディールだったか。そいつの首が吹き飛ぶのを見ながらどこか夢心地でそんなことを思った。

飛ばしたのは、間違いなく俺だった。

「そういえば、二人はキリトとどうなんだよ」

なんとか72層のボスを死者なく倒して、焰雷のメンテをしにリズベットへ会いに行ったところ何故か黒猫団のホームへ連行されていた。キリトは今日はいなくて、不意にケイタがサチとリズベットへ質問を投げ掛けた。

投げ掛けたつてより、爆弾投下か。

「……………どうもこうも……………」

「まったくよ。あの朴念仁」

だろうな。なんて俺とテツオが二人して領いた。

キリトは鈍い。感情とは無縁だった俺ですらわかるくらい鈍い。地味にファンクラブなんてあるらしいんだが、それでも気づかない。

「そろそろ二年近く経つとは言え、あいつ思春期真っ盛りで年齢止まってるだろ。色恋

とかより優先しちゃうこととかあるんじゃないのか？俺はそれすら無縁だったからわからないが」

「……ハチマン、あんた一言余計なのよ……」

リズベットに睨まれるが知らない。だって本当に俺知らないし。

折本の件とか、ちよつともう思い出すのも難しいくらいいろいろ起きちまったからな。

「そういうアンタこそ、最近アスナとよく迷宮攻略してるそうだけどどうなのよ」

「え、そうなんですか!？」

妙に食い付きのいいシリカを横目にため息を吐いた。あー、こいつくらいの年齢（つつつても正確にはわからないけど）はそういうの大好きな年齢か。

「文字通りの迷宮攻略だ。それに俺から誘ってるんじゃない。フラツとあいつとエンカ

ウントした時だけパーティに誘われてるんだよ」

最近、そのエンカウント数が増えてる気がしなくもないが、あいつも攻略をやってるってことなんだろう。

むしろヒースクリフの方がどうでもいいところでエンカウントしてる気がする。

「ふうん」

残念ながら、俺に浮いた話なんてあり得ない。専業主夫は夢のままだが、雪ノ下や由比ヶ浜だつてそういう目で見えていないのにアスナとかをそんな目で見れるかって話だ。雪ノ下や由比ヶ浜は大切な奴らだが、恋愛感情が関わつてくるとまた話は変わる。そこまで考えられないし、そもそももうあいつらにも彼氏くらいいるかもしれないしな。ちよつと切ないが、いたら素直に祝福してやろう。

小町には……できてたらどうするか……お兄ちゃんまたゲームの世界に没頭しそう。

「ん？」

ピコン。という電子音と共にメールが届いた。
宛先はヒースクリフ。至急、血盟騎士団のホームに來いとのことらしい。ケイタにも届いたようだ。

「ハチマン」

「ああ、来たぞ」

「なに、どしたの?」

「ヒースクリフからの呼び出しだ。至急ってことだから急ぎらしい。もしかしてもうボス部屋見つかったのかもな」

「だといいな、行こう。ハチマン」

「ん」

まだ楽観的に、振り返ってもここでは気づけないと言い訳できるくらいに穏やかな時の中で、俺は黒猫団のホームを後にしたのだった。

「よう、ヒースクリフ。急ぎってどういうことだ」

俺とケイタが最後だったらしい。血盟騎士団の会議室にはこの前の会議のメンバーが揃っていた。

なんとなく、雰囲気が悪い。

「あまり嬉しくない報せだ。近日、軍が大規模なラフィンコフィン討伐隊を組むそう。どうにも、集まっている場所を見つけたらしい。既にかなりの有志が募っているという噂だ」

「それが、俺らにどう関係しているんだよ」

「有志のほとんどが攻略組だ。我々も参加しないわけにはいかない」

「……なるほどな」

前の階層にて、オウルが言っていたのはこういうことだったのか。

「軍が主となって、攻略組を使ってラフィンコフィンを討伐する、か」

「上手くやられた、と言えよう」

「そもそも、やれるのかよ」

「彼の先導力はそれなりだね、結構な数がやる気になっている」

「……めんどくせえ……」

「ハチマン……俺は」

「あー、わかってる。行かないわけにもいかねえ」

特に、キリト達が行くのならせめてこいつらは死なせないようにするべきか。

……はあ、こんなに入れ込むから面倒なことになるんだろ。できるのか、俺に。

「持てる最高の装備で、とのことだ。彼は殺し合いを所望らしい」

「あいつがまともにはできるとは思えないがな」

「では、ハチマン君はどうかね」

「さあな、案外最初の一人殺っちゃったらどうにかなるんじゃないの?」

……ジョークだよジョーク。なんで全員こつちを見るんだよ。

「……冗談だ。部位欠損させときゃ問題ないだろ。俺に人殺す度胸なんてないからな」

俺はそんなのできる人間じゃない。本来ならガタガタ震えてるのがお似合いな人間だ。

——困ったことに、震えなんてものが一切来ないせいで、自分で言ってることに首を傾げることとなっているが。

「で、だ」

会議は終わって月夜の黒猫団のホームにて。ラフィンコフィン討伐に行くメンバーを決めていた。

ソロの俺は参加確定で、黒猫団からはキリト、ケイタ、ササマルの三人が出るらしい。今回はサチすらも参加させず、待機にしておく。当たり前だな、本当なら俺だって参加したくない。

「みんな、気を付けてね」

「やばかったら逃げるよ。な、ササマル」

「おう。キリトとハチマンもな」

「もちろんだ」

「俺は最初から逃げてたいけどな」

「……ほんつと、一言余計よハチマン。だから目が腐ってるのよ」

「お前も一言余計だぞ、リズベツト」

「あはは、まあ、みんな命大事に。だな」

ケイタがそう言って話を締めた。……多分まだ、俺もゲーム感覚が抜けてなかったんだらうな。

武器を持って人間同士で戦う。今までと同じで簡単に行くと思っていた。

これは集団戦で、襲われる。とかじゃない、間違いなく現実の殺し合いだっということを、忘れていた。

Episode 6, part 5

「みんな、準備はいいか！」

とある階層のフィールドに、俺達は集まっていた。

ヒースクリフはやることがあるそうで結局来ず、代わりにアスナと取り巻きのクラディール他数名が来ていた。

血盟騎士団としてはそこまで参加の意はないらしい。

オウルの言葉に軍を始め一部のソロプレイヤー達が声をあげた。ここで名をあげるとか、そんなバカげた話がさつき聞こえた辺り、俺の不安は募る一方である。

「……ハチマン、無理するなよ」

「お前こそな、キリト。俺やお前はその気になれば一撃が必殺だ。なるべくなら、人殺しになりたくないだろ」

「……だな」

俺の抜刀術やキリトの二刀流なんてものは、基本的に他とかけ離れた性能をしている。

だからこそ、迂闊に使えば即殺しかねない。

「……はあ、逃げたい」

こんな独り言を言える辺りまだ余裕があるな。なんてぼやつと考えながら、俺は先行する軍の後へとついて行った。

「大丈夫？ ハチくん」

「お前こそ、よく来たな。……あまり薦められるもんでもないぞ、これは」

「わかってる。けど、来ないわけには行かないの。団長にも頼まれてるから」

「あいつはどうしたんだ？」

「……まだ内緒だからね？　もしかすると、シンカーさんの行方がわかりそうなの。キバオウの行方も。団長直々にその調査らしいわ。軍が手薄な今こそ、らしいのよ」

「なるほどな」

あいつはあいつで動いてるのか。まあ、目的があるなら好きにやってもらおう。しばらく、目の前の出来事から意識を離すのは難しそうだしな。

「……」

「なんだよ」

「……ふん、せいぜい働くといい、野良猫が」

「クラデール！」

めんどくせえな……とりあえずアスナから離れることにしよう。

おー、説教かましてるかましてる。……なんだよ、ほんとにみんな余裕だな。

「そろそろだ、警戒するように」

オウルの声が聞こえてくる。ふむ、もう着くのか。奴らのアジト、だっけか？

一応オレンジギルド用に外にもホームは作れるようにしてはあるんだが、なるほど、こんな森の奥深くじゃあなんともしゃらつぽい。

念の為に索敵スキルを発動させる。させて、俺は絶句した。

「来るぞー！ 構えろー！」

キリトの声が幸いして、全員なんとか反応した。

索敵範囲内に凄まじい数のアイコンと、そして飛び出てくるオレンジプレイヤー達。

ああ、これはつまり……

「バレてたってことか……っ！」

目の前に出てきた奴に抜刀術で両手を斬り飛ばして、そのまま殴ってダウンさせて放置する。

このアイコンの群れには……いた。以前見た幹部の連中だ！

「影纏い、さすがだ、やる」

「相変わらずおつかねえ奴だな。情報って大事だわマジで。おら影纏い！ 黒の剣士！

俺らとやりたけりゃとつと来い！」

「言われなくても、そうしてやるよ！」

雑魚はどうでもいい。あの二人を捕まえちまえば——

「ハチマン！」

「っ！」

「こつちも総出で迎えてやってんだ。ありがたく受けとれやあつ！」

後ろからの攻撃を避けて構える。守ってばかりで攻められない。殺意の差と、意識の差が大きい。

くそ、邪魔くせえ。

「みんな、慌てずに——っ！」

はなから期待してないオウルは案の定だ。せいぜい士気の為にも死ぬんじやねえぞ。あいつが死んだら戦線は崩壊だ。

「どうするか——」「うわあああああつ！」

大きな悲鳴と共に、拮抗は一瞬にして崩れた。

俺がそちらを向いた時には、ポリゴンが消え去る瞬間だった。

それは、おそらく悲鳴の主だ。

「クラディール……あなた……」

「残念ですねぇ、アスナ様。ラフィンコフィンが全員最初からオレンジとは限らないのですよ」

わかりやすく述べれば、裏切り者がいた。アスナの取り巻きのあいつだ。

腕にはラフィンコフィンのマーク。ハイレベルの攻略組でありながら、あいつは人殺し集団の一人だったわけだ。

……これは、まずい。

「クラディール、よく、やった。お前ら、戦線を、崩せ」

この不意打ちも、こいつを通して伝わっていたのだろう。

浮き足立っていた戦線は裏切り者の存在により一層足並みが揃わなくなった。少なくとも、このままじゃすぐに次の死者が出る。

それだけは、どうにかして防がないといけない。攻略組だろうと人間だ。このままで
は――

「……ダメだ。さすがにそれはできない」

方法ならある。奴らに現実を突き付ける。こちらも殺す手段は同じで、あいつらも殺される側であることを教える。

でも、無理だ。それは俺の……比企谷八幡のやり方じゃない。それは卑屈でも捻くれでもない。真っ直ぐに間違ったやり方だ。

「ちっ……」

足や腕を斬り飛ばすことはできても、殺すことまではできない。
時間もない、手札もない。このままじゃじり貧じゃねえか……

「ハチマン！ 後ろ！」

「わかってる」

後ろから来た奴の足を斬り飛ばしてダウンさせる。

その、瞬間的に恐怖に歪む顔がとてつもなく不快だった。怖いなら、わかってるならやろうとするなよ。

「うわあつ！」

「ササマル！」

「え……？？」

地面に座り込んだササマルは、武器も落としてクラディールを見上げていた。

おい、なにやってんだよ。早く逃げろよ。なんでそんなゆつくり見上げてるんだよ。

「目障りな猫共だった。だから、貴様から先に葬ってやる」

「た、助け——」

「やめろおおおおつ！」

耳がおかしくなりそうなキリトの叫び声に反射して、俺の身体は飛び出した。刀を納刀して、止まることなくクラデイルの真後ろに現れる。

そして、その首目掛けて俺は——

——抜刀術のソードスキルを、振り抜いた。

「……………あ？」

綺麗に決まった斬撃は、クラデイルの首をこれまた綺麗に斬り飛ばしていた。

「ハチ……………マン……………？」

ササマルの声が聞こえた。良かった、死んでない。

良かった……………この夢心地のような中で、その事実だけに安堵する。

ああ、認めよう。こいつらに死んでほしいわけがない。死なせない。

——案外、最初の一人殺っちまったらどうにかなるんじゃないやねえの？

数日前の冗談は、俺に、俺自身に降りかかってきた。

「……お、おい、何するつもりだ」

「わかってるだろ、今まで自分がしてきたことなんだからよ」

さつき足を斬り飛ばした奴の前に立って、刀を振り上げた。

比企谷八幡は間違いでも、影纏いのハチマンなら間違いじゃない。

皮肉にも、今この瞬間の俺（はちまん）は俺自身（ハチマン）と驚くくらい思考が一致していた。

「や、やめろ！ やめろおおおおっ！」

「うるせえ」

一振り。それでラフィンコフィンの男はポリゴンとなって消えた。
沈黙。どうしたよ、お前らがやってきたことだろ。

「因果応報だ。いつか自分に返るってわかってたろ。」

わかってなくてもいいけどよ、俺は、俺達にはクリアするっていう目的がある。お前からみたいな半端者がくだらねえ感情でこんなふざけたことをしてるってなら、

——こうやって、お前らを殺すぞ。ラフィンコフィン」

「……そ、そうだ。俺達はクリアするんだ」

「覚悟を決めろ！ ハチマンに続けえっ！」

足並みは揃った。結局、殺される側であることに気づかなかったあいつらは、殺す側の相手は上手くできない。中層プレイヤーのハイレベルとは言え、単純な戦闘なら攻略組には敵うことはない。

「死ねえっ！」

「……お前がな」

ハチマンに斬りかかった奴の首が飛んだ。

後ろから斬りかかったはずなのに、その後ろから首を斬られて倒された。

影纏いの、このゲーム最速の強さに取り囲んでたラフィンコフィンのメンバー達が一歩下がった。

本気で殺しに来るハチマンと向かい合って、怖くないわけがない。

ハチマンは、いつもとは違う……本当に無表情だ。ゲームの中なのに、背筋が寒くなるような感覚がする。これ以上は、いけない。

「ハチマン！」

「つと、行かせるかよっ！」

「っ!？」

目の前に二人、ラフィンコフィンのメンバーが現れた。
くそ、こんな時に……ハチマンにこれ以上人を殺させたくないのに!

「死ねや! 黒の剣士!」

……限界があった。精神にも、動きにも。二対一で、ハチマンをほっとけなくて、叫びたいほどモヤモヤして。

——そもそも、俺は圈内事件の時に覚悟を決めたじゃないか。またハチマンに任せるのか。それで、友達なんて言っていないのか。

「邪魔を……するなあつ!」

二つの剣を前に突き出す。

それは、二つの身体を貫いてポリゴンへと変えていった。

……殺して、しまった。それも、二人同時に。

「……………うおおおおおつ！」

振り返るもんか。今はその時じゃない。綺麗事なんて言えるわけない。
でも、それでも守らなきゃいけないものがあるんだ！

「どけえっ！」

腕を、足を斬る。最低限のダメージこそ考えるものの、邪魔になるならすぐに斬り捨てる覚悟を決めて。

「……………そこまで、だ。黒の、剣士」

「おまえ……………」

「リーダー不在の今、代わりに、相手に、なろう」

ラフィンコフィンの幹部。赤目のザザ。
まさか、幹部直々に来るなんて……

「すぐに終わらせてやる……」

「それは、こっちの、セリフ。お前を、殺す」

そんな言葉、同じ言葉を言うハチマンの方がよっぽど怖い。
負けてたまるか、こんな奴に。

— side 八幡 —

「ぐあつ……く、くそ……」

味方の死者も多い。今、俺の前にいた奴が刺されて死んだ。
やはりロクなもんじゃねえ。見ろよこれを、最低最悪の殺し合いだ。気がつけば俺も
三人殺してる。

「いや、これで四人か」

「なっ……」

反応させる暇もなく、一太刀で斬り捨てる。
間違っつていようと、切れる手札を切ってしまった。なら、それにいつもの打算と計算を合わせよう。

「死ね」

「っ！」

不意の後ろからの斬撃を回避する。見れば、あの幹部のジョニー・ブラックが立っていた。

「どうよ、お前お得意の攻撃だろ？　これ」

「そうだな。初めて他の人間にやられたわ」

「どっちが不意の攻撃に優れてるか、勝負しようぜ、影纏い！」

奴の得意武器はナイフ。さつき気づけなかったのは隠蔽スキルもかなり上げてるの
だろう。

なるほど暗殺者らしい。らしい、が。

「そういうのを正面から堂々とやるには、相手が悪かったんじゃないやね、お前」

「あ？」

俺の攻撃は、隠蔽スキルに頼る不意打ちじゃない。敏捷性による攻撃だ。

隠れるわけじゃない。回り込むだけだから、あいつが俺に触れるには俺より速いか、キリトより反応が良いことが前提になる。

「お前にこれ、反応できるのか？」

「っ!？」

真横に回って斬りかかる。右側から行ったのは失敗だったか。ちょうどナイフでの防御を許してしまった。一応、そこそこ反応できる技量はあるらしい。

「おいおいおい！ なんなんだそれは！」

「お前らがよく俺のことを呼ぶ名前の原因だよ」

影纏い。だいぶ呼ばれ慣れたその名前の理由である、隠蔽スキルと敏捷の合わせ技。こいつは、俺の攻撃をなんだと思っていたのか。

「同じとか思ってたみたいだが、俺とお前のじゃ全然違うみたいだったな」

納刀して、斜に構えてジョニー・ブラックを見つめる。

一応反応はできてるが完全には無理そうだ。ならごり押しでもいいんだが、こんな殺し合い、とつとと終わらせるべきだ。これ以上無意味な死者を出す前に。

だから、反応しても何もできないようにすればいい。キリトは武器破壊なんていうシステム外のスキルをやつてのけたことがあるそうだが、俺はもつと単純だ。

「——行くぞ」

「かかって来いよー！」

本気で走って、あいつの真正面に踏み込む。

咄嗟に攻撃を防ごうとして、奴はナイフを振り上げた。だから、俺はその腕へと抜刀術を放っていた。

「なにっ!?!」

「毎回防がれても面倒だからな、これで何もできないだろ。」

「——じゃあな、もう会うこともないだろうよ」

そのまま刀を横に構えて、首へと狙いをつける。

そして、それを横へと一文字に振って、横から唐突に紛れてきた剣に防がれていた。

「ハチマン！ ストップだ」

「キリト……？」

攻撃は、キリトによって防がれた。

見れば、あれだけ騒がしかった周囲がとても静かになっていて、どうやら戦闘が終わったらしいことを教えてくれる。

もう一人の幹部、赤目のザザも片膝をついていた。

「終わった、のか……？」

「ああ、もう終わりだ。だから、大丈夫だから……」

「……ん、そうか」

納刀して、大きいため息を吐いた。

——感情がごちやごちやしていて、少しどうなのかわからない。

きつと後から凄い後悔するんだろうな。なんてまだ他人事のように思って、俺は力を抜いたのだった。

Episode 6, part 6

「ハチマン！」

「ササマル、大丈夫だったか？」

「ハチマンのおかげだよ。けど……ハチマン、俺のせいで……」

「気にするな。遅かれ早かれ一人くらいは間違いなく殺ってたろ。お前のせいじゃない。俺が勝手にやったことだからな」

「でも……」

「俺は、お前を助けられた良かったと思ってる。お前のせいで殺してしまったってなら、殺さなければお前が死んでたんだ。せつかく助かったんだから、そんな風には思わないでいてくれ」

全部終わって、アジトらしき場所の前で泣きそうなササマルにため息を吐いた。戦ってる時から、よく物語とかにある興奮とかも特にない。けれど、俺のやったことは間違いではない、とも思えない。間違いとわかって、それでも選択した。

「悪いな、一人にさせてくれ」

「あ、うん。ハチマン、本当にありがとう」

「俺からも礼を言うよ。ハチマン、ササマルを助けてくれてありがとう」

ケイタとササマルに片手をあげて、俺は二人に背を向けた。

キリトは……凄いな、ちゃんと事後処理を手伝ってるのか。

「……っは」

少し離れたところで、俺は誰にも見えなくなってから木に寄りかかった。……やつ

た。

この手で、人を殺した。血も飛ばない、消えるだけの現実感のない死だけど、それも、俺は人を殺した。

「小町、お兄ちゃん人殺しになっちまったよ」

これで本物の外道だ。四人も殺せば言い訳もできないだろう。

誰かが肯定したって、俺が否定する。クラディールだけでもいいはずだった。それなのに他に殺したのは、間違いなく俺に殺意があつたから。あいつらに対して、尋常でない不快感と怒りを感じたから。

本当に、理性の化け物が聞いて呆れる。

「ハチくん……?」

「……アスナか」

「あつち、なんか凄く騒がしくて……私はそういう気になれなくて離れてきたの。ハチ

くんも、ここにいたんだね」

祝勝ムードと言うか、討伐隊は勝ちに盛り上がりつつはいた。

ラフィンコフィンを潰せたのは確かに大きいが……向こうは10人を、こちらは5人を超える死者が出てるのは素直に喜べない。

「……ごめんなさい、まさかクラデールがあんな……」

「こつちこそ、お前のとこの人間を殺しちまって悪いな」

「ハチくんは悪くない！ ハチくんが悪かったら、私は……裏切り者を連れてきて、何もできなかった私はどうなるの？」

「無理に何かをする必要もない。いいんだよ、それで」

こいつもすぐ責任を感じて重く考えてしまうタイプらしい。

俺のことは俺の問題で、誰かのせいだなんて思うつもりはないってのに。

「…………お、おい、アスナ…………？」

不意に、正面から軽い衝撃を受けた。アスナに、抱きつかれているらしい。

「それでも、何かをしなきゃって思うの。人を殺すとかじゃなくても、何かしなきゃって…………じゃなかったら、私は自分に嘘をついちやうから。そうしなきゃダメなの」

「そ、そうか…………」

「ハチくん、キミは否定するかもしれないけど、私はキミを肯定する。キミの正しさを肯定する。もちろん、悪いことは怒るけどね」

「…………お前も変わり者だな」

「これでも血盟騎士団の副団長ですから」

間近で俺を見上げるアスナは、少し泣いていたようだった。
……そろそろ、限界だな。

「さて、アスナ」

「なに？」

「離れてくれ。俺は女にこうやって貼り付かれることに耐性がない。ぶっちやければ、
こういうの、無理だ」

「ええー……そこでそんなこと言っちゃうの……」

「何を言っただけじゃなかったんだよお前は」

「そ、それは……」

何故そこで顔をそらす。

「……まあ、幾分か気は晴れた。俺は戻るから、離れてくれ」

「……うん！」

人殺しになってしまったことは忘れられない、が。やはりどういうことか、俺はここではぼつちにさせてもらえないらしい。

……多少は慣れてきたがな、こういうのも。

「影纏い君」

戻った先で、オウルに話しかけられた。結局、こいつは役に立たなかったな。

死ななかつただけ御の字か。死んでたら、負けてたのは俺らだった。こんなのが大将つてのがそもそもおかしいんだが。

「ありがとう、君が率先して敵を倒してくれたおかげで戦線を回復できたよ」

「誉められることじゃねえから気にしなくていい」

「相変わらずだな、君は。にしても、血盟騎士団から裏切り者がでるとはねえ」

「あんなもん、交通事故みたいなものだ。今もし俺が裏切り者なら、お前は俺に殺されるんだぞ」

「なるほど、理屈はわかる。が、周りはこれをどう評価するかな」

「……どうでもいい。じゃあな」

ダメだ、この期に及んでなお自分への評価を気にするこいつは、絶対に先になつて障害になる。

……あー、しばらく刀も持ちたくないし、引きこもりたい。

いつもよりも沈んだ調子で、俺はため息を吐いたのだった。

Episode 6, part 7

「ほら、ハチマン。次あれよあれ」

「リズベツト……お前ほんとに人使いの荒い奴だな……」

ラフィンコフィン討伐戦から二月ほど経って、現在74層。攻略組の建て直しなんかもあってか少し時間がかかってしまったが、73層のボスは死者なく倒せたらしい。

らしいってのは、俺は参加してないから。あれからしばらく、刀を持つことをやめた。どうしても斬った時の、あの感情を思い出して自己嫌悪が止まらなくなるから、攻略を一旦やめることにした。

なんであれ、俺は人を殺した。それはじわじわと日にちが経つごとに俺を締め付けた。

雪ノ下や由比ヶ浜きに合わせる顔がないとか、小町になんて言おうとか、あれはいつも通りの俺のやり方ではないせいとか、本当に俺を苦しめた。今でも自責と自己嫌悪は止まらずにはいる。

が、幾分かまともにはなった。

「あれよあれ。あいつ倒してもらっていい？」

「はあ、どいてろよ」

目の前のドラゴンに向かって、俺は抜刀術のソードスキルを発動していた。

二週間ほど経った時に、アスナによってホームから連れ出された。

同情ならいらないと突っぱねるつもりだったんだがあいつはあいつで自分を追い込んでいるようで、それならいかと付いていった。攻略にまるで関係ない、観光のようなことをやってるうちに、やればやるほどリアルへ戻りたくなくなって、一月経った頃には刀を持てた。このゲームへの嫌悪感も増したけどな。

今日はリズベットに強制連行されて69層のフィールドを延々と行ったり来たり。ドロップする素材が欲しいんだそうだ。

キリトはサチ達と攻略だそうで、リズベットはそれにずいぶん残念そうに肩を落としていたが。

「ほら、終わったぞ」

「……毎度思うけど、四強つてのはどうしてこうも化け物揃いなのかしらね。あんたと言いキリトと言いいアスナと言いい。ヒースクリフもやばいんでしょ？」

「これくらいのなら、今の攻略組なら誰でも倒せるだろうよ」

「だとしても一太刀つて何よ一太刀つて！ 私の武器つてすごい！ とでも言えばいいの？」

「まあ、実際お前の武器はだいぶ強いが……」

「当たり前よ！ じゃなくて、あんなおっきいドラゴンも一撃なんてできるのね」

「これはユニークスキルに依存してる所が大きいかけどな。抜刀術は本人の回避以外一切の防御手段を持たない代わりに一撃の重みを増してるからな」

「ハイリスクハイリターンってわけね。なんていうか、ハチマンぼくないわね。あんた、ローリスクミドルリターンとかのが好きそうな感じなのに」

「甘いな、ノーリスクローリターン以上が一番いい。ノーリスクってのがミソだ」

「まったく……そのわりによく働くんじゃない」

「リアルに早く帰りたいからな」

「それもそうね。って、あんた一応年上なんだっけ？ リアルでもこんな感じで喋るから、ヨロシク」

「好きにしてくれ、そういうのは気にしてない」

一応ってなんだよ一応って。まあ、俺と同世代っぽそうなのはケイタ達くらいだからな。

先輩か……一色の奴はどうなったんだろうな。あざとく上手くやれてそうだが。

今じゃ先輩か、あいつも。うわ、思いきりパシられそう。

「ん、ならそうするわね。どうもハチマンはそういう風に見えないのよねー。戦ってるのを見ると確かおかしいくらい強いんだけど、普段が普段過ぎて」

「ほっとけ」

「話しやすいのよね、あんた。捻くれてるけど正論多いし、なんだかんだ相づちもしてくれるじゃない」

「お前らが反応するまで話振ってくるからなんだが」

「それだけ頼りにされてるのよ。何かあったとき、実は結構中心で解決とかしてるタイプでしょ、ハチマンって」

「さあな。そういう問題に直面しないようにぼっちでいるんだから、よくわからないな」

「よく言うわ。さ、次行きましょ！」

まだ振り回す気か……

実を言えば、それのおかげで気が紛れてはいるんだけどな。

「よっし、大漁大漁。ありがとね、ハチマン。これでアクセ作って渡すから」

「いいのか？」

「さすがにボスと連戦させちゃったからね」

まあ、それなら良しとしておこう。以前焔雷を製作してもらったときの言葉で連行されてきたのかと思っただが、貰えるものはもらっておく。

「そう言えば、ハチマンは出ないの？ あれ」

「あれ？」

「有志プレイヤーによるデュエル大会。キリトはヒースクリフが出るからって凄いやる気になってたけど」

「あー、あれな。俺はパスだ」

「まあ、ハチマンならそうよね」

全プレイヤー達への気分転換も兼ねたデュエル大会らしい。発案者はオウル。

あのラフィンコフィン討伐で軍の地位はそれなりに上がった。それで何を思ったのかこんなイベントを考えて、挙げ句今回はヒースクリフも乗り気ときた。

まあ、あの自己顕示欲の塊としてはまともな案だとは思うが。

「影纏いの参加を望む声とかありそうなものだけだね」

「俺がそんな期待に応えると思うか？」

「……それもそーね」

オウルから参加の誘いは来たものの、もちろん断った。面倒なものもあるが……人間に切っ先を向けたくない。

あの時を思い出してしまうのが嫌で、俺は対人を断った。

「アスナも出ないらしいし、優勝はキリトかヒースクリフだろ」

「そうなるわよね。見に行くの？」

「わからん」

あいつらの戦いに興味はあるかもしれないが、そこまで見たいわけでもない。保留の意で答えて、俺は息を吐いたのだった。

Episode 6, part 8

「やあ、奇遇だね、影纏い君」

「……うす」

珍しく、俺のホームがあるこの層でオウルと遭遇した。

こいつも相変わらずと言うか、所々プレイヤーの気分転換になるような催し物はやるんだが、帰結する所が自己への評価。つまるところ自分の株上げだからなんとも言えない。

それでいて上手く煽ってちゃんと成果を出してしまう辺り、恵まれてるといえるか、運がいいというか。

人の扱いが上手な相模とでも言えばいいか。本心の隠し方もあいつよりは上手いだろう。自分にできることで最大限自己の利益を得ようとする。ネトゲのプレイヤーとしては典型だが、間違いではない。

……ネトゲならな。

「デュエル大会、そろそろだけど君はやはり参加しないのかい？」

「ああ、残念ながらも。抜刀術の攻撃力じゃ危険すぎる」

建前としてはこれだ。面倒ということも伝えてあるが、この建前も嘘ではない。抜刀術はそれほどまでに攻撃力が高い。

即死させてしまう危険性もある。だから余計に人に切っ先を向けたくないんだ。

「ラフィンコフィン討伐における英雄の参戦を待ち望む声も大きいんだけどな、残念だ」

「何が英雄だ。一番殺したやつって言うてくれていいんだぞ、別に」

英雄なんてのは嘘だ。そんなのは認めない。

俺を肯定すると言ったアスナにだって肯定させない。

ここはゲームだ、でも日本だ。

向こうに戻って、俺は果たしてどんな顔して歩けばいいんだろうな。

「自分を卑下しないでくれよ。君がいなかったらみんな危なかった。これは事実なんだから」

「……そうかよ」

「こいつ、こういうところで話は盛らないんだよな。だからこそ、あの謎の扇動力が生まれるのかもしれないが。」

「そーいや、シンカーやキバオウはどうしてるんだ？」

「……彼らかい？ 意外だね、君からその名前が出るとは」

「シンカーは見たことしかないが、キバオウとはまあ、話したことまではあるからな。軍と言えればあの二人ってイメージだったからな」

「……おお、なんとかく会話を繋げちまって出した話題だったんだが、琴線に触れたら

しい。

オウルの表情がわかりやすく歪んだ。

「彼らがまともな運営をしてたとは思えないけどね」

「それに關しては同意してやる。つつてもシンカーは中層や初心者の後援に力を注いでいたそうだが」

「そう、あんなにも大規模なギルドをね。もったいないと思わないかい？ キバオウは立場と身の程を弁えずに無理をして自滅した。シンカーは大規模なギルドのリーダーという立場にいながら日陰に止まった。わかってない、彼らはわかってないんだ。力は使うべきで、身の程は弁える。そして、チャンスは自分で作っていく。そういうものじゃないか、こういうのは」

「その結果、死んで終わるかもしれないんだぞ。お前わかってんの？」

「その線引きはしっかり弁えているさ」

「……誰もお前のことを言ってるよ」

ひとりごちて、俺はため息を吐いた。こいつはやり方さえ正しければ本当に攻略の為のいい扇動役にはなっただろうな。が、ダメだ。少なくとも自分の野心のために周りの命をなんとも思わないこいつの言動は少なくとも今リアルに焦がれる俺に対して嫌悪感しか抱かせない。

らしくないと言われようと、こんなくだらないうゲームで命を落とすなんて、あつていいわけがない。認めるわけにはいかない。

負け続け、負けに慣れた俺でも、このゲームにだけは負けてはいけない。今ここがリアルだとしても、ゲームだと言うことだけは認識し続ける。

絶対に手の届かないこのクソゲーの開発者への、せめてもの悪あがきだった。

「……茅場、か……」

思えば、あいつは何を思ってこんなことをしたのか。

今ごろ俺達が必死に足掻いてるのを見て楽しんでるのか。……どこで？

「影纏い君……？ ……なあ、ハチマン君、いきなり黙ってどうしたんだ？」

「……なあ、お前はここを肯定してるよな。居心地良いってさ」

「え？ ああ、せつかくこんな世界へ来たんだから、相応のものを求めてもいいかなって思っているよ」

「茅場はどう考えるだろうな。お前ならどうする？」

「俺？ 俺が茅場の立場なら……まあ、間近で見るとどうだろうね。俗物のようかもしれないが」

「放火犯は現場に残って燃えてるのを見てる。つてのに近いな。気持ちにはわからんでもない。自分で企てたはずらの末路くらい、見てみたいからな」

……そんな相手がいなかったから結局一度たりともそんなのやったこともやられた

こともないけどな。

いいし、今度由比ヶ浜辺りにやってやるし。……雪ノ下にフルボッコにされそうだが。

「だよねえ……つて、まさか、茅場もここにいてると思ってるのかい？」

「いてもおかしくはないだろうな。断言はできないが」

「なるほどね。……そうか、確かに。それなら……ありがとう影纏い君。とても有意義な考察ができたよ」

「そりゃ良かったよ。なんだ、もう行くのか」

こういう社交辞令が言える俺マジ大人。

とつとと行ってくれ。俺は有意義でもなんでもねえ。

「当初の目的である君の大会勧誘は果たせそうにないからね。でも、もう一つ目的が見つかったからそちらに行こうかと」

「あ、そ。なら良かった。んじゃま、頑張ってくれ」

「もちろんさ。全てが終わったら改めて君を軍へ勧誘しよう」

「断らせてもらおうだろうけどな」

「それはどうかな。では、また」

足早に去っていくオウルを見届けて、俺は空を見上げた。

あいつ、いきなりテンション上がってどうしたんだか。

「……にしても、茅場がここにいる、か」

あいつは空の向こうのリアルで俺らを見てるかと思ってたが、ここで俺らを見てもおかしくない。

ゲームマスターたるあいつなら死なないよう弄ることもできるだろうし、保険はかけ

放題だろう。

「――ふざけやがって」

もし、その茅場を見つけた時。

この切っ先を人へ向ける嫌悪感すら振り切ってしまいそうなくらいの憎悪を茅場へ向けてる俺は、果たして理性の化け物のままでいられるのだろうか。

……その自信は、あまりなかった。

Episode 6, part 9 (☆)

——小町 side——

「やつはろー、小町ちゃん！」

「こんにちは、小町さん」

「やつはろーです、結衣さん、雪乃さん」

秋に差し掛かった頃、小町ことわたくし、比企谷 小町はサイゼの一角に陣取る結衣さんと雪乃さんに会いに来ていた。

一時期先輩だった二人は今華の大学生！ 結衣さんは髪の毛の色はそのままに伸ばし気味で雪乃さんより少し短いくらいまで。露出のあつた肩はすっかり服で覆われて、すっごい大人っぽくなつて。小町にはいろいろ絶対にできない雰囲気で、とっても素敵です。

雪乃さんも、高校の時からさほど変わってないけど、前より少し背が伸びたそうで、前髪もちよつと長くていわゆる深窓の令嬢ってやつだった。あいや、ほんとお嬢様なんだけどね！

結衣さんに比べると雪乃さんは変化が少ないけど、雪乃さんは元々が超絶美少女なので仕方ないのかも。

結衣さんも小町的には超絶美少女なんですけどね！ 服とかで雰囲気すつごく変わるし、何着ても似合うし！

「小町ちゃん、テストは大丈夫そう？」

「はい！ ちゃんと勉強してますから！」

そろそろ中間テストなので、小町はちゃんと勉強してたりします。

”最近始めたこと”はそれでもやるけど、勉強もちゃんとやってるよ。

お兄ちゃんが帰って来たときにちゃんと小町が勉強してるってこと、見せないとだからね！

「なら良かった。小町さんも彼に似て文系の様だし、理数もちゃんとやるのよ?」

「もつちろんです! 小町、お兄ちゃんほど文系できないけどお兄ちゃんほど理数がダメでもないですから!」

「ふふ、それもそうね」

雪乃さんは、小町達の前では凄く笑うようになった。

本音で話せるから、らしい。お兄ちゃんという人が欠けてから、みんな自分を見つめ返す時間ができたから、それぞれ素直になれたのかも。もちろん小町もね。

お兄ちゃん、戻って来たら小町達の仲の良さに嫉妬するかもね?

……どちらかと言うと、お兄ちゃんはお兄ちゃんらしく一歩離れて見守つてくれそうだけど。

「そう言えば、ケットシー領はどう?」

「順調です。こつちには小町、シルフには雪乃さんと結衣さんがいて、お互いいい地位に

いるおかげか円滑に進んでいますしね」

「だよねー。サクヤさんもやる気だし。つてか、小町ちゃんリーファちゃんとも仲良いんだね」

「そうなのです！ リアルでも会ったことありますよ！」

「おおー」

そう、小町達も今VRMMOのアルヴ Heim・オンラインをやっていたりするので。きっかけは雪乃さんのお姉さんである陽乃さんからで、いろいろ悩んだ末に小町はお兄ちゃんの見てる世界が見たくてやってみることにした。

……すつごく面白くてはまってしまったのは秘密。

小町、ケツトシーって種族で結構偉いんだよ！

雪乃さんや結衣さんもお兄ちゃんの見てる景色が見たくて始めたら、二人ともゲームでも人気者でシルフ領では欠かせない人たちになってたり。

リーファちゃんってのは私の友達で、シルフの女の子。リアルでも遊ぶくらい仲が良

くて、お互いお兄ちゃんがS A Oに囚われてる被害者同士でもあったりする。

リーファちゃんのお兄ちゃんもまだご存命で、もしかしたらお兄ちゃん同士も一緒にいたりして。なんて笑ったけどどうちのお兄ちゃんはどうかだろうなあ……

「ヒッキーも一緒にやるって言ってくれるかな」

「小町がお願いすれば即答ですよ」

「かもしれないわね。種族は……まあ、シルフかケットシーね」

雪乃さん、それは暗にお兄ちゃんを手元に置いておきたいってことでしょうか……

小町が入学した年から、お二人がお兄ちゃんを好きすぎてびつくり。電話越しとは言えあのお兄ちゃんの本音に少し触れて、それからあんなことがあって……お兄ちゃんを欠けた二人がお兄ちゃんを欲するのは当たり前なのかもしれない。

でも、お兄ちゃんが帰ってきたらしばらくは小町にお付き合ひ願うのです。ほんとならもうお兄ちゃんを卒業しなきゃだけど、うちのお兄ちゃんはもう二年もいろいろ遅刻してるので卒業はしばらくお預け。戻って来たら当分は小町だけのお兄ちゃんदैいて

もらいます。

……だから、早く帰って来てね、お兄ちゃん。

「そういえば小町ちゃん、また告白されたんだって？」

「はい。即答ですよ即答。無理ですって」

……入学していきなり、お兄ちゃんを話題に話しかけてきた男子がいて。それ以来、小町は男子が苦手になってしまった。

よりによって、なんでお兄ちゃんの話題なの？ そんなので仲良くなれると思ってるの？

「あんまりしつこかったらサイズ奢らせて終わりにしますからね」

「……小町ちゃん、たまにヒツキーかいろはちゃんが移るよね」

「口だけですけどね」

そう、小町はお兄ちゃんと同じ。お兄ちゃんも口では酷いこというけど、ほんとに実行する時は誰かの為だから。

あの捻^テレお兄ちゃんは、そうやってなんだかんだ誰かのためにやる。

きつとゲームの中でもそうなんだろうなあ。お兄ちゃん、心も傷ついてないといいな

……

どうか、無事でいてね。お兄ちゃん。

Episode 6, part 10

— side アスナ —

74層の酒場で、迫るデュエル大会に向けて各ギルドやプレイヤー達が集まっていた。

参加こそしないもののにいて欲しいという理由で私も呼ばれていて、団長は一人座り、私はと言うと、どこに座ろうか悩んでいた。

団長、あのオウルって人が絡むと少し攻撃的になるからあまり近寄りたくないのよね
……

「おお、来てくれたんだね。影纏い君」

「大切な話もあるっつーから一応、な。大会には出ないぞ、俺は」

既に来ていたキリトくんや団長、私に遅れてやってきたハチくんに周りの視線が集

まった。四強の最後の一人にして、参加してれば優勝候補だったかもしれない。”影纏い”のハチマンがわざわざ来てるんだから、仕方ないかもしれない。

ハチくんは一瞬嫌そうな顔をして、それから少し離れた席に座る。ついでにその隣に私も座ることにした。

「こんにちは、ハチくん」

「うす」

ラフィンコフィン討伐戦からハチくんは一時期ホームに籠ってしまった。

クラディール、あの裏切り者のせいでハチくんが殺人をしてしまった……無理もない。私も、あの裏切り者に気づかなかったどころか連れて来てしまった自分に怒りがじわじわと来ていたくらいだから。

ハチくんはきつと頭がいいから、一人でいるとどんどん考え込んでいってしまう。

それは絶対に避けなくてはいけなかった。きつとあのままにしていたら彼は自分の求めてるはずの”本物”すら求めなくなってしまう気がして……私自身もどうにかなってしまいそうな心を振り払うためという気持ちもあって、ハチくんを無理矢理連

れ出すことにした。

私がそうしたいからする。いつかのハチくんが言っていた言葉を自分に言い聞かせて彼を連れ回した。

上手くいったかわからないけど、彼がこうして来てくれているのは少しでも効果があつたからって思いたい。

「ハチくんはやっぱり出ないの？」

「当たり前だろ。ああいうのは俺の担当じゃない。お前こそ出ないのか？ いい広告塔になりそうだが」

「私だって、別に戦いたいわけじゃないからいいわよ。……個人的にデュエルしてみた人はいるけど」

「そうか。まあ、そこは好きにやってくれ」

相変わらず、こういうところには興味の欠片も示してくれない。

私が戦ってみたい相手が君だって言ったら、更に嫌な顔をされるのも目に見える。以前言ってたけど、ハチくんはきつと私のリアルにも、私にも本当に興味が無い。キリトくん達だって、彼らがハチくんに近いからこうして成り立ってるわけで、やっぱり興味は抱かれてない。

……前途は多難だなあ……

「みんな、今日は来てくれてありがとう。デュエル大会について、大まかなルールを説明して行くよ」

主催であるオウルの言葉から、ルール説明が始まった。

武器は本来の物ではなく、鍛冶師に頼んだ攻撃の数値が極端に少ないもの。事故を防ぐ為でもあるみたい。

「ハチくんの抜刀術でもこれなら行けるんじゃないの？」

「抜刀術は武器の耐久を結構削るんだよ。焰雷だって結構な頻度でリズベットにメンテを頼んでる。」

すぐに壊れるだろうし、なんにせよ俺の戦い方は大会には合わない。一生後ろから一方的に攻撃されてみる。会場が冷めるぞ」

あくまで速さで戦うことに特化したハチくんは、確かに対人戦では無類の強さを誇るかもしれない。

後手から先手を取れて、その先手は基本的に不意打ち。ずるいとしか言えない。

完全なタンクの团长はともかくとして、他の四強の三人のうち、総合ダメージはキリトくん。次点で私。最後はハチくん。単発ダメージだとハチくんで、次点が私。キリトくんが最後の順番になる。どっちでも次点である私は、やっぱり他の三人ほど強くはないかもしれない。

ハチくんやキリトくんには「お前が一番怖い」なんて言われたけど。

「以上がルール説明だ。優勝候補はわかりやすいが、何が起きるかわからない。健闘を祈るよ」

いつの間にかルール説明が終わっていたみたい。でも、話はまだ終わらないようで、オウルはハチくんをチラリと見てから、軽く咳払いをした。

「そして、ここからも大事な話だ。先日、ハチマン君と会って話す機会があつてね、その時のふとした話から俺達は、このゲーム内に茅場がいるんじゃないか？って話が出た」

「えっ……」

「おい、あくまでそれは推論だ。結論付けるんじゃないよ」

ざわざわと騒がしくなる店内で、ハチくんがオウルを睨むようにして返した。

けれど、オウルは笑みを浮かべたまま止まらない。

「みんな！ このゲームに俺達を閉じ込めた犯人を、見つけたいと思わないか。命がけの攻略じゃない、リスクも少なくリアルへ戻れる方法の一つかもしれない。

だから、俺に力を貸して欲しいんだ。みんなで、俺と一緒に茅場 晶彦を見つけないか？」

「……あのバカ……結局はそこに行き着くのか……」

騒然となつて、みんながそれぞれ話し合う中でハチくんは一人呆れたようにため息を吐いていた。

「どういふこと……？」

「あいつの発言はな、わかりやすくこれからの方針の主動を自分に向けようとしてるんだよ。茅場を見つげるから俺に力を貸せ。つまり自分を中心に茅場を見つげよう。つてな。そうすればこれから先はあいつがメインで茅場探索だ。しかも、それでリアルへ戻ればその名声までいただける。思い切った方向転換ではあるが……そこで自分への評価しか考えないから、浅はかなんだよ、あいつは。これは問題しか起きない」

「問題？」

私が尋ね返すと、それにハチくんが答えるよりも早く団長が立ち上がった。

「オウル君、もしハチマン君が君と言っていたであろうことが事実だったとする。する

として、ここに茅場がいて、聞いているかもしれない可能性は考慮しないのかな？」

「だとしてもだ、ヒースクリフさん。そのリスクを背負ってでもやる価値はある」

「……お前は何かの主人公かつつの……」

よくわからない言葉を小さく言って、ハチくんは周りをキョロキョロと見回した。

……あ、もしかして。

「帰るつもり？」

「当たり前だ。不毛だろ、こんなもん」

周りの会話も、茅場を探すのに賛成か、このまま攻略をするべきかの話題で話し合っていた。

一瞬で、さつきまで一丸だったみんなが崩れそうになっていた。

「極限状態のここに、そんな甘い話があればこうもなる。ふとした拍子に出た話だからこんなことになるとは思わなかったけどな」

心底面倒そうな顔で、ハチくんは天井を見上げた。

冷静に分析して話してるけど、同時に苛立つてるようにも見える。

それは、そうよね……どうしてあの人——オウルはここでこんな足並みを乱してしまおうようなことを言ったんだろう。やっぱり、ハチくんの言う通り自分が目立ちたいから、なのかな。

「……なあ、ひとまずはデュエル大会を終わらせよう。中層とかの人たちにまでこんな話が触れ回ったら大混乱だし、まずはせっかく企画したこのイベントを終わらせよう。それまでに、各自で決めておけばいい」

ずっと座ってたキリトくんが立ち上がって、みんなに聞こえるように少し大きめの声で話していた。

「私もキリト君に賛成だな。ひとまずは保留でいいだろう。」

——ハチマン君、君はどう思っているのかね？」

「……いるかもしれないが、見つかるまでは思っていない。まあ、余計な混乱振り撒くよりはここで止めておくべきではあるだろう」

「………わかった。ではみんな、デュエル大会ではよろしく。」

そして、力を貸して貰えるって、信じてるからな」

急速に不安な空気となった店内は、オウルの言葉でお開きになって解散することとなった。

わざわざ隠蔽スキルまで使って我先にと出ていくハチくんと、それを見送る私。

……クォーターポイントも近いのに、こんなので大丈夫なのか、今まで以上に楽観視できなそうだった。

——E p i s o d e 6 , F i n .

Episode 7, part 1

「そろそろデュエル大会か」

あのオウルの発言から三日ほど。騒然となつてしまつた攻略組にヒースクリフがひとまずの攻略を中断することを宣言して、とりあえずデュエル大会へと全員が意識を向けていた。

俺を除き、な。俺は一人黙々と迷宮攻略中だ。できる限り進めておいて損はないだろう。

どうせ茅場を見つけるのなんて不可能に近い。なら、攻略が再開した時に足踏みしてよりはいいだろう。

「茅場の正体……か」

一理はある。オウルのあの発言は時と場合、そして場所を選べば賛成できない言葉ではなかつた。

が、不特定多数が聞きすぎてる上に攻略組というのは中層やその下、なんとかこのゲームを生きているプレイヤーに比べて強きこそ抜きん出ているものの、対比してメンタルは割れやすい。

全員、心のどこかにヒビが入っていて、ふとした拍子に割れてしまう危険性があるのが攻略組だ。

俺を例に挙げれば、ラフィンコフィン討伐の際のあれや、卒業式を過ぎた辺りのことだ。

感情に鈍い俺がこれなのだから、他の連中はどれほどなのかわからない。

オウルは、それに鉄塊を落としたことになる。

「最悪、茅場が雲隠れか」

もしいるとしたら、ラスボスなんて形で最終層に現れるくらいはやりそうだ。

が、これで攻略が進まなくなつて茅場が見限れば終わり。そんなことをしなくとも、疑心暗鬼に駆られ同士討ちなんてことも始まりかねない。

あそこで無理矢理にでもオウルをどうにかすべきだったのかもしれないが、そこで変に言えば俺が茅場にされて、異端審問して終わり。帰りがかった方のも本音だが迂闊な

ことを言える状況でもなかった。

まったくもって、巨大な鉄塊を落とされた。

「……………ん？」

不意にメールが入った。送り主は……………ヒースクリフ。
血盟騎士団のホームへ来て欲しいとのことだった。

「……………嫌な予感しかしないんだが……………」

それでも向かう辺り、俺の精神もおかしいのかもしれない。

……………そりやおかしくもなるか、こんなところに二年近くもいれば。

「よう、ヒースクリフ。……………と、アスナか……………？」

呼ばれて向かった先にいたのはヒースクリフと、いつもの白装束ではない、青を基調とした軽装の鎧を着こんだアスナだった。

「こ、こんにちは、ハチくん」

「呼び出しに応じてくれてありがとう、ハチマン君」

「……おう。で、こいつのこれはどうしたんだ？」

「それも込みでこれから説明するよ」

椅子に座ったまま、テーブルに肘をつけて手を組んで、いわゆる「司令」のポーズを取ってヒースクリフは俺を見た。

「……いや、俺初号機に乗るわけじゃないけど。」

「今、攻略組の攻略はかなり厄介なことになっている。それはわかるね？」

「まあ、な。犯人捜しなんてやったところで終わりはしないだろうからな」

「そう。そして、オウル君。彼のやっていることはこのゲーム……ひいては攻略組に相応しくない」

「………どういうことだ？」

「私は私なりに調査させてもらっていてね。どうにも、軍の装備や金策、それらにはかなり無茶な遣り繰りをしていたようだ」

ヒースクリフの言葉は、その端々に妙な違和感を覚える。

立ち振舞いや存在の仕方とか、気味悪いくらいよくできていて、ゲームをしつかり楽しんでいて、かつ攻略もちやんと進める。まるで、全部ロールプレイなんじゃないかって思えるくらいでどこか雪ノ下さんを思い出させる。間違いなくああいうタイプの人間なのだろうな。

「無茶な遣り繰り？」

「軍が攻略に出るようになってから増えた死者は1000人ほど。それも、この短期間で急にだ」

「……なんだってんだ、それが」

「どうにも、軍内における中層や下層の者に金策などをさせているようなのだが、レベルやマージンなどを一切気にしないで行かせているようだ。このゲームは、ゲームであつてリアルである。最悪の結果は君も理解できるだろう？」

それに加え非攻略のただ暮らしているプレイヤーから無理矢理な搾取。なるほど、金策としては有効ではあるかもしれないね」

「おかしいだろ、誰も疑問に思わないのか？ 死ぬ危険くらいわかつてるじゃねえか」

「煽動と言うのは、時に洗脳にまでなる。君もネットゲーム経験者ならわかるだろう？ 誰もが全員君や私達のような知識や技量を持つてはいないと。この状況では、すがりたくなるものもあるのではないかと」

「……なるほどな」

攻略について疎い中層や下層プレイヤーにいい夢見せて、攻略組に復帰させる前準備をさせる。

で、潤沢な資金で装備を整えておそらくレベルが高い順に攻略組行きにしているんだろう。

「階級もあるそうだね、軍に対してちゃんと税を納め、貢献していくと上がるらしい」

「そりやずいぶんなことだ。つか詳しいな、お前。どこでそんな情報集めて来たんだよ」

「いろいろと、ね。それなりに使いはしたがね」

なんていうか、やっぱりヒースクリフからは雪ノ下さんの雰囲気を感じる。

雪ノ下さん以上に自分を隠すの上手そうだが。だって、感情表現が過剰なこのゲーム

で表情を崩さないんだからな、こいつ。

「……まあいい。で、俺を呼んだ理由は？」

「この大会中に、なんとかして攻略組を元に戻しておきたい。内部分裂なんていう結果は私の望むところではないからね。故に、その原因となったオウル君には申し訳ないが、失脚を願おうと思う。その足掛かりをアスナ君に頼むつもりだが、その手伝いをしてほしい」

「アスナは、それでいいのか？」

「……うん。いろいろ考えて、ちゃんと決めたの。私は、ゲームをクリアしたい。それに、私達の敵は茅場本人でしょ？ いるかないかわからない人じゃなくて、このゲームの制作者本人じゃない。なのに、このまま全員疑心暗鬼になって何も進めないなんて、そんなの嫌」

「君も言うようになったね、アスナ君。それはとても良いことだ。改めて、今回の件をお

願いするよ」

「はー」

「で、だ、この依頼、受けていただけのかね。ハチマン君」

「……まあ、今回の原因を作っちゃまった一人でもあるしな。攻略が進まないのは困るのと、オウルに關しても思うところはあつし、受けておく。失脚とかまでは知らないが、少なくとも、このままじゃまた大きく人が死ぬ」

それも、ロクでもない理由で。

「ありがとう。君とアスナ君に頼めれば安心だな。二人は戦闘面もだか、それ以外でも相性が良い」

「そ、そうですか……?」

「いや、どこがだよ……妹に振り回されてるような感じだぞ、こっちとしては」

……おいアスナ、その殺気が籠った目で睨むのやめろ。

「はは、言ってしまうえば、ハチマン君は比較的誰とでも相性は良さそうだが、前提としてハチマン君の性質を多少なりとも許容できないと、だがね。君を理解してくれている人と組ませた姿を、一度くらいは見てみたいものだよ」

「……なら、とつととゲームクリアしないとだな」

小町となら、確かに凄く安定したコンビは組めそうだ。

雪ノ下や由比ヶ浜はどうだろうな。やつと今、理解したいと思えた二人だから、まだ先かもしれないが。

キリトやアスナとは単純に同じ死線を潜りすぎて距離感が出来上がってるって感じか。

あいつらはその距離感を結構ぶっ壊してくるが。

「では、君達の働きに期待しているよ」

「まあ、ほどほどにな」

「行きましょ、ハチくん。では、失礼します。団長」

こうして、攻略組の現状を回復するための依頼を受けた俺は血盟騎士団のホームを後にしたのだった。

Episode 7, part 2

「……で、だ。これからどうするんだ？」

「えっと……18層で団長が協力者を用意してくれているみたい。まずはその人と会わないとね」

「なるほど」

「……あの、ハチくん。どうかな、これ」

「あ？ あー、そういやなんで服変えてるんだ？」

アスナは今いつもの服ではなく、色合的には俺に近い青を基調にした軽装の鎧だ。なんとなく察しはつくものの、一応理由を聞いてみることにする。

「血盟騎士団の服だと、目立ちすぎちゃうからって。

性能は悪くないものだと思う。その、変じゃないかな」

「別に大丈夫だろ。お前、見てくれはいいんだしよつぽどのものじゃなければだいたい似合いそうだがな」

「うわー、なんか凄くなげやり……」

「俺にそういう話を期待するなよな。事実を述べてるんだからいいだろ」

「それはそうだけど……ハチくん、ぼつちを自称するわりにこういうの耐性高くない？」

歩きがてら、やたら話しかけてくるアスナを横目に俺は一息ついた。

耐性か……耐性って言っつていいものなのか。

「前に言ったら、俺のいた部活の部長。そいつが自分で自分のこと「私、可愛いから」とか言うやつで、しかも実際学校一の美少女扱いされてるんで言い返せなくてな。まあ、

そういったものには耐性がある」

雪ノ下も由比ヶ浜も、見てくれに關しては間違いないどころかも凄いらな。

「……ふうん」

なんだよ、その半目ってかジト目みたいなのは。

いや、ぼっちを自称する俺がそんな知り合いがいるのはおかしいかもしれないが。

「まあ、俺とそいつは友達ですらなかったけどな」

友達ですらなかった。なかったけれど、俺の中では想像以上になくはならない存在だった。

雪ノ下も由比ヶ浜も、あの場所も含めて俺は本物を欲した。

男女となると色眼鏡もあるし、確かにあの二人は美人だが、そんなの關係ないと、今の俺なら断言できる。

「大切な人なの？」

「少なくとも、俺がこのゲームをクリアしたい最も強い理由であることは間違いない」

アスナはそれつきり、何か考えてるようで話さなくなっていた。

いや、俺もその方が助かるからいいんだけどさ。

「で、来たはいいが協力者ってのは……」

「よう、お二人さん」

「待ってたゾ、ハツチ、アーちゃん」

「エギルにアルゴ……お前らか、協力者ってのは」

「そういうことだ。俺はデュエル大会に出ないからな。とは言え、ヒースクリフから要請を受けたわけじゃない。……一応な」

「どういふことだ？」

「話すと少し時間がかかる。場所を移そう」

18層にて、エギルとアルゴに合流した俺達は、ひとまずエギルの案内に合わせて喫茶店へ向かっていた。

なるほど凄い。目立つはずのアスナがいつもの格好でないだけでここまで溶け込めるのか。

血盟騎士団のユニフォーム、目立つからな……

「で、どういった理由でお前らがここに？」

「オレッチはアーちゃんのとこの団長からの要請だナ。オレッチの知名度的に大々的な動きはできないかウ、ギリギリまで名前を明かさないように動かせてもらってるけど」

ナ

なるほど。だからヒースクリフも協力者としてしか言わなかったのか。

まあ、鼠のアルゴが軍を探ってるなんて、こいつが表で活動すりやすぐに広まっちゃう。それほどまでに攻略組にとって重要な情報屋だからな、この鼠女は。

「それで、エギルさんは？」

「ヒースクリフからではなかったんだが、遠回しにあいつからってことになるのか。

——俺は、ユリエールから救援要請を受けた」

「……意外な名前だな。あいつ、シンカーに代わって一応オウルと軍の頭してるだろ」

「そのシンカーを助けてくれ、とのことだ。事情は一切知らん」

「おいおい、さすがに適当過ぎないか？」

「仕方ないだろう。ヒースクリフが調査のついでにユリエールとの連絡手段を見つけたとかで、自分では動きづらいからと俺にユリエールのメールIDを教えてきたんだ。どうも、ユリエールもシンカーも身動き取れないようだな、メールすらともに交わせない状態だ」

「……お前の上司、実は一人で事足りたんじゃね？」

「さすがにそれはないと思う……けど、団長、ずいぶん動いてたのね」

アスナも全然知らなかったらしい。いや、あいつのフットワークの軽さはなんなんだよ。

まるで、全部ヒースクリフの思惑通りに事が進んでるんじゃないかって錯覚にすら陥る。

間違いなく雪ノ下さんのような天才だ、あいつは。

「……天才、か」

「ハチくん、どうしたの？」

「……いや、なんでもない」

茅場も天才なんて言われてたな。なんてふと思い出して、しかしそこから先の思考は首を横に振って霧散させる。疑心暗鬼の元を叩かないといけないのに、俺が疑心暗鬼になるのは問題だ。

ひとまずは、ヒースクリフの言葉を鵜呑みにすることにしよう。信用？ ばっか、ああいう奴の言葉ほど信用できるかっての。

「で、どうするんだ？ ユリエールに話を聞くにも、あいつがいるのは始まりの街だろ？ 軍の本拠地に殴り込みは面倒だぞ」

……それに、圈内とは言え、人間に切っ先は向けたくない。間違いなく不快になる。それを考えても、直接殴り込みに行くのは難しいと言える。

「その為のオレッツキ、ハッチ。まずは始まりの街の教会にいるサーシャってプレイ

ヤーに会うとイイ。低年齢層の、このゲーム開始から精神に異常をきたしてしまった子供のプレイヤー達を保護、まとめている人だ。ユリエールもそこに出入りしてルらしい」

「なるほどな。お前らはどうするんだ？」

「オレツチとエギルンは軍に正面から行ってみる。とは言え、オレツチはあくまで裏方だガ」

「というわけで、これからまた別行動だな。ハチマン、アスナ、よろしく頼む」

「——はい！」

「なあ、エギル。お前はどのようにしてこれに関わる？ いや、俺が言えたことじゃないが、お前には無縁だろ？」

ずっと、エギルと会ってから聞きたかったことを聞いてみる。

俺は一応、事の発端という、この件に関わらねばならない理由があるし、攻略再開の
為もある。オウルについては知らん。ヒースクリフが好きにやるだろ。

アスナは血盟騎士団の副団長として、アルゴは情報屋の仕事として、なら、エギルは
？

「ばか野郎、攻略をこんなところで足止めにされて困るのは俺だつて一緒だ。

それに、始まりの街の様子を見たことあるか？ あるならわかるはずだ。あれはダメ
だ。これ以上軍が肥大化すれば余計に迷惑を被るプレイヤーが出る。攻略の為とは言
え、その為に他の人が苦を強いられるのは間違っている。あとはあれだ、誰かを助ける
のに理由があるか？」

「お前はどこぞのRPGの主人公かよ。

……まあ、理由はわかった。人手はいないよりいる方がいいからな」

「そういうことだ。というか、ハチマンこそ面倒くさがってこういうのは協力しなそう
だが、どうした？」

「……俺にもいろいろあるんだよ」

理由をしつかり話せば、いらん協力を買いかねない。

ギブアンドテイク。こういうのはお互いの利害の一致のみでやりくりした方がいい。

「じゃあ、一旦解散だな。エギルン、行くゾ」

「……いい加減その呼び方やめないか？」

そういつて先に立ち上がり去っていくアルゴとエギルン。エギルンか……ぶつ。

「ハチくん、ひつどい笑顔……」

「だつてお前、エギルンはずるいだろ……」

「だからつてそんな笑顔にならなくても。まったく、私達も行くこう？」

「あいよ。始まりの街、だな。圏内つつつても、俺は戦闘はする気ないぞ」

「わかってる。ハチくんの分の戦闘も私が請け負うから」

「……いや、戦闘しないこと前提で行こうぜ」

面倒くさがつてるとか思ってるのか、アスナの返答が凄く早い。いや、面倒くさがつてるとか思われた方が楽ではあるんだが。本当の理由なんて、クラデイルのことを引き摺ってるこいつには話せたもんでもないしな。お互い、同情なんて嫌だろう。

「それは軍の人次第よ。さ、行きましょ」

「……何事もなければいいんだが」

自分で言っても無理だとわかるひとりごとのため息を吐いて、俺もアスナの後を追って喫茶店を出たのだった。